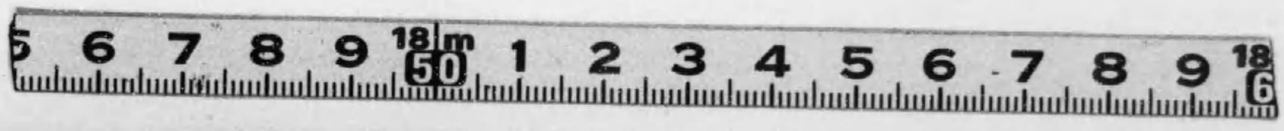
511
114



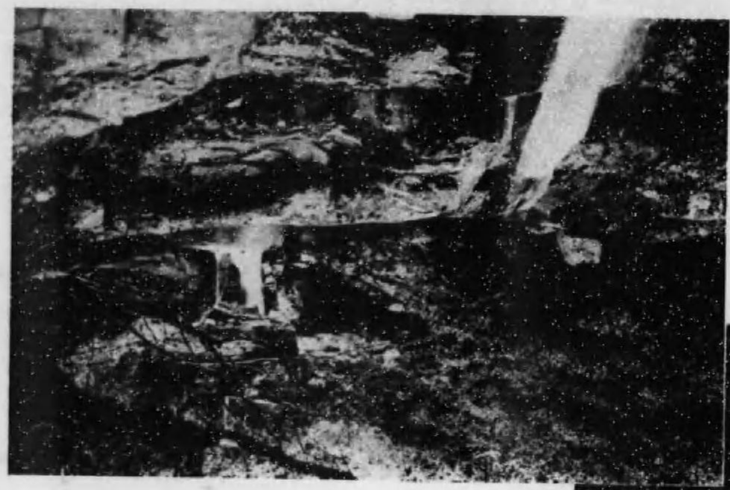
A 227

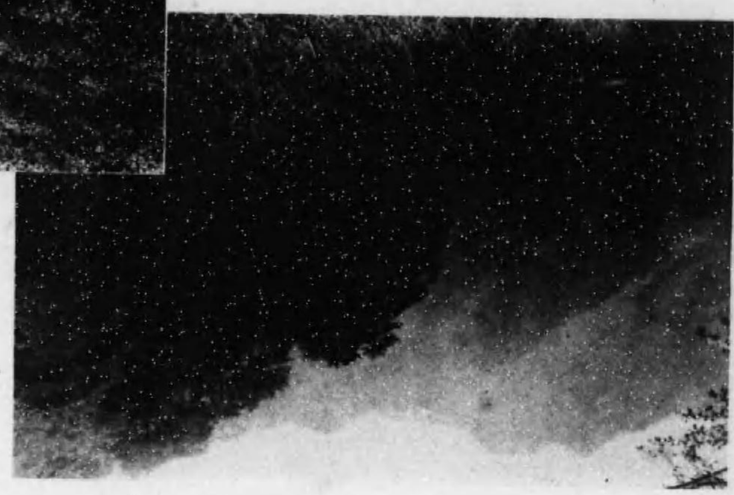
山全集

大正
14. 9. 18
内交

下圖は寺名の因りて起れる七寶瀧中の二瀑にして入山の途上に在り。水聲不斷の廣長舌を擧げて白玉の讃歌を唱へ、四時明王を供養せり。

上圖は犬鳴山燈明ヶ嶽をふくむ一部の景色にして脚下溪流を距てて本坊と斜に相對す。其の幽邃は以て故人の心境を偲ばしむる莊嚴なり。





きさ非類なり。

足ヲ踏入ルの心淵ヲ湛ヘし樣に思はれる。其の圖畫は眼ヲ射本ヘて瞬ヲ閃アテ本。

ふうに固景の雄一ちくて

ヲ繪ヤ田獵山御大の圖王

王田峰四ハ峰ヲ爆ヲ爆ヲ王の

自ヘていい拳ヲ岳是嶺の嶺ヲ

人山の嶺王に窓に水藥

ヘて二に嶺の中巖費ヲる

ル驚ヘて自の岳今は圖上

ヲ舟養ヲ。

下圖は大正十二年故人が了德院日下僧正にあてたる書翰中の一片並に其の筆蹟なり。

上圖は大正元年印度拘尸那揭羅涅槃地に生きながら埋葬する目的を以て著者が生涯中唯一度撮影せる單身の小墓なり。

小田切氏

画中唯一の貴重なる肖像画である目的を以て著者が特に謹厳端整なる面を選び出だされた大正元年当時の大臣

一世に其の業績を謳はれたる審議中の傍聴人が大正十二年六月

311-114

松山、東條隆哲師逝いて後數月、知友相謀り松山會を起し、故人の遺稿を蒐輯して松山全集の發刊を企つ。

蓋し松山、識見高邁、機鋒俊秀、その透徹せる思索と眞摯なる信仰とを以て、瑜伽の大道に突進するや、卓躒颯爽、予等同人の感嘆措く能はざるものありき。生前時にふれて稿を作せるもの、係はるところ教理、信仰、安心、藝術、思藻等數十篇の多きに達し、而かも是等の文章は悉く皆、幽玄なる哲理的思索と、豐潤なる藝術的情操と、貫くに熱烈なる感激を以てしたるもの、また實に故人が尊き宗教的體驗の餘に出でたるものならずんばあらず。

松山嘗て泉南犬鳴山の後董に擬せらるゝや、一日往いて始めて

見る、地僻境幽、謂く若し山猿出で來たらば我れ其請に應ぜんと、而して盡日終に見ず、曰く我れ本尊明王の冥慮に副ひがたしと、乃ち其請を辭す、その夜山房に宿し翌旦曉起、前山に對すれば、何の兆ぞ群猿嬉々として樹梢に戯る、松山忽ち掌を拍つて曰く我れ諾すと、亦以て彼れの人と爲りを想見すべきなり。晩年宿痾を養ふて犬鳴山に歸臥し、日夕猿鶴を友とし風月を弄し悠々自適、また大疾の身にあるを知らざるもの、如し、其再び起つ能はざるを知るや、後事を遺命し懇ろに左右に別を告げ、掩然として寂を示す。

方今我教界、口に深遠の教理を談し、手に巧妙の文章を作し、或は講學に、或は布教に、或は宗政に、所在其人に乏しからず、しかも稜々たる道骨を有し熱烈なる信念を湛へ、眞に密家の道器として推稱

するに足るもの、抑々幾人かある、想ふて茲に至れば我松山の逝去、實に寂寥の感なき能はざるなり。

松山逝いて早く既に一周年、今や復かれの風丰に接するに由なし、而かも彼れの眞面目を偲び得るもの、ひとり此松山集あるのみ。

道友長谷部隆諦師主として編輯の任に膺り、日下義禪、釋玄空の兩師之を援助し、今や「松山全集」の刊行漸く成るを告ぐ、乃ち一言を卷首に題すと云爾。

大正十四乙丑歲八月下浣

導知　方外　藤村密幢謹誌

凡例

一、本書各題目の前後次第に關して、著者の遺志によらば音調章を最初に置く可き筈なるも一般讀者の便宜をも商量し今は暫く目次の如き順序に配列せり、蓋し柔より難に趣入せむとの意に他ならず。

一、著者生前の意志を尊重し、文章としての一句一語をも、和漢文字を奇妙に連結せる訓讀をも將句點の一だも訂正するを避けたり、但し本書の原文を掲載せる諸誌に已に多くの誤植あり、其の明かなるものに限りて訂正せり。

一、本書を全集といふも純政治問題及び時々評言に屬するもの十數項を省略せり、此れ一は唯隨時的の斷片なると他は稍個人的感情に渉る場合ひ無きをも保しがたきとに因る。特に著者の案に成れる中學宗部教科書卷三は教科書なる所以を以て本書に集錄せず、共に大方讀者の諒を乞ふ。

一、本書の編纂に際し最初より重要なる數文を看出す能はず、乃ち誌上の廣告によりて數氏の寄送を受けたるも、特に作州守安氏(舊姓衣畑)によりて補缺せられたる『呂律に就て』の一文は著者晩年の研究骨目としたるものの一小篇なり、深く氏の厚意を謝す。

一、各文の年代月日に至りては各章の分類と縱横に錯綜し却て繁に雜を加ふるの恐れあり、之れ大約に記入しをきたる所以なり、讀者の諒を乞ふ、蓋し其の章々に在りては年代順に配列せること言ふを待たず。

一、本集の校正に際し了德院義範、義芳二子の助力に負ふところ頗る多し、深く其の勞苦を謝す。更に興敎書院主人清水氏は出版の始終を通じて殆義俠的に斡旋盡力せられ、時に編輯上の注意をも與へられたり、厚く其の高意を謝す。別して著者の知人たる東京前田某氏は『松山全集』なる文字を揮毫せられたり、共に謝意を表す。

大正十四年九月一日

高雄山神護寺にて編者記す

松山全集

目次

第一　高祖章……一
高祖託胎の奇蹟……一
永劫の誕生……九
高祖の影像……一四
末徒の見たる高祖……二一

第二　三寶章……四九
種三尊……四九
三乘の興廢……六〇
五種の供養……七〇
佛身觀……八五
法華經と觀智儀軌……九四
卽身成佛……一〇六
南山之御陰棲……一一六
入定……一二四
高祖我れと共にあり……一三〇
獻花……一三六
密敎の悉曇……一四三
加被力、定力、三昧力……一五七
ボナヴェンチュラと六無畏
時代精神と阿字
阿字之攝理

ぞ字無捨施……一六二
ゑ字命息……一六七
眞言の功德……一七六

第三　信仰章……二〇九

告白せざる信仰……二〇九
分不相應なる信仰……二一五

第四　藝術章……二二九

吾徒の聲……二二九
藝術と眞言宗……二三六
國民的宗敎……二四五
密敎に於ける藝術の位地……二五二
密敎より見たる近世の學文……二六五
藝術的生活……二七一
現世祈禱……二七九

第五　學思章……二八一

覺海師の安心……二八一
聖寶尊師……一九〇
應其上人……一九七
二種の信仰……二一一
藝術に往く宗敎……二二九
事々に顯はるゝ宗敎……二八二
母としての宗敎……二八八
未だ文學に現はれざる宗敎趣味……二九九
逝ける人より得たる敎訓……三〇八
權威ある宗敎……三一五
死と悲哀……三一九

佛は說法し給はず……三三一
道學先生……三三七
修養の解……三四〇
新しき懺悔……三四八
超凡之道……三五三
器物の力……三六一
天意と人事……三六七
安心なき信仰……三七二
妙な荷物……三七七
長き人生・短き人生……三八二
罪の人……三八七
富人の道……三九四

第六　思藻章……四〇〇

自分の爲也……四〇〇
魔王……四〇六
役に立たぬ人……四一二
法悅……四一七
雨を祈らず……四二三
堂守り……四二八
在せる天皇……四三六
握り拳……四四〇
辻說法……四四四
福俵……四四八
飴のやうな身體……四五一
奉公人……四五六
飴うり……四六三
襖の畫……四六六
愚痴のしづく……四七〇
高野ひじり……四七五
御僧……四七九
誘惑……四八二

秋思……四八五
新尼法師……四八八
冬の一日……四九一
四國……四九四
奈良の一日……四九六
參殿記……五〇四
紫苑日誌……五一三
見神は密敎の常事なり……五四二
夏の庭……五四六
折り〳〵草……五四九
修養日誌……五五一
信念と儀式……五五四
卽興……五五六
金剛山……五五九
阿闍世王の惱み……五六三
枯葉落葉……五六七
讃頭訓……五六九
うたかた日記……五七三
習字……五七九
野趣……五八三
蛇と蝶と……五八五

第七　音調章

呂律に就いて……五八九
五音五調に就いて……五九四
ンの音調……六三四

第八　布敎章

布敎法の研究……六六七
布敎論……七三一

第九　安心章

密敎研究の分科……七三一
密敎研究に就いて……七三八
一、眞言宗と科學の岐れ道……七四〇
（眞言宗在存の意義）
一、眞言宗より見たる人生……七五四
（修養の道）
一、安心と信仰……七七四
（地獄極樂觀）
一、眞言宗と社會……七九七
（弘法大師は最後の生存者）
一、祭祀……八二〇
（曜宿—方位）

第十　檢討章

白雲に與ふる書……八四五
舊佛敎徒に警告せんか……八五四
學生訓に就いて……八五八
樂觀したり悲觀したり……八六五
戰爭……八六九
南海、山猿生に答ふ……八七四
獻花に就きて……八八四
龍華山人に答ふ……八八六
再び東條道兄に質す……八九二
再び龍華學人に與ふ……八九五
今の安心研究說に就て……八九九
雙棲山人に與ふ……九〇二
東條隆哲上人に答ふ……九〇九
改めて雙棲山人に申す……九一五
以上

松山全集

第一　高祖章

（自明治四十年至大正七年頃）

高祖託胎の奇蹟

寶龜五甲寅歳六月十五日に高祖大師が降誕あらせられたといふ事が、人間世界に取りてどれだけの一大事變であつたであらうか。

一日本の歴史上に最大の人格を得たこと。

二人格にしてさながらに佛菩薩の萬德を凡夫の目前に體現せられたる神格が此の時出で給へること。

三六識生活の全制約を人類世界に遺漏なく陳展せられたる人は此の時生れ出で給へること。

現代の文明は餘りに六識知解に固執して居る爲めに此の最上無比の法門に接することを不可

能ならしめたが一度八識生活に觸れたならば現代文明は根柢から改造せねばならぬ。其れ程の一大事が此の時完成せられたこと。

四、千有餘年後の今、而も物質文明の全盛期たる現代に於いて猶さながら生ける人として人心を支配し崇拜の本尊を成せる人は此の時生れ給へること。

五、日本文化の母たる人は此の時生れ給へること。

六、日本國中の景勝の地に伽藍を建て、風景を莊嚴し遺跡を殘し、土地の風光と存在の意義を改造し、以て世道人心を感化し給へる人は此の時生れ給へること。

七、病める人、貧しき人、落魄せる人、絶望の人に無上の慰安を與へ御名を殘せる人は此時生れ給へること。

八、强ひて背き、嗤ふ人には今も現に懲罰を降して世の誡を示し給ふ人は此の時生れ出で給へること。

九、宗旨を開いて宗旨に超越し給へる人は此の時生れ給へること。

人類、殊に日本國民に取りて高祖大師の降誕ほど世道人心に偉大なる事件は曾つてないのである。左程偉大なる事件が國民の上に降つて來る時に何等の前兆も奇瑞もないといふやうなことがあらう理がない。なかつたと云ふのは有つても其れと判斷する力が人類には乏しいと云ふことである。大地震のある時は前兆のある理である。前兆を知らぬ中は有るものをないと信じて居るが、知る法が判れば慥かにある理である。日常の實驗に照しても遠方から書面の來ることを豫知したり面白からざる事が偶然に突發したり、喜ばしいことが起つたりする時には必ず前兆がある。少し訓練をして居つたならば大抵のことは直覺的に豫知することができる。訓練せぬから豫知せぬまでゝある。此の大聖の降誕と云ふ最大の事件に母公が何等奇瑞前兆に接せぬと云ふことがあつたならば、其れこそ奇怪である。今は慥かに高祖託胎の奇蹟があつて初めて此の一大事件が周備したのである。

承和元年及び二年の御遺告に依れば、

父母の曰く我が子は是れ昔し佛弟子なるべし、何を以てか之れを知るとならば、夢に天竺國より聖人の僧來りて我れ等が懷に入ると見たり、是の如くにして姙胎じて産生せる子なり。然れば此の子を寶して將に佛弟子と作すべしと、吾れ若少の耳に聞きて喜んで泥土を以て常に佛像を作り云々

天竺の聖僧が懷に入ると夢みて姙胎せられたと云ふことが、小説以上の奇跡であつて而も其れが合理的に事實を成して居るから不思議である。密教の傳來が天竺と支那と日本との三國に跨つて居る爲めに奇跡の徑路が亦た三國に亙らねばならぬ。自然の理法である。

高祖大師の前生は不空三藏であることは高祖大師と三藏との奇しき因緣を辿れば少しも疑ひのないところである。

不空三藏は天竺の人にして、

初め母氏相者に遇ふ。相者の曰く爾ぢ必ず菩薩を生むべしと、言ひ已つて相者忽ちに失せたり。數日の後果して夢みらく、佛微笑して眼光頂に灌ぐと。既に寤めて猶ほ覺え、室の明かなること晝の如し、因つて孕めり、年甫めて十四にして闍婆國に於いて金剛智三藏に見え、十五歳にして出家し南溟に侍し隨ひ、船に乘じ險しきを越えて影の形に隨ふが如く、開元八年(唐の玄宗皇帝)に東洛に至り、言は唐梵を善くし師金剛智に隨うて譯語して精通したり。開元二十年師入滅の後、詔有りて南天竺龍智阿闍梨の所に使ひして、梵夾五百餘部を得て天寶五年(玄宗皇帝)唐に歸り、翻譯するところの經百五十卷なり。……(付法傳第六祖不空三藏の條取意)

寔に不空三藏は支那に於ける密教の大成者にして、超えて三覺に諧り、竺ながら見取を離れ萬行を修持して常に化滅を示す神變の德高き人であつたから、東生の誓願は深く心に懷んで三朝の厚恩を痛く戀慕せられたのである。大曆九年(唐の代宗皇帝)に至り、上表して

積恩重疊して日月相ひ繼けり。復た精懇すと雖も豈に萬一を酬い奉らんや。露電駐まり難く蒲柳衰へ易し。一たび枕に伏してより、春より夏に往きぬ。陛下(代宗)深く睠みて存問せらるること再三なり。中使名醫道路に相望むも、但だ膏肓の病なるを以て針藥と雖も生き難し。……(大曆九年六月十五日の不空三藏上表文)

不空三藏は唐の大曆九年六月十五日、一心に觀行し、右脇累足して恬然として薨去せられた、此の日は正に日本の光仁天皇の寶龜五年六月十五日にして高祖大師御誕生の當日である、而して不空三藏は天竺の聖僧である。高祖大師の母公の夢告と符節を合はすやうである。三藏の此の再生は因より容易ならぬ大誓願であるから、一たび枕に伏してより春より夏に往きて苦惱せられたのは肉に生きるものゝ通るゝべからざる常道である。病なき吾れ等すら生き續けて居る生の努力が奈何に苦しき大難であるか、少くとも天才の生は病者の生に似たところがなくてはならぬ。露電駐まり難く蒲柳衰へ易しとは向上の努力に疲れたる聖者の寬境である。天才ならざる凡人は多く經驗することすらない境地である。復た不空三藏が東生(日本に再生する)の因緣を促がされたることは決して一日の所以ではなく師の金剛智に隨身の機からの長き因緣であらねばならぬ。

律相洞かに開つて知つて住まらず、聲明論を學び瑜伽宗を窮めんとして欲して以て師(金剛智)に白す。師未だ之れを許さず。師夜夢みらく佛菩薩の像悉く皆な東行すと。乃ち曰く我が夢みるところ法藏付すべきこと有りと。遂に授くるに三密を以てすと。(付法傳)

金剛智三藏夢に佛菩薩の東行を見て不空三藏に三密を許し、不空三藏の東生を豫見して滿悅し給ふ。金剛智三藏の深意も亦た此の託胎の奇蹟を織り出す豫行であらねばならぬ。聖人の奇蹟は決して偶然ではない。凡て豫行がある意匠がある。

阿字界の生活は一大意匠の原型であるから、阿字界の生活が奇蹟の如くにして實は當然の理路を踏み意匠を着々實現し來るものである。併しながら同じ年の同じ月同じ日に一處に逝き一處に生きることは生の一事に於いて何んの支障もなく行はるゝ、更生の一轉化であるが、法門の傳承に於いて

缺陷がある。法脉の一時の斷絶が出來る。茲に於いて然るべき傳持の聖者の緊要なるものとなる。則ち恵果和尚と高祖大師の法脈の傳承が不空三藏再生の爲めに更らに奇しき一大意匠中の豫行であらねばならぬ。不空三藏に數萬の弟子あり、允可を受くるもの八人、中に就いて兩部の師位を受くるものは恵果和尚一人である。高祖大師早くも三十一歳の歳に達せられた延暦二十三年六月に入唐せられて、翌年和尚に青龍寺に於いて三十二年にして再會せられ、六月上旬より八月上旬の間に於いて兩部の祕法遺すところなく傳承せられると、和尚は早くも其の年の十二月十五日遽然として入滅せられた。和尚の大任は高祖大師の法門を傳讓せられたことに於いて圓滿したのである。一足遲るゝも高祖大師は和尚の遷化に間に合はずして永く祕密の血脉は斷絶せねばならぬのであつた。『來ることを我が力に非ず。歸らんことを我が志に非ず。我を招くに鈎を以てし、我を引くに索を以てせられた』ので、全く阿字界の豫ての意匠に餘義なくせられた豫定の値である。

和尚掩色の夜、境界の中に於いて弟子(高祖大師)に告げて曰く、汝未だ知らずや、吾と汝と宿契の深きことを、多生の中に相共に誓願して密藏を弘演す。彼此代る〳〵師資と爲ること只だ一兩度のみに非ず。是の故に汝が遠涉を勸めて我が深法を授く。受法云に畢んぬ。吾が願も足んぬ。汝は西土にして我が足に接し、吾れは東生して汝が室に入らん。久しく留まること莫れ。吾れ前に在りて去らん……(恵果和尚の碑の文　性靈集)

進退は人の能くする處でなくして去ると留まるは凡て阿字界の意匠に隨はねばならぬ。夢と現と現實界と靈界と天竺と支那と日本と一連の數珠を成して、祕密曼荼羅の大莊嚴を慈尊の下に迄相續爲ようといふのに決して簡單なる譯に行くものでない。込み入つた而して奇跡で綴ぢ合はされなければならぬ。隨つて天竺の聖僧たる不空三藏が來りて母公の懷に入ると夢みたるは不思議でない。合理的の事實である。同じ年の同じ月の同じ寶龜五年六月十五日に支那に於いて天竺の聖者が入滅し、日本に於いて高祖大師の生れるのは當然の理路である。而して恵果和尚の一代の意義も一層明白に成つて來た譯である。茲に少しく常道に外れるやうに解すれば解せらる一事件がある。例ならば此處に死し彼處に託胎するのであるから、不空三藏の遷化は高祖大師の託胎の日でなければならぬと解するのである。が併し此處に死して同時に彼處に託胎するならば常人の作法にして、生死の因緣に引きづられて往くものゝことである。今は聖人の轉生である。此の相違があつてこそ更らに深遠なる意味を成すのであつて、此れがなかつたならば任意の轉生などは決して企てらるべきものでない。因緣に超越して因緣に隨ふことが阿字界の生活である。眞言行者の平素の要心は正に之れである。

三昧の出入に自在なるときは舉身の三昧に入れることが可能なれば亦た分身の三昧に入ることも可能である。熟練したる催眠術者は一人に馬の暗示を與へ、一人に牛の暗示を與へ、他の一人には鳥の暗示をも與へらるゝ道理である。夫れと此れとは天壤の相違ではあるが、不空三藏は一面に自己現在の己身の三昧に入つて居つたが同時に次生の佐伯氏の胎兒として別身の三昧に入ることは決して不可思議でも何でもない如來の境界に於いて普門の三昧と一門の三昧とが同時に行はれて居る

のを見ても判る。此れを怪しむべくんば祕密教の一切を怪しまねばならぬ。たゞ因縁を超越して而も因果の法則に隨ふことが阿字界の若しくは第八識界の生活でありとすれば因縁に隨ふ殘餘の三藏は勿論病人でなければならぬ。南洋の怒濤と爭ふて印度に往來した鐵の如き肉體も電露の如く危うく蒲柳の如く脆く惱まねばならぬ。不空三藏が次生の三昧に入られた時が託胎の日にして、胎兒が充分の發育を遂げた時が三藏の遷化而して其れが高祖の降誕と云ふ新事實となつて顯はれねばならんのである。而して此れが凡て豫定の理路で其の間に何等不合理な點を看出すことは能きぬ。此れだけの一大事が現實に起つて此れ等聖者の大悲願に惱み給へる時現在鬼も角も兒として胎を借す母公に何等の暗示も前兆もなかつたならば、其れに越した奇怪はない。くだらぬ日常生活にですら吾人は注意すれば必ず前兆を看出すことが可能である。實驗上そうである。

此の大意匠が金剛智三藏の夢に佛菩薩が東行するといふ因縁に發端し、不空三藏の東生の入三昧となり、惠果和尚の高祖大師を待ち設けられた因縁を成し而して高祖大師の大救濟と成つたことから見ると、更らに鐵塔相承の昔から、日本に納まらねばならぬ豫ての意匠が窺はれるのである。

不空三藏の母公が佛眼の光りを感じた、是れがそも〳〵の發端を成して居る。則ち佛からの使命で金剛智三藏と不空三藏と惠果和尚と、不空三藏と高祖大師と惠果和尚と高祖大師と、代る〳〵に師資と成りつゝ此の一大事因縁を成就せられたのである。

而して祝福せられたる日本國民は別して喜びを感ずると共に此の法を守り立てねばならぬと云ふ義務を自覺せねばならぬ。今現代の宗狀が斯くあるにしても斯れも高祖大師の法脉相續の大悲を全うする因縁と意匠との自然の成行である。悲觀することもない。斯くあることが最上の方途であるからのことゝ信じられる。たゞ一事の奇なることは萬事が日本で發生せぬことである。必ず舶來せねばならぬことである。

茲に託胎の奇蹟を中心として高祖降誕を奉祝する微仲を披く次第である。（祝日の前十日記）

永劫の誕生

青葉蔭寧樂の都に宮居まし　　御世しろしめす光仁の帝の、
寶龜五年の六月もちの日に　　玉藻よる讃岐の屏風が浦か。
道臣命の末、武持連の裔、　　佐伯氏の父阿刀氏の母、
夢に宿乞へる天竺の僧伽、　　玉の嬰兒に姿やつさして。
十二の因縁のきづな斷つ時、　　解說の喜びを合掌に徵はし、
初轉法輪を稱誦に獅子吼し、　　永久へに、秋津島根に誕る。
咲く花も散り、茂る木葉も凋む、生者必衰の理りは爭ふことの能きぬ掟でありまして、人が生れたなれば死の影は早や宿つてをる。苦しみも哀しみも皆な其處から萌すものであるから高祖も「流水相續」

飛焔相助徒縛忘想之繩空醉無明之酒既如夢中之遇還似逆旅之逢と歎かせられました、而るに茲に此の宇宙の大眞理に從はずして、生れることは生れながら、永劫死ぬることを忘れた人があります。耶蘇クリストは暴横なる國王の手に捉へられて、十字架の上に死にましたが、靈魂は何人も殺すことは能きぬ。我れは永劫に生きるのであると喚びました。

實に德の高い信仰の厚い人は肉には死しても靈に生きてをるので其の例は昔から多いのである が靈と肉と共に生きて死ぬことのないのは我が高祖ばかりであります。

其れで高祖の誕生は人一代を生きるための誕生ではなくして、未來永劫に生きるための誕生であることを知らねばなりません。

高祖の御誕生は光仁天皇の寶龜五年六月十五日ではありますが、六月の頃といへば天地自然の風物は頗る暗澹たるものでありまして、春の紅は土に還つて痕もなく、初夏の美はしい綠は空に色を變へて黑ずんでをる、眼を娛ませる眺めとては少しもありません。

郭公の聲は寂しいもので、梟の聲も悲しみの種であります、天は霧れては曇り曇ては降り、煙霞濛として重くるしいこと限りない、水は毒を含んでをる、風は嗅を帶びてをる、人の病に倒れ死ぬるのは殊に此の季節に多いのでありますが、斯の六月の天候は宛然らに人の運命、世界の運命を克く表象してをるではありませんか。人々は春の花秋の月に浮かれてをる間は暫時己れ等の運命の怕ろしいものであることを忘れてをりますが、五月六月の不快なる天候に遭ふ毎に又しても寒しい忌やな怖ろしい己れの身の上をしみ〴〵と感ぜずには居られません。此の季節遽かに聖者誕生の報知を聞くのであるから、我れ等の喜びは如何でありませう。我れ等の愁眉は初めて開けるのであります。其れで年々の六月十五日を迎へたなれば、永劫に生き給へる聖者誕生の聲を大きくして、我れ等無始以來迷ひ苦しみに苦んだ磽薄なる運命は茲に開けたのであることを喜ばねばならぬ。

我が高祖誕生の因緣を稽へ合すれば、實に不思議の事のみにして、一々に深い意味を表示してをるのであります、第一誕生の此の季節が慘憺たる人の運命を表象してをりますが、取わけ此の季節は一年を通じて人の最も眞面目な時で、つく〴〵果敢なき身の末を想ふて、救ひを需め道に憧がれてをる時であるから、聖者の誕生を迎へる準備の整ふてをる機會は此れより外にないのであります。永劫に生き給へる聖者は歲々に斯の時に誕生の聲を放たれるので、其の報知を明かに受取ることの能きるものは幸福でありませんか。既に季節が人々の運命を表象してをるが、次に出產はかれに對して攝化利生を表象してをります。高祖は固より三地の薩埵でありますから、入胎の初めから天竺の僧形と成つて異靈を示されてはをりますが出生して直ちに攝化利生を爲す譯にはゆきません。世の習ひに隨ふて幾歲かの修行を積み、自行圓滿して後に初めの悲願を遂げられるので、是れは佛々同道の法則であります。而るに聖者誕生の報知は直ちに後の攝化利生を表象して居るのでありませう。さて又た六月十五日と定つたにも深い表徵があります。六月とは六趣則ち現し世を表象してをるので、高祖の一代長い〳〵一代、此の度生れては永劫に死に給はざるの一代は涅槃にも入り給はず他方世界にも入

り給はず常に此の現世に止まる事を表象するのであります。又は十五日とは金剛薩埵金剛王菩薩より初めて金剛牙菩薩に到る十五大菩薩の位を經て第十六大菩薩金剛拳菩薩の位に到る義にして、則ち正覺を成ぜらるゝの意味であります。之れは後に清涼殿に於いて現身成佛の相を示されましたが、十五日の誕生は實に其の卽身成佛の深旨を表象してをるのではありませんか。又た御懷孕は十二ヶ月でありますが、其れは色、名色、六入、觸、受、取、有、生、老、病、死の十二因緣を表象してをるので此の十二因緣は環の端なき如く相因緣して生死の海を脫すことが能きずして、輪廻生死するのでありますが、高祖は現世の最後として、此の十二の環の如き鎖を打ち截り、再び生死海に出でさせらぬのでありますから、十二の因緣足りて出生の時之れを解脫せらるゝので、其の意味を表象して十二ヶ月の滿つるのを待たれたのであります。次に誕生の時合掌して居られたのであるが之れにも表象があるのであります。過去の大悲願は茲に成就して自證の極に入られた喜びの樣を現はすのでありませう、而して初聲を聞えたのは實は陀羅尼を稱誦せられてをるのでありました。自證の菩薩が陀羅尼を稱誦せらるゝのは則ち化他の爲めに三密の法門を以て大獅子吼する表象でありませんか、恁く高祖の誕生の日に於て既に衆生を表象し、救世、現世、現身成佛、解脫、自證圓滿、攝化利生の如き大事件を一々に表象して永劫の一代を其まゝに誕生の因緣に描かれてをるのを見ても之れを偶然の出來事とすることが能きませうか、我が日本民族に幸福多からしめんとする天然の成せる大意匠に據るのであります。天の命を享けて降臨したのは我が高祖でありまして、此の天使を迎へる日本民族は他に類のなき幸福者ではありませんか。

世に聖者權者の出づることと決して少くはありません、幾十億の生靈は皆な其の敎誨に依り解脫を得、安心を得てをるのでありますが、何れも人の心靈を救ふのが目的であつて、肉を救ふものはなくして肉は賤しきもの、救ふべきものにあらずして顧みぬのであります、又た世には賢士學者といはるゝものも非常に多いのでありますが、彼れ等は肉を助けて道を誨へて靈を救ふことを忘れてをるのであるが、未だ曾つて靈と肉を併せて救ふことを企てたものは我が高祖の外には一人もありませんさりながら苟くも六大法性界に遊泳するものは第六識大の尊ふとむべきほどならば、前五大を輕んずる譯にはいかんのであります。靈に生活して永劫に世を救ふことか能きるならば、同樣に肉に生活して永劫に世を拯ふことも得らるべき理である。我が高祖入定留身の一大事は則ち之れに依るのであります。然らば高祖の誕生は世の常の五十年六十年の短かき一生を區劃する一事件ではなくして、永劫の生活の爲めの誕生と見ねばなりませぬ。

歳々に六月の陰鬱なる天候は繰返されて、さしも悠暢なる人々も何となく鬱き〳〵した淋しい憑りない感を起し、いひ知らず不安の念に撲たれ何か永劫の生命ともなるものに逢ひたしと想ひ、眞面目なる求道の念に驅らるゝとき、靈と併せて肉とを救ふ大聖誕生の報知は常闇を破つて日輪の輝き出づるやうな喜びを感ずるでありませう。我れ等は大聖誕生の喜びの聲を擧げねばなりません。大に聲を張り擧けて四圍を驚かすやうの祝の歌を謳はねばなりません、而して一千有餘年前の誕生を紀

念するための喜びではなくして今歳の六月十五日生れた現實の人の誕生として喜ばねばなりません。

高祖の影像

明治丁未の初頭に臨み、我は胸中に深く兆せる信念を、隱すこころなくあるがまゝに告白するは正に其の時機を得たりと思ふ、さればこて此の信念は、さしも新しきにあらず高きにもあらず、從來諸大乘佛教や哲學の幽遠なる論理に心から醉へるとき、我胸中に自然に湧き出づる信念に對して却つて疑惑を挿みたれば、縱しや恁かる信念の影を捉へたるとあるも、そは妄想が惡戯なる產物に過ぎずして侮り、なか〳〵に尊とく有難しと肯ふこと思もよらず、寧ろ齒頭に上することを愧かしとしたりき、然るに斯の信念は永らく無情なる壓抑の下に在りながら、尠しも消磨せざるばかりか、此頃に至りては一層明確になり來りて力强く我を動かし我を慰むるなり、斯の信念あるがために人生に躓きて受けたる痛ましき瘡痍に藥し、恰ばしき光明界に昇るべき松明に火を點じたるなり、母の懷に抱かれたる嬰兒の頓て成人して老ひたる母を養ひ、母の畢の賴りごころとなるが如く、此の信念こそは我胸に生れ出て我を慰むる力となりたるなり。

未だ世の中の事には何の經驗もなき頃より、夙くも生死卽涅槃、煩惱卽菩提等の高遠なる教理に耳慣れたるなれば、不幸にして我はたゞ譯もなく豪くなりて濟ぬことにてありき、釋尊などを貴しとも惟はず、顯教の丈六の劣等身なりと冷かに持遇ひたることもあり、實に釋尊を足下にして見渡せば、天空海濶、地獄天堂は畢究是れ空なり、佛と衆生とは本來是れ不二なれば宇宙に怖ろしきものなきに至りたるも宜なり、迷へる我このまゝに佛なりと聞きて其の言語の奥に潛める深き哲理を酌まず、醉狂をよいことにして卽身卽佛などゝしたり顏なり、茲に身分不相應なる自負心さへ起して、はや佛にも成りたるやう思ひなせり、されば差別界のことゝし言へば罪惡にてもあるかの樣に恐れ慄き、三生六十劫の間難行苦行して正覺を成ずるものを低しとし、隔生に成佛するよりも一生の成佛を高しとし、修行するよりもせざるを尊び、初發心時便成正覺と言ひ發心卽到と言ひ、一向らに簡便なる迅速なる方にのみ走りたれば、差別的なる秩序的なる世間の人の爲すことは皆な迷妄のやうに聞えるなり、恁くて理想病に罹りて深く高くこのみ呼びたる後の今を顧るに、我は原のまゝにして迷へる凡夫ならずや、東海道より奥州路かけて山陰山陽を涉り歩きたるも旅人は尙原のまゝの旅人なり、此の處を栖家と定まりたる地のある理なし、深き高き理想を那邊までも追ひ縋りたりとて、哀れ我心の中には眞如の影も宿らねば神佛の像も映らずして、却つて眞如の精神佛の粕なる所謂幽玄なる哲理のみが覺束なくも耳朶に響くばかりなり、我心は春の夕の朧ろなる空の如く漠として永劫の影理想の影とも見らるべきものなく、折り節に起るものは惡くし惜し欲しの煩惱のみ斷雲の來去するが如くに起伏するなり、而して斯の暗黑なる胸の中に常に宿れるものゝあることを永く忘れ居たるなりき。

霞める空には星の影もなく風は音もなく實に暗澹たるものなるが、たゞ濛々たる一痕の月のみは見らる、我この曇れる心の面に明かには夫れとも解らぬ程に朦ろに映るものは高祖の影像にてありき、こは高祖の影が我心中に映ずてふたゞ信の念にあらずして、さま〳〵と其の形像を拜しまつるなり、例の高き深き理想を追へるものには絶待的に廣大無邊なる人格の實在の影をこそ喜ぶなるに、今は夫れと異りて頗る些やかに凡庸なる影にてあるなり、則ち香色の法衣被りて六尺には過ぎざる小國沙門の姿にして、四國中國を行脚し給へる時そのまゝに御樣子なり、高遠なる理想にあらざれば、滿足せざる人は、是れを嗤りて賤しき幻覺なりとして斥くるならん、又た高祖は三地の薩埵なるに小國の沙門の影にして觀ることの頗る罪深く智慧淺く愚かなるとなりと咎むる人もあらん、されど事實は之れ己上に誇張する能はず、我心に映ずることを云ふ影像は眞に之だけのものなるなり、而して此の影像こそは清淨なる三昧に入りて心の明鏡に映ずるそれに在らず、又た空想妄念に驅られて狂へる心に映ずる柳の蔭の幽靈橋の袂の大入道のそれにもあらず、忙はしき現世の塵に塗れたる平素のまゝにして、心に準備することもなくたゞ何とはなしに自然に浮び出づるなり、幼少のとき分れてまだ覺えかねたる祖父母に偶然昔のまゝの風采にて出會ふ如くに、親り高祖の影像を觀まいらすなり、されど我心は飽くまでも曇りたれば、折角に高祖の慈悲に緣りて其の影像を拜しながら、薄紙もて眼を掩はれて見る如く、何事も確かならぬを恨みとするなり、恰も觀賢僧正に伴はれて御廟前に進みたる稚兒か、それとは確かに信じながら尙薄霞拂ひもあへざりしと同じ經驗を逢けたるなり。

本來聖道門下に育てられたる我は意地强く、何としても佛の御袖にかき懷かれて有難し辱けなしと感謝するばかりにて、無始よりの業障其のまゝに救はせらるゝ佛の慈悲に縋ることを意氣地なきやうに思ひなされるものから、己が力の弱きをも省みず無理にも果敢なき我を擁して熒然として獨りたゝんとするなり、而して常に我を救はんとて待ちうけ給へる佛に對しては斯く應へまつるなり、「佛の慈悲は幾萬劫にも報ひ難き鴻恩にして洵に勿體なし、されど無始よりの罪は我自ら作りたるなり、此の罪何人に賄賂を使ふて輕減を願ふべくもあらず、我罪は我自ら償ひたく思ふなり、過去と現在と及び未來とに作りたる罪は假令ひ兎の毛一筋ほどたりとも其の應報は自ら受くる覺悟なり、地獄畜生修羅何の趣何の果報にてもたゞ因果應報の配劑のまゝなり、されど我が罪深きことゝ、其の罪を懺悔することゝ、涅槃に至るべき道とを示し給へる佛陀の慈悲を謝し奉るなり、佛陀よ今暫く＝幾劫かの間＝我がするやうにして打捨て給へかし必ず〳〵佛陀の道を辿りて涅槃の正路に出ずべければ」と、斯くて我愚をも恨みず理想の遠きをも嘆かず、辱なき佛陀の慈悲を堅く信しながら、態と其の御恩に背きまつりて背かざるなれば、我心には力として恃むべき佛の影も菩薩の像も宿るべき理はなきに、如何なれば我は朧ろけにもせよ斯くは高祖の影像ばかりを宿したるか、高祖の慈悲か我が福業か、それは何故とも知らざるも兎も角も此の影像は拭へども消えざるなり、消えざるのみならずます〳〵明かになり來りて、動もすれば我と影像との間を隔てたる霞の薄らぎて、剩りに偉大なる影像の遽かに明白になりて胸字の狹き我に取りては却つて恐ろしく思ふ故に、强ひても推し隱して寧ろ曇

りたる原のまゝなるを喜ぶなり。

前にも言へる如く、我祖父母の佛の不意に顯はるゝことあるも、そは祖父母が我に喜しかりしこと酷かりし時の事を思ふをりの事にして、何事にもあらぬなり、高祖の影像ばかりはさる無意味のものならず、我は高祖と共にあるがために、斷へず有難き幸福と光榮とに滿たさるゝなり、かの影像こそは寒き霜夜には燃火ともなり、盛夏の熱苦しきときは涼風ともなり、餒たるときは粟ともなり、病めるときは藥となり、敵に挑まるゝときは鐵の鎧ともなり、我に讎するものに向ふては夜叉羅刹ともなりて仇の勢を挫き、春の野には花の精となり秋の空には月の心ともなり、筆執りて机に凭れば文字となりて走り、衆人の前に出ては威嚴となり品位となり、悉て我關はることには確かなる後見し給ふなり、されと高祖我と共に在すがために、森嚴なる監督し給ひて、露ばかり道はずれたるとありても屹と睨まるゝ怖ろしきあり、國法と佛戒とに觸るゝとき呵嗔の笞は立ごころに雨の如くに下る、友に信ならざるときは冷かに嘲けられ、職に忠實ならざるときは生活の道を斷たるゝのみならず名譽の衣幸福の衣を引き剝がして暗黑の淵に突き墜さるゝなり、他人を惡罵するとき太き錐もて口を刺さるゝなり、斯くても我强情我慢は尠しも熄むに至らず、かの嚴しき切諫にも怖ずして時をりは恣まに振舞ふて平然たるものあり、されど其は高祖の眼を盜みてに非ず、卑怯なる詑言して容赦を乞はんともせず、先づ影像の前に跪づき「高祖も照覽あれ、我は尊慮に乖背しても此の事を成し遂げざるべからず、天の罰佛の罰は辱く蒙るべし毫末も私あらざれば」と禱るなり、而して佛意に適はずとは知りつゝも人間の義理人間の意地のために、肉を裂き血を絞りても進むとき、願れば我は獨りに在らずして高祖の影像は依然我が邊りにあり、恐ろしき冥罰蒙るときも亦た我は獨りに在らずして、我側らに涙滂沱として我と共に嚴罰に苦しみ玉ふ影像を觀る、たゞ此の時の我は天罰と及び高祖を泣かせたる罪とを二重に感ずるなり、さるにても何故に高祖が此の罪深き我を見捨て給はざるか、之れは不思議なり、固より慈悲深重なるためなるべけれど、それは剩りに怕ろしく勿體なからずや。

曾て恁かる事の經驗なき信佛家、哲理に耳肥えたる學將だち、さては世の迷信てふ非難に悸氣だてる若法師たちは、斯の淺き狹き低き信仰を聞きて、合點ゆかざることに思ふなるべし、我とても斯の影像が外道の神我の如く眞實の實在體にして、是こそ恃むべき最極の境なりとは素より思ひもよらず、思はざるばかりか勗めて之を打消さんともしたるなり、されば之れを常の空想妄想と同一には決して觀る能はず、設し誰某なる者が實際に在りて我と對談しつゝあるとき、其の者が實に我が前に在りと云ひ得る程度に於いて、我は此の影像を確かに見るなり、若し空なり無我なりと云へば單りかの影像ばかりかは法界の渾ての現象は心の所變にして因緣所成ならざるはなし空なり無我なり、其の意味に於いてならば此の影像も亦た無性なり空なり、無生なれども空無にはあらず、さらに進んで此の事に關する事例を經疏の中に、覓むるに、此の種の影像を見るは寧ろ普通の事にして、密教に在りては極めて初歩の信仰的生活に入りたるものとせらるゝなり、大日經の疏に曰く、

初心の行者は種々の有相の境を觀るものなり、是れは緣より生ずるものなれば自より生ずるにあ

らず、他より生ずるにあらず、自他より生ずるにあらず無因より生ずるにもあらず、常に無生の生なり無生なりと云ふも此の因緣生の法は法性に同じく湛然清淨にして一切の功德を具足せり、緣に隨つて生ずること譬へは鏡の中に水と月との影の如し、有にして有にあらず、有にあらずして現はる而も能く種々の功德を成就して普く一切衆生を利し大悲を以て物を化す。

我觀る影像も畢に妄想幻想の發作にはあらざることの慥かなる證左なり、我とても最切には其か何物とも知らざれば、餘りに理由なしとし無稽の妄想なりと思ひ做して、尙飽かず絕待的の理想境を追ひ、空なり無我なり唯心所變なりと云ふことを幾度か繰返しつゝありき、山中に鹿を追ふて却つて花の香を得、河に魚を漁つて月の影を見たり、永き間繹ねたるところは痕をも見るに至らずして、却つて思もかけぬ此の影像を捉らへたるなり、惟ふに此の影像こそは我凡夫として迷へる間は終に消す能はざるべく而して斯れに因りて慰さめられもし勵まされもして漸次に我理想境にも到り得んか。

右は予一人の信仰にして斯れが園員全體の信仰と云ふには勿論あらざるなり、さりながら我家の信仰とは恁かることに於いて一致しをるものなるかをも聞きたく、又一は恁かる信仰に於いて一致すべきものなるを信ずる故に、茲に之れを發表したるなり、豈他あらんや、

末徒の見たる高祖

一

御遺告に曰く、「故吳殷纂云、今有二大日本國沙門一、來求二聖教一、皆令二所學一可如二瀉瓶一。此沙門是非二凡徒一、三地菩薩也、內具二大乘心一、外示二小國沙門一相云々」、斯の文に依れば高祖は在唐留學中に於いて、疾くも發光得定の上位に居せらるゝ大士なることを認められ、高祖自らも敢て之れを否ませられざりしなり。而して歸朝の後三十年の綜行は感應道交日に新にして、三密の妙觀は終に其の最高潮に達したるとき、「吾漢號遍照金剛宜知行」と宜せられたり。遍照金剛とは遮那覺王の別名にして、斯の號は妙覺果滿を示すものなり。然るに斯の妙覺の大師は永久へに法界の宮殿に入らずして、「都率他天に往生して、彌勒慈尊の御前に待ること五十六億餘年にして後、慈尊の御供して下生し吾が先跡を問ふべし。且つ未だ下らざる間にも微雲管より見て信否を察知し」給へることは、向上々轉の因行にあらずして、果界より下轉する攝化利生の大悲願なり。恁くて當代の人、若しくは高祖自身より觀たる位地は既に明かなるものなるも、尙ほ末徒の目に映したる高祖に到りては、見る者の智識證解の淺深に依りて自ら區々ならざる可らず。

二

高祖の本地といふことに就いて古來種々の說を爲すものあり、其の說の裡にも自ら末徒が見たる

高祖の佛を映ぜるものあり。

或ものは高祖は阿彌陀如來の垂迹なりと。何となれば、曾て高祖の妹にして常に大師を拜しまいらせんことを乞へるとあり。高祖の曰く我を拜せんと欲せば阿彌陀佛を拜せよとて其の像を圖して與へられたり。之は則ち阿彌陀佛は高祖の本地身なればなり。或ものは龍猛菩薩の後身なりと。何となれば高祖、延喜帝に夢告ありて我昔遇薩埵、親悉傳印明、發無比誓願、陪邊地異域等との給へり。既に我昔薩埵に遇へりといふ、薩埵は金剛薩埵なり。而して金剛薩埵に遇へるものは龍猛なれば、高祖の前身は龍猛なりといふ。(龍猛の本地は妙雲相如來にして、妙雲相は觀自在王如來の別名なり。觀自在は阿彌陀如來の異名なれば此の二說は相異なきか)又た或るものは高祖の前身を天竺にては勝曼夫人といひ、支那にては慧思禪師といひ、日本にては聖德太子なりと、(室戸崎緣起等の說なり。同緣起は御自作なりとの說あるも、暫く後人の作なりとして)、

其他日本の神々に合せる如き種々の說あるも、要するに見る者の機々に因りて、何れも高祖に對する信念の發表の外ならざるなり。されど吾人の需むるところは敎理の根底に立ちて、內容の豐富なる信念の對像としての高祖ならざる可らず。

三

茲に一卷の最も信憑すべき古書あり。三寶院の流を汲みて御遺告を解釋したるものにして、實はさまで珍奇なりとにもあらざるべきも、高祖の事を說いて頗る妙なるものあり。然れども義は往々にして深祕に亘りたれば、之れを猥りに公開して却つて譏を招くの虞なしとせず。中にたゞ吾人が平素確乎と信ずることゝ多く違はざるものあり。已に吾人にすら想ひ得らるゝほどの事は深祕にもあらざるべければ今此の書の內容の大概を上げて吾人の信念の多く誤り居らざることを確めんか。中によりて深祕に亘ることなきを保せざるも、之れ文勢の止むを得ざるところなり。

四

其書の說に依れば、「我宗の大事は則ち三國相傳の口授に依る者にして、經軏の文にすら之を載せず。經軏の眞意は却つて阿闍梨の心裡に祕められたるなれば、斯の宗の大事は茲に在り」として論じたる後に、凡そ一心の寶藏を開くに自ら三重ありとして其れを說けり。例へば三重とは一には行願の菩提心、二には勝義の菩提心、三には三摩地の菩提心なり。此の三種の菩提心は開けば佛一代の無量の法門と成り、之れを攝すれば只だ一心に過ぎず。又た此の三重を尊形に就いていへば、不二の大日尊と、金剛界智曼荼羅の諸尊を總攝するところの愛染尊と、胎藏悲曼荼羅の諸尊を總攝するところの不動尊との一佛二明王なり。復た此の一佛二明王を廣ずれば兩部曼荼の無盡の諸尊と成り、之れを約すれば衆生の自心に過ぎざるなり。而して、此の一心を佛の方より見れば三種の菩提心と成り、一佛二明王の三尊なるも、之れを迷へる衆生の方より見れば一心は則ち貪嗔痴の三毒の煩惱にして、衆生の貪煩惱は大日尊の大貪の德なり。嗔煩惱は愛染尊の大嗔の德なり。痴煩惱は不動尊の大痴の德なり。三煩惱と三種の菩提心とは平等にして一心なり。此の三重の大事を密宗一家の骨目とす。されば高祖は此の大事

を尊重し給ひ、大和の室生山に如意寶珠と愛染尊と不動尊とを安置し、鎭護國家、攝化利生の謀を成し給へり。而して彼の山の三尊は則ち高祖の内證を表象したるものにして、高祖は實に三重の大事を以て内證と爲す。故に高祖を以て吾宗の本尊と習へり。高祖は生身の大日尊にして、彼の山は其の三昧形なり。其の種子は法性圓々海の阿字なれば、現實の世界に於て密嚴華藏海の曼荼羅を顯揚するものなり。

五

今少しく寶珠と愛染尊と不動尊に就いて說かざる可らず。

かの室生山に祕められたる寶珠は惠果阿闍梨より附屬せられたる物にして、もと龍猛菩薩鐵塔中に於て金剛薩埵より授けられたるが、其の後師資相承して高祖に到りたる重寶なり。凡そ寶珠とは龍宮に在るとき雲雨を起して萬物を生長し、又たよく世間の希願に隨ふて萬寶を雨らす德あり。而して此の寶珠は如來の舍梨にして、舍梨とは則ち三摩地の菩提心をいふなり。大日經に「大菩提心如意珠」といへり、此の寶珠を尊形に就ていへば大日尊なり。故に大日經の疏には「蓮花胎藏の駄都(寶珠)は所謂法身の舍梨なり。若し衆生此の心の菩薩を解らば則ち毘盧舍那に同ず」と說き、又た同じ疏には「阿字と寶珠と菩提心と、率都婆と此の四種は是れ一體無二なり」と釋せり。涅槃經には「若し如來の舍梨を見るとき則ち是れ佛を見るなり。佛を見るは則ち法を見るなり」と說き、覺鑁上人は「若し己體に法身の舍梨在すと觀ずれば自心則ち佛性の駄都(寶珠)なり」と釋せられたり。されば寶珠とは、如來の舍梨にして、舍梨とは淨菩提心なり。而して淨菩提心は不二の大日尊なり。大日は則ち高祖なる故に寶珠は高祖自身と全く同なるなり。

次に愛染尊とは金剛界曼荼羅の中に在りて、東方の四菩薩なる金剛薩埵、金剛王、金剛愛、金剛喜の總體の尊なり。然るに時として大日尊は其の居座を讓り、愛染尊は中臺に上りて曼荼羅の主位となり、大日尊を始め他の三十五尊は伴と成し給へる尊なれば、愛染尊は實に金剛界智曼荼羅を總標するところの尊なり。又た金剛界の大日尊、胎藏の日輪に入りて不二となりたるとき金輪尊を成じ、胎藏の大日尊、金剛界の月輪に住するとき不二となりて佛眼尊を成ず。此の不二所成の金輪と佛眼の二尊の不二したるものを愛染尊といふ則ち二重の不二を成すところの祕尊(祕抄問答)なれば、彼山には此の尊を寶珠の右邊に安置して金剛界の曼荼羅を表示せり。

次に不動尊とは胎藏の大日尊にして、已に成佛して久しきも本誓願のために大心を發して如來の僕僮給仕となり種々の賤務に服せり。然れども其の内證は固より普門の萬德を圓滿する尊なれば、大悲胎藏の諸尊を總標するなり。故に彼山には寶珠の右邊に此の尊を安置して胎藏の曼荼羅を表示せり。

要之、寶珠は不二の法身淨菩提心にして、愛染尊は金界を表し、不動尊は胎藏を表し三尊は則ち兩部の曼荼羅を成せり。之れを攝すれば高祖の全身にして又た一心なり。一心とは衆生の自身にあらずや。

今の此の書に藉れば彼山に祕められたる寶珠と愛染尊とを以て直ちに高祖一尊の内證とするこゝに就いて、其の一代の傳記に亘り常に、高祖がかの三尊一體の内證に住せられたるこゝを說かんとするなり。

初に高祖御遺告の中の「生季十五、入京、初逢石淵贈僧正大師、受大虛空藏等並能滿虛空藏法呂、入心念持、明星入口、虛空藏光明照來、顯菩薩之威、現佛法之無二」の文に依りて、先づ童形の尊像を描けり。其の尊像は赤き盤石の上に立ちて、左手に八輻の金輪を持ち、右手に寶劍を執れり。此の尊像は高祖十五歲の童形にして、文の「生季十五」といふに叶へり。十五歲にして虛空藏の法を成就し給へるとは、金剛界十六圓滿金剛拳菩薩の相にして金剛界に當れり。故に立形にして智の竪差別なる義を表せり。復た「虛空藏の法を成就す」といふは福智の二德を成就せるなり。故に右手の劍を以て智を表す。則ち愛染尊の表儀なり。左手の輪を以て福を表す。則ち不動尊の表儀なり。而してかの虛空藏とは寶珠の異名にして之れを頂上の圓を以て表せり。又た盤石の座は不動尊を表し、石の赤きは愛染尊を示せり。されば此の童形に於て三尊は圓滿に具足せられたり。

七

同じく御遺告の中の「在父母家時、生季五六之間、夢常見居座八葉蓮花之中、諸佛共語也、雖然專不語父母」の文に依りて又に稚き童形の尊像を描けり。其の尊像は八葉の赤蓮花に坐す。之れ文の「居坐八葉蓮花」に叶へるなり。八葉の蓮花は本有性德の胎藏性淨の心蓮なれば、大悲胎藏を表せり。されば尊像も蓮花中に座して胎藏の横平等を示せり。左手に八輪を持ち右手に劍を執れり。之れ文の諸佛と共に語る」といふに應じたるなり。何となれば諸佛とは智なる故に劍を以て標せり。劍は前の如く愛染尊の智なり。復た共語とは佛の法輪にして法輪は福の德なり。故に之れを八輻輪を以て表せり。而して輪は不動尊の大悲なり。復た諸佛と共語することは理智不二のところなれば則ち寶珠となる。寶珠は不二の德なる故に文の「父母に語らざりき」といふに應ぜり。恁くて斯の尊像にも三尊一體の義を成ぜり。

八

さらに御遺告に「及干二十季、剃除髻髮、授沙彌十戒七十二威儀、名稱教海、後改稱如空云云、二十二歲登戒壇、受具足戒、干時改號空海」といへる文に依りて、又た三尊一體の習を成すなり。

初に教海とは行願の菩提心を表する名なり。何となれば、海とは法性の海にして教とは言教なり。法性の海に言教の浪を起して衆生の迷霧を破るは則ち如來大悲の說法なり。之れ行願大悲にして胎藏無動(不動)尊の三昧を標せるものなり。

又た如空とは勝義の菩提心を顯はす名にして、如空無染の妙慧を以て生死無名の闇を破ればなり。之れ金界無染(愛染)尊の三昧なり。

又た空海とは三摩地の菩提心を顯はす名にして、前の二名を併せて不二の實相を顯せり。何となれば空とは空輪として六大無碍の體なれば斯れを寶珠となす。空に森羅萬像を含み、一心の大空は無盡

の功德を具する故に寶珠は則ち全體なり。次に海とは水の總體なり。衆流を併せて一切を包容するは則ち寶珠の德なり。空と海と共に寶珠の異名にして之れ三摩地の菩提心なり。されば高祖は寶部の三昧に入りて國を護り、末世薄福の衆生のために無量の福智を施し給へるなり。

恁くて敎海は不動尊を表し、如空は愛染尊を表し、空海は寶珠を表し、こゝにも高祖の一尊に於いて三尊を併せたるなり。

九

斯の書は又た次に常の尊像を描き(年齡等を上げず、是れ却つて深義のあるべき故か)、四足の床に坐して傍らに水瓶を置き、左手に念珠を執り、右手に五鈷杵を持ち給へるこゝに就いて、同じく三尊一體の深旨を明せり。則ち頭頂を淨菩提心の寶珠とす。經に「頂上を摩尼部とす」といへるに叶へり。左手の念珠は不動尊の四攝の索にして、右手の五鈷は愛染尊の三形なり。又た四足の床は須彌座にして不動尊の盤石を表し、傍の水瓶は愛染尊の寶瓶を表せり。此れ亦た三尊一體の習なること常の如し。

十

此の書は又た御遺告に於いて實惠、眞雅二大德に附屬のことあるは、一體の尊より大智大悲、福智の二門を開いて各別の三尊を立てらるゝなりとして曰く、實惠は智門の資なれば之れに大藏經を附屬し給ひ、眞雅は大悲門の資なる故に、之れに弘福寺を附屬し給へり。實惠の定印を結べるは勝義般若の惠は必ず定に住すべきものなるが故なり。眞雅の念珠を執れるは大悲行願の拔苦與樂を顯はせり。念珠に拔苦與樂の功能あることは如意輪經の說なり。而して高祖悲智の二大德を總攝して寶部の三昧に入り給ふ。高祖は寶珠、實惠は智門なれば愛染尊にして、眞雅は悲門なれば不動尊なり。かくて師資相寄りて三尊を成せるは釋尊に理智を別つて普賢文殊の二尊と成し、藥師佛に陰陽を分つて日光月光の二菩薩と成すが如し、かくて三尊各別なるも皆是れ一心の寶藏を開きたるまでなり。

十一

已上記したる如く、斯の書にては一心を開いて三重と成し、三重は金、胎、不二にして、又た佛部、金剛部、蓮花部の三部と成り、大定、智、悲の三德と成り、三種の菩提心と成り、尊像に表しては一佛二明王となせり。斯の三尊を高祖は內證三昧と成し給へり。されば高祖とは一心にして、一心とは衆生の自心品なり。茲に於いて高祖と我と平等一如にして、我は則ち高祖たり。三尊たり、兩部曼荼の當體たるを得るなり。

この書には此の意を說いて曰く、

抑も高祖を以て本尊と爲す元意は、此れ則ち自心自佛の習なり。高祖は則ち三佛一體の祕尊なり。而して彼の三佛一體の習は、是れ亦た行者自身の極理なり。是の故に高祖と自身と無二無別にして、高祖を行ずるは自身を行ずるなり。自身を行ずるとは則ち高祖を信ずるにあり。修行未だ薰ぜざる間は且らく高祖を壇上に安置せよ。薰習久しければ後自身の外に高祖を見ざるに到る。是の故に高祖は是れ自身の影像なり」と。之れを信ずること深ければ茲に三密の妙觀足りて、直ちに法性の源底に達することを得るにあらずや。今此の已上に深義に亙るに便ならざれば、たゞ其の一端を擧ぐるのみ。

南山之御陰棲

高祖御一代の行狀は經疏なぞの文字文書に顯れたる義理や儀式作法の外に深遠なる意味があるのであるが我宗の學者といへば經軌を詮索するに力を專らにして御一代の行狀などを多く顧みぬやうな傾がありはすまいか。教義の問題ならば言ふまでもなく經疏の上に往かねばならぬが、宗旨の風習所謂實際の問題に就ては全然御一代の行狀が模範であるから、宗徒の祕密宗的生活は其れに則るべきである。隨つて高祖御一代の行狀に就ては經軌と齊しく充分の注意を要するのみならず其れが實際的であるだけ我れ等に取りては教理問題よりも緊切で實用的であるにも係はらず、其れが等閑に附せられたのはかへすがゝ遺憾である宗徒が理論に高くして實際に卑く疎いといふ詆りを招いたのも此邊から出たのであらう。

御一代の中に解らぬことのかづ〳〵あるうちにも高祖が天長の初めより入定に到るまでの十年間を霧深く樹木茂り交通不便にして居るに樂しからざる高野山上に世を避け、美はしき都の花に乖き温かき上下の渴仰を餘處にし松柏に對して山氣に嘯きつゝ禪念を凝らされたことなどは奈何にしても解することは能きぬ。

第一俗情から考へて見ると天長の初めといへば高祖の晩年に屬して上は皇家の信仰最も厚く官家公家の歸依の深きこと熟れも師崇の禮を厚ふし下々の渴仰に到つては佛とし菩薩として景慕した。實に海内の信仰を一身に蒐めてをられたので、想ふ所ろとして成らぬことはなかつたのであるから、此十年こそは年來の辛勞に酬ゐて花々しい生涯を採らるべきで、一面には祕密教に對する信念をますゝ深からしめるべく而して末代に到るまで他の信仰の起るべき餘地なからしむべく、又た一面には此の團體のため末徒のため更に巨大なる勢力を醞釀して未來の謀を爲らるべき理であつたと想ふ。他の高僧たちの例に考へても何れも其一生はあらん限りの力を振ふて教線の擴張に瞋められてをる。而るに其の大切なる時機を空しく山中に過ごされて常に神氣を養ふことにのみ惶はしくせられたのは吝しく想はれるやうである。

第二高祖の前半生の御生涯に考へても亦た爾かあるべき理で或時は山野を跋渉して弊衣粗飯に命根を支へられたり、又或時は海を渡つて異域に法を需められたり、或時は國家の御爲に壇を築いて修法せられたなぞ何れも攝化利生、密教隆昌の謀でないものはなく又た御素願より考へても常にそうであつたのであるから、彼の人煙跡斷えて雲表に浮世を超越して安んぜらるゝ理ではなかつたと想ふのである。

第三人道の上からいふても人の一生は働く社會の利になるので人としての價値は認められるのであるが社會としては人の一生はあらん限りの力を盡さずに、社會から遁れてをることを許さぬのである。況して空前の巨材を稟け社會は其の人の盡力を期待し、熱望してをるときに其の社會から遁れることが能きやうか。隨つて高祖の南山陰棲は社會に幾何損害であつたかも知らぬ。而し是れは假

りに高祖は世界から超絶して居られたので社會の利害なぞを以て律すべからざるものがあるこしても、

第四佛菩薩の大悲願から見ても亦た高祖の本願から見ても、特に大切なる此の一時機を空しく過ごされる理はない。著るしき例にも釋尊は沙羅林中に涅槃の床を設けられた。其床の中からも千萬言の妙理を繰返して說法敎化は之を怠らせられなんだのである。クリストは刑に往く前夜までも多くの弟子達を誨えるここに諄々こして尠しも平常に異はなかつたのである、未だ救ふべき救ひを需めつゝある世に背いたのは何故であらうか。近代的思想を以てしては到底解するここの能きぬのは御一代中の此の事件である。

聖者の一生は之れを通覽するこ自然に前後を徹して一大意匠があるので些細な行狀にも一の意味を成してをる。況して高祖の御一代は經軌に顯はれたる敎義の現實的の實現で敎義を人格にして生死界に動き出したるものは高祖の御一代の行狀こ成り、高祖御一代の行狀を理想的の眞理にして文字文書に顯はしたものは經軌こ成るのである。手近く言へば密敎の理想的生活を採つたのが御一代の行狀であるから高祖の生活の最も光彩あるべき晩年に却つて松柏の間に神氣を呼吸せられた寂寞の中には最も沈痛なる大意匠の發現があるので、普通の判斷を以て斯くあるべかりしこ律するここは能きぬ。然らば高祖は其の以前の惶はしき生涯に反して穀味を絕ち只管禪味を貪られたのは何故であるかこいふこ、要するに入定こいふ一大事因緣の爲である。限りなき衆生を限りある年月を以て濟度するここは能きぬ、奈何に德望高しこても纔か十年の歲月を以ては末代無限の衆生を什麼こもするここは能きぬ。深き强き信念を子に傳へ孫に傳へ傳へ〳〵て可なり廣く長く其信念を傳へるここは能きるが、祖父の往つたこころへ往つて父も子も孫も祖父の拜した其の靈龕から同じやうに親しく信念を得て來るここは能きぬ。高祖が最後の十年に社會的に更に飛躍を試みたならば子々孫々に傳承し得る華々しき效果を擧げ得たであらう。が其れは傳承的のもので傳承の外に親しく感受するこいふ慥かな據りごころがない。高祖の入定は此の缺陷を憂へられたので傳承に據らずして親しく末代無限の末徒に接するには、斯の法を採るより他に途はないのであつた。されば高祖十年の隱棲こは一代の敎化から一轉して永劫の敎化に遷られたのであるが、其變轉の餘りに甚だしくして我れ等當代のものを救濟するために出ませりこのみ想ひ做せる當時の人達こしては、其甚しき變化の事態を追隨して曉得するには餘りに自己本位的で且つ淺慮であつた。池の汀に在つて前栽の女王の如く美はしく威丈高く舞ふて居た鶴が俄かに立つて九天の外に飛んで畢ふたならば之れを看たる人々は非常に落膽し寂寞を感じ悲愁をすら覺えて果ては我等こ俱に樂まざるを愚こして嗤ひ或は我れ等の愛慕の情を捨てたるを嗟怨するものもあらう。さり乍ら此の愛惜の情に囚はるゝは凡情で嗟怨し追慕する人こそは天空を家こする鶴にも笑はるゝ愚人である。愛惜の情に囚はれたればこそ憐れこして救濟に出でませる聖者の恩惠に酬ひんこして却つて愛惜の鎖を以て聖者を縛らんこするは何等の愚であらうか。凡情は終に愛惜に出でゝ愛惜に畢るのである。恁かれば十年の

陰棲は凡情の愛惜の遮斷で正しく入定に到つて永劫の衆生救濟の道が闢けたのである。十年隱棲のことなくして上下の請ひに任せ浮世の塵に交はられたならば、其れは寧ろ敎化利導の效を成すのではなくして愛惜に因へらるゝことになるから、高祖の晩年は世に在ることはす功なくして實に危險なのである、在らんとしても實は在ることが能きなんだのであらう。

要するに南山の陰棲は凡情の愛惜遮斷にて入定の一大事は永劫の衆生の救濟にあるのである、然らば高祖は末代の弟子共に信賴することが無かつたのであらうか、末代の弟子共に信賴せらるゝならば高祖自ら永劫の生涯に入らるゝ理なく安んじて入寂せらるべき理であるに、其途を採られなんだのを見ると爾か想はるゝのである。然り一面から見ると高祖は末代の弟子共が吾に代つて利生の能があることは信ぜられなんだかと想ふ。謂ふまでもなく千年の歲月は高祖の御憂慮の空しからざりしを證據立てるのであるから假りに末代の弟子共を信賴されなかつたと想ふ事も能きるのであるが、併ながら其れが首なる理由ではなくして茲に祕密宗の宗風として異彩がある。其れは祕密宗には他の宗敎と異ふて宗命のある限り、生きた現實的眞阿闍梨を要するので阿闍梨の有無が祕密宗の死活に關するのである。則ち祕密宗には高祖の後に高祖に代るべき大阿闍梨が現實に無くてはならぬ。數から謂へば一人で可いのであるが其一人が中々得らるゝ者でない。高祖が永劫の生涯を採らねばならぬに到つたのは是である。素より一人の外の者が阿闍梨に成つて惡いといふのではないが、而し唯一人の眞阿闍梨でもよい、無くてはならぬのであるから、高祖は當初の開宗者であると同時に永劫の眞阿闍梨耶として現存せられるのである。高祖御一代の中の最後の十年は愛惜の遮斷と永劫の眞阿闍梨耶との二大因緣であるから、南山の陰棲を以て浮世の俗事に鬱きて靜寂の御生涯を送られたるものと解釋することは能きぬ。世に背き世の利益を忘れられた者なぞと評することは尙更ある可からざる語である。

入定

提葉凋落して久し　龍葩何れの春を待たん
吾が生の愚なる　誰れに憑つて源に歸らん

承和二年三月二十一日、吾が高祖は紀伊國伊都郡高野山に入定せられました。斯の高祖の入定は吾が宗の一大事で、我が國民の最大事であります。高雄の眞濟大德は高祖の上足にして十哲の一人に當る方でありますが、大德のいはるゝには、高祖は每に歎じて、提葉凋落久、龍葩待何春、吾生之愚憑、誰歸源といはれてをりました。高祖の入定の一大事は卽ち此の平素の御歎きの因緣に協ふのであります。

昔から入定して肉身を斯の土に留められた中で最も著しき人が二人あります。一人は釋尊から親しく依囑を受けた大迦葉尊者で、尊者は天笠の鷄足山の巖崛中に在りて入定留身し、迦かに龍華三會の曉、彌勒菩薩の降誕を待つて、釋尊から附囑せられた佛法を菩薩に傳達するのが素志であります。今

一人は則ち吾が高祖でありますが、入定の素志に就いては大迦葉尊者と大に異つてをります。釋尊入涅槃してより彌勒菩薩の出世まで五十六億七千萬年の間、佛法を護持して菩薩を待つて居らるゝのは大迦葉尊者であります。其の長き無佛の世に在る無量の迷人は誰れに憑つて救はるゝか、之を救ふことが我が務めである。我れの外に之れを救ふ者なしと誓はれたのが、吾が高祖入定の素志であります。何れも待つところは菩薩の降誕でありますが、其の素志に到つては右と左に各々一大事があるのであります。

されば佛法の亡びざるは大迦葉尊者入定の力であつて、無佛世の迷人の救はるゝは高祖入定の力であります。

釋尊が沙羅林の中に於いて將に入滅せられんとするとき、諸人弟子を始め諸邦より群がり來りたる弟子達は、佛陀が我れ等を捨てゝ涅槃に入り給ふを怨み、師を喪ふて誰れを恃みに修行向上すべきかを悲み、哀傷の聲は天も振ふばかりでありました。其の時佛陀は弟子達を戒めて、悲しむこと勿れ、怨むこともなかれ我が入滅の後にも我が法のあるあり、法は汝等の大師ではないか、法に依つて修行すれば我はなくとも向上進取の道あり、傷むこと勿れ、復た我が入滅を代て死とするか、愚かなる者よ、迷へる者よ我は雲に隱るゝ月の如くである。月の雲に入れば月は滅したりとするか、雲に覆はるゝも圓明な月は常住である。形も虧けず光も滅ぜず、明皎々として常に天涯に輝くのである。汝等は月を見ずして月を隱す雲を見る、雲を見て月の破れたりと想ふは迷ひである。汝等早く修行して雲を見る迷を破り常住に輝ける月を見よ、嗟むこと勿れと懇ろに誨へられました。

洵に佛陀は常住圓明の月の如くでありまして、常に明皎々の光を放ち、常に我れ等を照し、常に法を說き、常に我れ等を救うて居らるゝのでありますが、我れ等は迷ひの雲が深いために其の月を見ることが能きずして雲や霧をのみ見てをるのであります。釋尊ばかりでない、大日如來はいふまでもなく、觀世音菩薩も地藏菩薩も五十六億萬年の後に出世せらるゝ彌勒菩薩も皆月の如く常に我等の頭上を照して居らるゝのでありますが、我れ等は其の光が見えぬのであります。其れは我れ等と佛菩薩の間が餘り隔たり過ぎて緣が遠いからで、强ち我れ等の罪でもありませぬ。我れ等を救ふ佛菩薩は天涯の月と輝くばかりでなく、卑く地上に下降して親しく我等の前に月の光を示さるのゝであります。

高祖の御一代は實に天上の月が我れ等の前に落ち來つたやうなもので、其の德風の高きこと仁慈の深きことは、荒れ野に渡る春の風の靡かぬ草木はなかつたかのやうであります。高祖が其の當時什麼に德望の高かつたかは、大和の益田池の碑銘の中にも、

焉に於て塊を引いて數千の馬日々に聚り、赤馬人を驅つて百計の夫夜々に集る。既にして軍馬轟々として雷の如く往き、男女礦々として靈の如く歸く。土雾々として雷の如く積み、堤條忽として雲の如くに騰る。宛も靈神の埴を延せるが如し。洪鑪の化產せるかと疑ひ、成ることと不日にして畢ることと不年なり。

とあります。又た衆藝種智院を勝められますと、

貧道物を濟ふに意あつて、竊かに三教院を置かんことを庶幾ふ。一言響を吐けば千金卽ち應ず。

ことありますが、盛んなものではありませんか。されど吾が高祖も生者必滅の理に背くことは能きませぬ。

曦舒は矢の如くに運り　四節は人をして僵れしむ
柳葉は春の雨に開け　菊花は秋の霜に索む
窮蟬は野の外に鳴き　蟋蟀は帳の中に愴む
松栢は南嶺に摧け　北邙に白楊は散る
一身は獨り生殁し　電影は是れ無常なり
鴻と燕と更々來り去り　紅桃は昔の芳りを落す
華の容は年の賊に偸まれ　鶴の髪も禎祥ならず
古の人今見えず　今の人那ぞ長きことを得ん

恁くも現在に救世の菩薩を迎へて欣んだものも、又た菩薩を送つて天下に還し奉り、世は再び暗黑となるでありましよう。天外の月を觀て安心が能きるものならば、新たなる菩薩を迎へるまでもなく、空中に無盡莊嚴の曼荼羅の諸尊が羅列して居られるのでありますが、其れを觀ることは能きませぬから、未來永劫斯の土に在りて眼の前に衆生のために救世の大師の面影を偲ばせるのが末世相應の教化の道でありませんか。而して斯の大悲を立てられたのが吾が高祖であります。さりながら吹く嵐は過め難く、逝く水は堰き難し、變易無常の定規は破ることは能きません。高祖は世の定規に從へば久しからずして入滅せねばならぬ。又た大悲願に協へば未來永劫斯の土に在りて救世の大願を成就せねばならぬ。死するに死なれず生くるに生きられず、茲に生きずして生死海の法に悖らず、死せずして大悲願に背かず、生死に住せず、涅槃に入らず、生死と涅槃とを逸かに超脫したのが入定の一大事と成つたのであります。

高祖は斯の大悲願を成就し給はんが爲に、入定の前十年の頃より、既に堅く穀味を斷つて禪味を貪り非常なる勇猛心を以て身心を鍛練せられたので。其熱誠なる狀態は御消息に最も明かに顯れてをります。

我れを息惡修善の人と名く　法界を家と爲し恩を報ゆる賓なり
天子は頭を剃つて佛駄に奉り　耶孃は愛を割いて能仁に奉る
家もなく國もなく鄉屬を離れたり　子に非ず臣に非ず子として貧に安んず
一杯の水は朝に命を支へ　一咽の山霞は夕に神を谷ふ
懸蘿と細草と體を覆ふに堪へたり　荆葉と杉皮と是れ我が菌なり
意ある天公は紺幕を垂れ　篤信の龍王は白帳を陳ぬ
山鳥時に來つて一たび奏す　山猿輕く跳つて伎偏に絕れたり
春の華秋の菊笑んで我れに向ふ　曉の月朝の風は情塵を洗ふ
一身の三密は塵滴に過ぎたり　十方法界の身に奉獻す

一片の香一口の經　菩提の妙果の因となる
時華一掬讃一口　頭面一禮して丹震に報ず
八部恭々として法水に潤ひ　四生念々に各眞を證す

之れを以て見るに、高祖の後年は既に生死と涅槃との間を往來して居られたので、入定は其頂巔に達したのでありましよう。生死の外、涅槃の外に超越せられたから、釋尊が成道の日に大覺を成ぜられた如く、高祖は入定に到つて一大事を成就せられた。則ち留つて生死に居らず、往いて涅槃の常樂を索めず、永劫の末徒の眼の前に於て親しく攝化敎導する大悲願が、入定に到つて滿足したのであります。

從つて眞に吾が宗の成きたのも、信仰の定つたのも安心を得たのも、我れ等の救はるゝ途の開けたのは皆な入定の大事に依るのであります。而して高祖の眞の化導が此の時から始まつたのでありますから、高祖の化導に厚薄はありませぬ、入定以後の末徒は同一の法味に浴することが能きたのであります。承和元年九月十五日の高野四至啓白文は入定前半ヶ年の時の御作であるが、此の時は既に十年鍛練の功を畢へて入定の機漸く熟せられた折からでありますから、其の間に自ら心裏の消息が洩れてをるのであります。

日車駐り難く、人間變じ易し、從心忽ちに至つて、四蛇虚羸す、攝誘是に務め、能事畢んぬ。則ち化誘の道こゝに成つて、大安心を得られたのであります。而して常に歎ぜられた如く、菩提樹下に成道せられた釋尊は既に凋落して久しい、又龍華樹の葩咲て彌勒菩薩の成道を稱する日も何時の事ども計られぬ。其無佛の中間の愚かなる衆生は誰れに憑て、佛果に到ることが成きよう、我れにあらざれば拯ふことは能きぬといはれたことゝ、入定とは高祖の一生を通じて前後が能く協ふてをるのであります。高祖の入定がなかつたならば、我れ等も無佛の世に迷ひ出でた哀れな迷人であつたのでありますから、我れ等は高祖の入定に對して深く喜ばねばなりませぬ。

高祖我れと共にあり

人は萬物の靈なりとして自ら高ふして矜れど、天にある日の光、野にある花の色、それほどに美しいであろうか、馴れたる象、飼はれたる猫、それほどに温順であろうか、怒れる獅子、荒れたる虎、それほどに勇猛であろうか、涯りなき太平洋、果てしなき空、それほどに宏量であろうか、花の蔭に眠る蝶、木の葉うらに啼く蟬、それほどに無邪氣であろうか、然りと人は憶面もなく答へるのである、現に人は、顏麗はしく心やさしく、情に富んだ涙もろい、そうして愉快な、活潑な怜悧な、天地の間には他に類のなき高尚なる動物である。

然れど試に一日の間人に食物を與へずに饉えに惱ませたなればこの愛らしき人は忽ちに憔悴して餓鬼のやうに成るであろう、命にも親にも代へ難き財産を、半分ばかりも亡くすれば、狼狽して狂氣のやうになるであろう、炎天に木蔭、凉風を與へねば根なき草のやうに凋むであろう、朔風の吹く朝、火

氣を與へねば鉛のやうに硬くなるであらう、病氣に罹るか、災患に遭ふときは氣の脱けた芥、腐つた狗、いづれ性あるものではない、酒を飲めば醉歩蹣跚として、歌ふ、舞ふ、蹈る、笑ふ、怒る、泣く、喚く、罵る、鐵拳飛び、鉢毀れる、うち僵れる、眠る、嗽る、而して斯れが恍惚として夢心地のうちに包まれるのである、復た花を見ては心浮きて有頂天外に蜚び、戀に窶れては藻ぬけの殼となる、人間ほど脆いものはない、淺はかなものはない、淺はかなりとみれば、怒れば、我れを忘れて人を切り、饉ゆれば人の物を偸み、窮すれば虚言を吐き、已れ得意なれば友を友とせず、長者を長者とせず、高貴の人と見れば平身低頭、追從輕薄、履物を頂いて自ら頰をうつ、實に人間は恐ろしい、情ない、卑吝なものである、たゞ人が穩和しう表面を飾るは、或者の制裁が怖ろしう、世間體が愧しう思ふばかりにて、胸の締りを弛べぬのである、西洋人は體格も美事に、色艶よく、學文もあり金もあり、天晴れ宇宙の花よ、人間の寶よと人も許せば自らも任じてをるのであるが、四月十八日は桑港の大地震にて、家は壞れる、火は起る、鐵道、電信皆な毀れて官衙も役員も總潰れ、世界はさながら暝闇となつたとき、さしもの文明國人も、人間の皮を引き剝いで、忽ち夜叉の本性を顯はし、人を殺す、財産を奪ふ、女小兒は鷹に追はれた雀の如く、目もあてられぬ修羅道である、戰爭時分の滿洲人の話、革命時代の佛國のさま、聞くにつけ讀むにつけ、此れが人の業とは思はれぬ、人間ほど險呑なものはない、如し一日片時、法律を止るか、人の目を眠らすならば、世の中は鼎の湧く如く騒ぐのである、春の花見、盆の踊、祭禮、正月、少し上の目の緩きときは、何時も人は狂氣になるを見ても平常が思ひやらるゝ。

特に人の胸の中には、法律も屆かず世間體もなければ、煩惱の狂ひごころ邪慳の荒れごころで、汚いこと、卑いこと、慳いこと、筆にも紙にも載らぬのであろう、虫の好かぬものと觀れば打ち殺したく、不埒なりと思へば擲りたく、忌やなりと思へば逐ひだしたく、日に幾度か人を殺したり疵つけたり傷めて平氣である、又麗はしい花と見れば盗みたく、珍貴な器物と見れば摩替へたく、宏壯な邸宅と見れば貰ひたく、花の顔月の眉を見ては、それが欲しく妬ましく奪ふてやりたく、人の藝能、才智が羨ましく掠めて己がものにしたく、日に幾度偸みをするか數知れぬ、此のやうな恐ろしい考を、胸の裏に疊み込み込み、積み重ねた人間であるから、綿火藥を盛つた丸と同然、いつ何時破裂して一身の破滅、一家の破滅、一村一國の破滅になるか計られぬ、たゞ此の恐ろしい破裂丸の爆裂もせず、無事平穩なるは、高祖大師我と共に在せばなり、憂雲の俄かに簇がりたつ如く、日夜に起る妄念邪執を堅く壓へて、ならぬ、させぬと遏める力こそ卽ちこれが高祖大師である、世の學者たちは、斯れを名けて良心と呼んでをる、人を惡道に墜ちさせず、善に導く心の働きとするのであるが、それは高祖大師を信ずることの抵らぬからで、心の濁り身の濁りに遮へぎられて高祖の影を映しながら、其の影を捕へることが出きぬので、たゞ良心の聲なぎゝ呼ぶのである卽身義の中に、

佛日の影、衆生の心水に現じ、行者の心水、能く佛日を感ず。

とありて月は濁水をも照し、清き水をも照す、水澄めば月の影は明かに映り、水濁れは月の影は朧ろに映る、藻や浮草に蔽はれたる池の面には、月影は映らずして、たゞ覺束なく光りが照すのみである、され

ご水に影の映らぬこて、天に月の照さぬでなく、水に月の輝きて、影明かに映りたりこて、別に月の照すでもなく、皆な平等に雲井の月の照すのである、我が心も其の如くで、心いよ〳〵清ければ高祖の影はいよ〳〵明かに映るのである、大日經の中に、

自心澄みて清ければ諸佛の密嚴海會は悉く中に現じ、或は自ら如意寶珠の身を以て一切衆生の心水の中に於いて現ず、

こ言ふ故に、心清ければ高祖の影ばかりでなく、曼荼の諸尊が悉く我等の心中に影を宿す、のみならず、自ら不思議の身を現じて、他の衆生の心中に映るこある、是れは全く高祖大師の出世して衆生を救ふここの豫言であつて、高祖は卽ち其の豫言に中つた人である、實に高祖自身は極めて明淨なる鏡の如く、煩惱妄想の塵なければ、常に親り曼荼の聖衆こ并ばれたから、伊勢に參れば大神宮の影現あり、宇佐の宮にては八幡神の影向あり、高野闢きには丹生明神に東道を賴み玉ふ、又た幼年より無數の菩薩こ戯れてゐた、それは高祖の事であるが、我等は宿業が深重であるから、曼荼の聖衆に侍るここは願ふても、固より適ふここではない、然るに高祖大師は大悲願に依りて、自ら佛に代り、肉身を此の土に止めて、日々夜々に我等の心中に宿らるゝのである。

一切の江河、井池、大小の器に月も來らず水も去らずして、淨き月は一輪にして、普く一切の水の中に入る、我れ今ま復た是くの如し、衆生の心も來らず、自心も去らざれこも、而も見聞して益を蒙るここ、皆な實にして虛しからず。

是れは高祖の大悲願を允可し云ふ大日の說である、然るに我等は其の深重の大悲願にも洩らされて、高祖の影だに見るここの出きざるは、大日經の疏に、

心王は猶し池水の性の本より淸淨なるが如く、心數の淨除するここは客塵の淸淨なるが如くなり。

こありて、客塵を淸淨にせぬからである、池の水は本より腐れるではない、海の水澗の水、同じ淸淨の水であるが、塵が吹き寄せ、木の葉が落ち、藻が生へ、水草が生へ、子子が發生して水の本性を蔽ひ、濁つて嗅く腐つたばかり、水の性は少しも變らず、一度蒸發して天に昇れば、又た淸淨な水こなる、たゞ池の水を濁した塵埃を除くれば、水は昔ながら淸淨なので、濁りを客塵こ云ふのである、心で言へば卽ち煩惱煩惱が心の水を濁らせば、さしも大悲深重なる高祖の影も形も見えぬ、客塵の煩惱を除けば高祖の月影冴かにし、映らぬ隈はないのである、大日經には此の事を復た鏡に譬へて、

面は鏡に緣つて面像を現ずる如く、眞言の悉地も當に知るべし是くの如し。

斯れに依れば、心淸くして高祖の影の心中に映ずるは眞言の悉地成就の相である、此の事を釋論に說いて言へるは、

鏡の中の像は、鏡の作にもあらず、面の作にもあらず。鏡を執るものゝ作るにもあらず、自然にもあらず、亦た目緣なきにもあらず、若し鏡未だあらざれば像なく、像は鏡を待ち、面を待つて後ち有り、諸法は目緣に屬するが故に、自作に非ず、他作に非ず。

心中に影を宿すは、斯れ實は法爾自然の理であつて、高祖の創めた事でもなく、佛の掀めた事でもない、高祖の生れぬ昔より、高祖の影は歴然として衆生の心中に宿つてゐたが、衆生は盲いて見えず、蠶の自ら繭を吐ひて自ら縛らるゝ如く、己れを縛してをるのである、然るに今の人は、自由じや平等じやと騒ぎながら、投票權や自治權、言はゞ自分で飯を焚き、自分で床を片付けさせて貰ふたとての大威張り、ちと變ではあるまいかと思ふ。

斯くて高祖我と共にあることを知れば、渴するも盜泉の水は飲みたからず、饉ゆるも落穗は拾いたからず、詆らるゝも憾みず、迫害さるゝも激せず、貧賤に窘みても嘆かず、高貴に在りて驕らず、高祖の心を以て人を愛し世を慈しみ、高祖と共に畑を耕し布を織り、高祖と共に文を綴り繪を描かば、我れも其のまゝ高祖である、出で、僧となり、政治家となり、軍人となり、農夫となり、商人となり、藝術家となり、往くところとして實に國の寶である、今の人は、淺はかな、脆い人間の腕一本を頼みにして、浮世の中に乘りだすのであるから、爲すこと作ることは滑べりの、薄つぺらな、掃き寄せの、出來損ねの、見るも哀れな胡麿化しである、斯かる人は、何時、かの恐ろしい破裂彈の爆發するも知れぬ、此等の人は國に在つては國を危くし、家に在つては家を危くし、宗に在つては宗を危くするのである。

高祖我れと共にある限り、百千の艨艟海を壓して來ることも、怖れず騷がず靜まりかへつて待つて居られるのである、百萬の兵を率ひて百萬の敵に對陣して居ることも、高祖我と共にある故に安く寢ることが出來るのである、又沙胡ふく風あらく、滿洲の曠野に晒らさるゝも、夏なほ凍る北海の曠野に彷徨ふも、高祖我れと共にあれば淋しいことは更にない、我れ高祖と共にあれば、敵のあることなくして、惡人、猛獸、毒虫に襲はるゝ理はない、商買に損のあることなく、農作するに實らざることなく、我が身、家内の身、村の人、國の人、皆平等に高祖の兒なれば、現世ながらに救はれて、特に願はん未來なく、特に頼まん極樂なきものである。

人の貴きは國王に過ぎず、法の最なるは密藏に如かず、牛羊に策うつて道に趣くときは久くして初て到り、神通に駕して以て跋渉する時は勞せずして至る、諸乘と密藏と豈同日に論ずることを得んや、佛法の心髄要妙斯にあり。　太唐　惠果和尚

第二　三寶章

（自明治四十年至同四十六年頃）

種三　尊

一

密教には絶對體大界に對して別の見解を有つてをることは且らく措いて、宇宙の現象に就ても他の大乘教や哲學などゝ異なつた眼光を有つてをる、通佛教の解釋に依れば、現象界とは單に因緣假和合にして、浮雲や泡沫の實質なくして無常なるが如く、本來空なるも無明煩惱なる罪惡の印影として假りに顯はれたるものが現象界なりとする外に、現象界の内容に就ては少しも語らんのである、又た科學哲學にしても山の高き、花の赤き、樹の青き、水の冷たき、雲の蒸せる所以を說明するも、何故に高き山あるか、赤き花あるかは說明する能はずして、或は之れを神の意匠に依るといひ、或は之れを自然淘汰の理に歸し、或は之れを不可解なる天命に歸するのであるが、密教にては直覺的に理想の天馬を斷けらし、宇宙の現象が恁く成りて顯はるゝ所以を說明して、三の法則を立てるのである曰く、

一、宇宙は文字の發現なり。

二、宇宙の現象は文字の標章なり。

三、宇宙の現象は人格なり。

二

第一宇宙は文字の發現なり、密教の考に依れば、宇宙はたゞ文字にして文字の外に宇宙はない、而して文字に形と音と義との別あるが如く、宇宙は則ち文字の形と音と義との發表であるといふのであるが、其の言の稍奇矯なるために、普通には何の意なるやを解し難いやうであるが、此の考は印度にては頗る古くからあつて、かの聲論師などもそれであるさりながら其れと此れとの關係區別などは別に論ずるとして、宇宙の現象は則ち文字なりといふ思想にして明かならざれば、密教の宇宙觀は言ふまでもなく、密教其のものが判らんことになるほど重大な問題であるから、少し委しく說明せねばならぬ。

一、宇宙の現象が發現するは實在界に存在する眞理である、さて眞理とは何ぞ是れを具體的に言へば則ち文字であるから、宇宙は文字の發現なりと言ふのである、赤き花の有るは「赤き花」と云ふ眞理の發現したものにして、其の眞理が眼前に看る花の形を取つて居るのである、我々が單に赤き花を見るとき其の花が實際に存在して居るかの如く思はせる現象は「赤き花」といふ文字の標章に過ぎぬのであるから、文字こそは赤き花の根原であらねばならぬ、赤き花に就ていふと同じやうに、青き樹木も、山川も人も禽獸も其他一塵一法として皆其の如くならぬはない、さらに此れを文字の上の音聲に就いて見るも。

二、五大に皆響ありて地水火風空に各々響あり、打てば鳴り敲けば響かざるはない、而して響とは何ぞ則ち文字の音である、五大より成きたるものにして音なきものゝあらざるは、宇宙の現象の文字なることを示してをるのである、又た十界に言語を具してをるが、言語とは何ぞ心の響である、心に喜怒哀樂等の情が響を爲すときに言語となつて顯はれる、身にあるところの音を響といひ、心にあるところの響を言語と言ふ、されば身心ともに音ありて、身心が則ち文字なることを表はすのである、次に宇宙の現象を文字の形として見れば、

三、色聲香味觸法の六塵に皆文字の形が顯はれてをる、例令へば六塵の中に色塵といふ中に顯色と形色とある、顯色とは青黃赤白黑の五色、形色とは方圓三角半月等の形にして、此の顯色形色は則ち文字の形である、而して文字の形が物質の上に顯はるゝのみでなくして心の上にも顯れる、則ち行住座臥等は心の表章であるから之れを表色と云ふのであるが、此の表色は則ち心の上に顯れた文字の形である、次に宇宙の現象を文字の意味として見たなれば、

四、現象の上に文字の音と形との現はるゝのみならず、文字の意味が顯はれて居らねばならぬ、例へば人間の貴賤尊卑、富貴貧窶、壽命の長短、稟性の賢不肖、其の他飲食睡眠梵行等の種々の事象は皆な文字の上の意味が顯はれたのである、尙之れを廣く言へば春逝き秋來り、月傾き日昇り星燿き雲蒸し雨濕ひ、葉枯れ木生ふる種々の事象も亦た皆な文字の意味ならぬはないのである、要之、宇宙の現象は絕對界の理の現はれたるものにして、其の理は文字なれば宇宙間に文字ならぬは一もないのである。

現象界は無限に差別せるを以て見れば、文字の數の無限なることも明かであるが、假りに、人、狗、松、梅なごいふ普通名詞を以て算へるも、尙ほ其の種類は無限である、若し之れを個々別物に就て算へたなれば、人類ゝ言へる一名詞の下にも無數に異なりたる種類がある、從つて文字もいよ〳〵其の種類を增さねばならぬ、さて其の無限の中に自ら統一するものありて之れを惣攝するのである、聲字義の中に「眞言は無量に差別あるも、かの根源を極むるに大日尊の海印三昧王の眞言に出づ、かの眞言王ゝは金剛頂經及ひ大日經に說ける字輪字母等是なり、字母ゝは梵書の阿字等乃至呵字等の字是れなり、此の阿字等は則ち法身如來の一々の名字密號なり」ゝありて、梵文の十四の摩多ゝ、三十の體文ゝを以て、無限の現象なる文字を盡さんゝするのである、又た善無畏三藏の疏の說に依れば、此れ等の字母は阿字の一字を出づゝし、宇宙はたゞ此の阿字の表顯なりゝするのである、阿字は無限に廣大にして、橫に十方に亘り縱に三世を覆ひ、阿字の音ゝ形ゝ意ゝの顯現なりゝするのである、而して此の理を觀ずるは阿字觀の初めなりゝせらる。

四

第二宇宙の現象は文字の標章なり、自然科學者なごが現象界に就て說明を與へるゝき、物體は原素より成り、色は色素に依り、形は光線角度等に依るこゝを論ずるも夫れ己上の說明は與へぬから、何故に今ま見る如き現象界の形狀を取るに至りたるかは少しも解らぬのであるが、密敎にては事もなけに現象界は文字の標章なりゝするのである、さて文字を標章するゝころの現象にも種々で、

一、山の高き、海の深き、人間の四肢五官を具備せる、其の他自然に種々の形狀を成せるものは一々に其の後には文字ありて之れを成したのである、例へば水は𣶒字の標示、火は覽字の標示、風は訶字の標示、月輪は阿字の標示、其の他一微塵の小も皆な同樣である。

二、たゞに自然界が然るのみならず、製作品が亦た文字の標章である、例へば音樂のやうなものも、繪畫も彫刻物も建築の如きものから、日常の化粧品、農具、炊事具の如き工藝品或は蟻の築ける塔、蜂の作れる巢等皆な文字標章ならざるはない。

三、製作品のみならず十指を合せて印契を結ぶゝきも同樣にして、例へば火の印は覽字を標示して火が物を燒く如く此の印にも物を燒く功能あり、劍印を結べは吽字を標示し、劍の能く物を切る如く、一切の邪魔外道を切り、花鬘の印は十方の佛土に遍して諸佛に花を供養する、其他悉ての印は皆な又た文字の標示ならざるはないのである。

四、此の外に尙ほ精神現象も等しく、文字の標示にして例へば吾人の慾情は麼字の標示、怡悅は訶字の標示、愛慾は蘇字の標示、慢心は佉字の標示ゝいふ如き之れである。

恁くて身心に互りてあらゆる現象は皆な文字の標示なれば、文字無限なる如く標示も無限である、さりながら阿字が一字を以て一切を盡すが如く此の標示も月輪の一つ或は蓮花の一つを以て一切の標示を盡し、一の月輪を法界大に擴充して乾坤たゞ一月輪ゝ觀ずるが、之れ則ち阿字月輪觀である。

第三宇宙の現象は人格なり、現象界は文字の顯現にして、森羅萬象は此の文字を標章するものであるがさて其の一物象の後には一人格の有ることを認めるのである、凡そ宇宙の萬象が人格を有つてをるといふ思想は極めて古くから有ることころにして、世界人類の通性と云ふても可いのである、悉て國民の創世時代には神話を持つてをるが、其の神話の中の神たちは、山の神川の神月の神等の神々ありて、人類と同じやうに情もあり智もありて自由に活躍してをる、此れ等の思想は後世に到つて萬有神教の哲學を產んだのであるから、少しも新しい思想ではない、神話のみならず俗間に傳へらるゝところの如き、古き柳に精ありて人に化したる柳あり、葛の葉の狐も安名の妻として貞操を盡したるありの他櫻の精杉の精ありて人に化してをる、又た風光の秀麗なる地には地の精ありて天女となりて天降りたることや、雄偉なる山嶽の精としては森嚴なる老人に化して徘徊するといふ信念がある、今の科學者などは素より迷信として一顧にも値せざる如く論ずるも、此の思想は密教宇宙觀の綵華にして、此の觀念あればこそ宇宙は無生物の聯立せる、死したる寂しき處にあらずして、松にも岩にも土にも虫にも花にも、我等と等しき人格ありて活動して、頗る賑かなる處である、茲に到ると文學者の觀察と密教の觀察と一致するのである、文學者が天地を看れば天地有情にして星も雲も草も露も皆情ありて我に向ひ我に語り我と俱に悲み喜び跳つてをることを達觀するのであるが、未だ宇宙の妙を色讀し能はざる人は、此れを見ることが出來んのである、さて此の人格の宿るところとしては。

一、人間にも身體の外に人格がある、吾人の身體とは何ぞ、是は他の松柏などと等しく現象の根本なる、文學の標章なれば、只斯ればかりにては生命なき土偶も同樣であるが、此の身體の背後に眞の人格があるのである。

二、高等動物植物より、最も不完全なる無生物製作品等は云ふまでもなく、心理現象にも各々人格があるのである、例へば、愛情は金剛愛菩薩、慢心は金剛慢菩薩、仁慈は觀世音、悲痛は地藏尊、忿怒は降三世明王等にして、其現象が山川の如き永久的のものにも、雲霧の如き斷續的のものにも箱、桶の如き一時的のものにも現象として存在せん限りは其處に人格がある、又た軍隊、家族の如き其の關係の極めて粗漫なるにも不拘、それに相當せる人格がある、復た阿字が一切の文學を惣攝し、阿字を標示するものは月輪、而して月輪には大日如來なる人格ありて宇宙は只此の一人格の擧躰である、恁くて宇宙には無限の文字と標示と人格あるも、此れを攝すれば、阿字と月輪と大日とにして、純一無雜の一法界身となるのである。

六

茲に特に注意を要する二個の事件あり、其の一は吾人が前に便宜上宇宙の山川鳥魚金石等の形體は、現象の根本なる文字の標章なることを言へるも、今は其の言を少しく訂正せねばならぬ、何となれば其れ等の形狀は文字の標章であると同樣に又た此の人格の標示である、何となれば、前に陳べたる如く、宇宙の現象を達觀すれば、一々相好具足の人格がある、而して現象は文字の標章である如く、又た其の人格を標示するための假象なりとも見らるゝのである、例へば百性なる人格は鍬鋤を以て顯は

し、商人なる人格は十露盤に於て顯はれてをる、又た文殊菩薩の智惠を獅子の荒きこころに顯はし、普賢菩薩は象の柔和なるこころに顯はされてをるのである、恁くて現象界に於ける種々の形狀は一面文字の標章なるこ俱に、一面は又た人格の標章なることである、尙一事の注意すべきことは、文字こ標章こ人格この次第順序にして吾人は此れも便宜の爲に文字は現象界の根本にして、文字を標章するは現象而して現象の背後には人格ありこ云へるも只一現象界の三方面にして、必らずしも次第順序のある譯ではない、宇宙を文字なりこして見ればたゞ文字ばかりなり、又た之れを標章こして見れば宇宙はたゞ現象ばかりなり、而して之れを人格こして見れば宇宙は又た人格の充滿せるこころである、此の現象界の三方面は、實緣纒綿して次第を爲すのである。

七

此れ等の思想は云ふ迄もなく、直觀的理想にして、何等の哲學的考察を經たるものではなく、全く讀石のまゝの思想ではあるが、密敎の宇宙觀を取り合せて考へれば己上の如き態形を成すのである、而るに現流布の大日經、金剛頂經、理趣釋經、無畏三藏の疏、高祖大師の論文等には、此の宇宙觀を單に宇宙觀こして見ず、これを眞言修行者の修行の法規に取り入れて直ちに三密修行の根底を爲すに到つたのである、何こなれば、兩部の大經廣しこ雖、要するに佛陀の慈悲により、迷途の衆生に開悟の道を與ふることこが根本の目的にして哲學、科學の如く說明することに於て、萬事が終るのでないから、單に宇宙觀を說明する如きことは此宗に取りては無用の事であつた、さりながら三密觀行の意義を知らんこ欲すれば、先づ如上の宇宙現象觀に行かねばならぬのである、此の根底にして明らかなれば三密行も一々深き意義のあるこころを明かにするのである、さて此の宇宙觀が行者修行の法規こなりて如何なる形を成して顯はれたるかに就て見ねばならぬ。

八

經說によれば多く文字のことを種子こ云ひ、標章のことを三摩耶形こいひ、人格のことを尊形こいひ、之れを約して常に種、三、尊こ云ふのである、大日經の第六本尊三昧品の中に「一切如來に三種の祕密身あり、謂く、字、印、形像なり」こ言へるは、字こは阿字、唵字、等の字にして前に言へる文字に當り、是れを種子こ云ひ、印こは刀劍、蓮花等にして前に言へる標示に當り、是れを三摩耶形こ云ひ、形像こは不動明王觀世音等にして、前に言へる人格に當り、是れを尊形こ云ふのである、此の種子こ三摩耶形こ尊形こを、本尊こして横竪重々に觀ずるが三密の觀行である、さて種子こ三摩耶形こ、尊形こを觀ずるに就き種々の法ありて、

一、字輪觀の如き、阿縛囉訶迦等の種子を觀ずることあり。

二、結界の印の如き、三摩耶形のみを觀ずることあり。

三、入我々入觀の如き、尊像をのみを觀ずることあり

四、道場觀に至りては、一例を擧ぐれば「檀上に種子あり、變じて寶劍こなる、寶劍變じて不動明王こなる」こ云ふが如き種子より三形を生じ、三形より尊形を生ずこして、種三尊の緣起次第を觀ずるあ

り。

五、理趣經等にては、次第順序を異にして居る、例へば、初段に、金剛薩埵(尊形)が左の手に金剛慢の印を結び、右の手に金剛杵を抽擲して(三形)吽字(種子)を說く、此の次第は尊影より三摩耶形に入りて、內證法門なる吽字(種子)を說くものにして、尊、三、種と次第轉起するのである。

六、覽字觀の如き、覽字の種子より、火焰を生じ、一切を燒き盡すことを觀ずるは、種子、三形の緣起次第である。

七、其の他、佛菩薩が法門を說かるゝは、尊形より法曼荼羅を生起するので、是れは最も普通である、

八、又た高祖の祕鍵等によれば、法門より尊形を見る次第にして、心經は般若菩薩の內證法門で其法門は般若菩薩の大曼荼羅なることを說かれたものである、是れ等は種子より尊影を生ずる次第である。

是れを要するに、種、三、尊、の次第生起、斯く自在無礙にして、觀心の橫竪無盡なるは、種三尊の三者が本來平等なるがためである、而して三密觀行の効驗空しからず應驗の速疾なるは、種三尊が平等々々にして、緣起無窮なるがためである。

九

行者が本尊とし、對象として、種三尊を觀ずることは主として、大日經等の胎藏部に屬する經文の說くところである、然るに、同じく行者の瑜迦の境に顯はるゝ無限の現象を攝して、之れを四種の曼荼羅としたるは金剛頂經である、此の說によれば、

一、佛菩薩等の形像を繪畫するは大曼荼羅と名け、

二、本尊所持の標幟なる刀劍、輪寶、蓮花等の像を畫くを三摩耶曼荼羅と名け、

三、本尊の種子、眞言を書くを法曼荼羅と名け、

四、諸尊の種々の威儀動作等を畫くを、羯磨曼荼羅と名け、

行者觀心の對象なる、此の四種の曼荼羅は、則ち絕對體大に對する、差別相對界の現象にして、此の曼荼羅は卽ち宇宙の實相なるも、尙ほ旨とするところは行者の修證修顯にある爲に、其說相は常に行者の觀心を對象としたるものにして、宇宙觀を表とはしてをらぬのである、さりながら、行者の觀心は、常に宇宙觀を根底としたものであらねばならぬ。

十

上來陳べたる如く、宇宙現象の三則なる文字、標章、人格、則ち種三尊の思想は、祕密敎獨特の說にして他の諸大乘敎にても哲學にても、未だ曾て想到せざる、趣味ある宇宙現象觀である、さりながら密敎の此の宇宙觀が如何なる點に價値あり、趣味ありやに至りては、更に別種の考覈を經ねばならぬが、要するに密敎は哲學的でない、行者の觀心が主であるから、飽まで宗敎的である、而してたゞ理想派の文學者ありて、覺束なくも此れに彷彿たる思想を追ひ、朧けながら此の理想境に接觸することがある、東坡やウォルズォウスなどは、慥かに其人であつた、されど此の宇宙觀は全然直觀的にして科學的哲學的

學理でなくして文學的詩的である、而して文學が哲學と別の族幟を立てゝ居る限り密教は文學と握手して、永久に近世的哲學と接觸することがないかも知れぬ、然るに此の教の研究が進むに伴れて文學とは益々密接の關係を保つに至るかも知れぬ、而して文學が哲學と全く合一する時、密教も共に哲學と合一して、茲に三者が歸一するであらうが、夫れまでは、密教は飽くまで文學と同盟して行かねばならぬことゝ思ふ、而して此の種、三尊、説に對する哲學的批評は之を後日に讓るであらう。

三乘の興廢

佛教と呼ばるゝ中にはいふまでもなく種々の宗派があつて、其の數も頗る多いが詮じ來れば大同小異で、根本に於いて然まで相違はないのである。たゞ最も著るしき相違點を執りて區別すれば小乘、大乘、而して祕密乘の三乘である、此の區別とても假りのもので、三乘ともに齊しく解脱を求めるのを理想とするのであるから、終に同宗一味たることに背かぬのである。其の解脱を求むる方法に於て、相反するところがある、而して夫れが頓て三乘の分野を作るのであるから、茲には三乘を限度として、此れ等の各宗が興廢する所以を繹ねやうと想ふ。

一、小乘の特質は解脱を求めるには自己を緊縮するより可きはないとして、那邊までも少さく少さく自己を縮少して、其の極度に達したなれば解脱の眞鏡を得るものとするのである。此の小乘の考に依れば人は善いこともするが惡いこともする、慈悲善根をして人天の快樂を享けるやうなこともすれば、又た虚言を吐き、酒を喰み、淫を犯して地獄の果報を招くやうなこともする。何れかと謂へば人は偉きい大膽に過ぎる。然るに如何に大膽にしても因果の理法には勝たれぬ。地獄の火は恐ろしく、畜生の苦は痛ましいことも知らずして、日夕に其れ等の果報を招くところの惡業を働いてをるから、解脱を求むるものは其の惡業を捨てねばならぬ、恁くて人が惡業を働く原因を探つて見ると、貪、愼、痴の煩惱あるがためなれば、それを捨てねばならぬのである。さて煩惱を捨てゝ見ると身は清淨にして、心は安樂なることを得らるゝ。是れ人の惡德の部分を切り捨てたのであるから、それだけ自己を縮少し得たのである、かく身は清淨に成り心は安樂に成りたるも、尙ほ種々の善事をすれば却つて人天の快樂を受けて、槿花一朝の榮に涅槃常樂の志を損する懼れあれば、善事とても迂濶には爲すべからずとして、些々たる善事を捨てゝ一向らに涅槃の路を急がす。而して身心の活躍をます〳〵緊縮するために、二百五十の戒と十二の頭陀とを繩ともし鎖ともして己れを縛るのである。

本來蒼空には鳥の蜚ぶべき路とてはなく、海洋には船の航する路とては定まつてをらぬ如く、人は本能として縱横に働きたく、他の拘束を嫌ふ性情を持つてをるのであるが、其の性情のまゝ働いたならば、それが六趣四生に輪廻する種子となるために、悉ての活動の自由を拘束し、我れの範圍を縮少して、無我、無欲、清淨、安靜の醍醐味を貪るのである。既に二百五十戒、十二頭陀の狹隘なる檻の裡に己れを監禁して、自己はさらに少さく成りたるも、尙ほ飽かずまに、此の清淨なる身あれば養はねばならぬ、此

の安靜なる心あれば思はねばならぬ、之れも涅槃眞諦には障りなりとして、身は灰にし心は消して、自己は終に空無になりたるを、無我寂靜の解脫なりとして慶ぶのである。自己縮少の理想は茲に到つて究極したものとする。

極端なる小は極端なる大と一致するから、小乘の自己縮少の方法が必ずしも下劣なる解脫觀ではない。聖賢が苦悶し、奮鬪して、芭蕉の皮を剝ぐ如く、片々に己れを縮少して畢に灰身滅智の涅槃に至るまでの光景は、實に壯夫の偉業にして壯烈を極めるのである。さりながら其れは聖賢のことで、凡庸なるものになりてはたゞ情欲を制し世事を拋つて、戒行を嚴守するために、幾分か自己を縮少することを得て、心の安靜と身の清淨とを感ずるとき、我れは既に道に達したれば、清淨なる賢聖衆に交はることを得たりとして自己縮少の半程に安んずるのである。かゝる人も此の乘に依りて救はれたりとせねばならぬ。彼れを以て未得を得とするものと詆るは情なきことであろう。多くの律を持てる僧が自ら頗る高く居ることの能きるのは是れがためである。

然るに未だそれまでに安心の至らざるに、己れは自ら堪え得ざるまでに自己を縮少したるために、事々に戒行に拘はりて、酒を見るも怖く、婦女を見るも怖く、山を見ても川を見ても、何物も皆な我れを責むる惡鬼の如く恐ろしくして、何時とは知らず手も足も動かす能はざるに至りたるに、省れば衷には情火燃え、血肉跳りて活動的本能の壓迫は、堪えられざるほどに急にして、茲に習ひ來りたる道と自己の本能とは大衝突を開いて大煩悶を生ずるのである。頃日もさる居士の云へるに、予は十戒を受けたるも其れを保つこと能はざれば、苦悶に堪えず、此の戒を捨つる法なきやと。彼れは戒を持て剩せるものなるが、さらに進めば己が身をも心をも持て剩して置き處に窮するであろう。斯くて此の乘が自己を縮少して解脫を求めんとする理想も、衆生化導に於いて失敗に歸した。而して現代は正に其の極に達したのである。

二、自己を緊縮することを以て解脫の道としたる小乘の峻嚴なるに怯へられずして、夫れを拯ふものは大乘である。大乘は小乘に反して自己を極めて廣大なるものに擴張することを以て解脫の道とするのである。三界唯一心といひ、本不生といひ、諸法實相といひ、法界無碍といひ、何れも皆な無限に廣大なる宇宙を取り入れて、己れ一身の軀體とするのが理想である。されば世に惧るゝものさらになく、煩惱も可なり、菩提も可なり、地獄も天堂も皆な我が一心の造作にして自己の片影である。生死も涅槃も一つの眞如海の起伏であるから、死も痛まず生も嘆かず。從つて二百五十戒と十二頭陀行の狹隘なる檻の中に蹈まらずして、三聚淨戒を持ち六度の行に出て、三界に自由に遊行して旺んに活躍し、人天の下劣なる果報も厭はぬ、界外の勝妙なる果報をも求める。彌勒菩薩の如きは有情を化益せんがためには世間の名譽をも、俗官をも求めるといはるゝのである。かく宇宙の悉てを自己に取り入れて、無限に自己を擴張するとき、天の妙華と妙音樂と妙香とに充ちて、百福に莊嚴せられたる淨樂土は彼れの涅槃境にして、小乘教の落漠たる空境を喜ぶには似ぬのである。實に煩惱に屈せず、生死に駭かずして歩一歩自己を宇宙大に擴張しゆく狀態は其の跡を偲ぶだにも心ゆきて、大丈夫の氣宇實に欽すべき

であるさりながらこれとても大偉人のことにして、滔々たる凡庸には遠びもつかぬところで、小乘が自己を緊縮する教に於いて成功せざると同樣に、自己を無限に擴張するところの大乘の教も頗る不結果に終つた。

大乘を奉ずる人は切りに自己を擴張し、我自ら宇宙大の法身になりすまし、煩惱も我が德なり、菩提も我が德なり、生死も涅槃も地獄も天堂も皆な己れ一人に取り入れて、天上天下に怖いものなくなりては、彼も未得を得とする譏りはあるも、兎にも角にも自己を擴張する道程に在りて、それに滿足を覺えたなれば自ら拯はれてをるのである。幸にして夢な醒めそ。なまなかに自覺して、百福莊嚴の常樂を享受することは三大劫の後なることを知りたらんには、九天の頂より直下して、那落の奥底に墮つるよりも苦しいであろう、醒めざるものは幸である。此頃も一居士に遭遇したるに、彼の被れる笠の上に筆太く唯我獨尊と記してをつたが、彼れ等も幾分か自己を擴張して滿足せる幸福者であろう。さりながら彼等大乘の人は地獄の火も涅槃の常樂も偏へに一心の上の空華なりと觀じて見れば、酒も肉も怖はしとは思はず、南都北嶺の山法師の如く、解脫同相の法衣の上に甲冑を帶して馬を戰場に乘り入るゝも不思議とはせず、心外無別法と高を括りて自己の廣大を矜るのであるから、彼等も尙ほ幸福者たるには漏れぬのである。止め度もなく自己を擴張して最早や收集することが能きぬやうになりて後に、竊かに衷に顧みれば、我は昔ながらの罪の人薄福の人にして佛の說き給へる如き、宇宙を呑吐するところの人と、現實の我との間には越ゆべからざる溝渠ありて、己れには何の力もなき哀れの者なることを發見して、自失せざる者があるであろうか、今まで學びたるところは何ぞ、徒らに隣人の富を算へて己れが貧しきを忘れてゐたのに心づくであろう。恁くて自己を擴張することを以て解脫の道と爲した大乘教も畢に失敗であつた。而して現代は其の自覺に達した時である。

三、密乘は大乘の如く自己を無限に擴張して解脫を求めやうとしたのでない。又た勿論小乘の如く自己を緊縮して其れを解脫道とするのでもない。眞言行者の理想とし對象としたるものは曼荼羅である。曼荼羅の中には、法界を體とする大日尊の如きあり。外金剛部の中には、自在天、梵天の如き世天もあり。難陀烏婆難陀、北斗七星、毘那耶迦の如き異形の尊も居るが。是れ等の諸尊は皆な眞言行者の歸依の尊として應現したのであるから、若し眞言行者が大日尊を本尊として、夫れに齊しからんことを願ふたなれば、彼は自己を擴張して法界大の身となり、普門圓滿の高位に上る。復た一門の諸尊を本尊として、其れに齊しからんことを願ふならば、一門一德の尊なる文殊、普賢の至鬼蓄の尊とも成ることが能きる。我は本來大にもあらず小にもあらず。大なる大日尊と成り小なる菩薩諸天となる、皆な我が自由である。畢竟曼荼羅の諸尊とは行者が願ふて成り得るところの悉ての德を描き出したものである。而して行者が或は佛を願ふて佛となり、菩薩を願ふて菩薩となり、總て願ひのまゝなるところの其の妙智力は、現身の我に於いて得らるゝのである。例せば高祖は淸涼殿に於いて南面して大日覺王の瑞相を現ぜられ、或は日輪觀に入れば爀燿たる日輪の相を現じ、水輪觀に入れば洋々たる水大の相を現ぜられた。復た興敎大師は衆徒に迫害せられたるとき不動尊と成り、或は五大の觀に住し給へば五輪

の塔婆を現ぜられた。覺海上人は生身のまゝにして天狗の群に入りたるが如き、皆な其の例である。されば眞言行者は大乘の如く自己を擴張しつゝ、歩一歩づゝ進取して解脫に近づくが如くにはあらずして、たゞ佛のみ得給へる神通を學んで佛の行樂をする人である。解脫を得て佛の行樂を許されたのが行者にして、解脫を求めんがために曼荼羅の行を修するのではない。されば佛が既に因果の制約を受け給はず、因果の制約に超然たる如く、眞言行者には因果の制約のために支配せらるゝことはなくして、却つて因果の理法を顧使するのである。何ごなれば彼が曼荼羅の行に入りて人天の果報を受け、又は佛菩薩の快樂を享受するのは彼が長き苦行の報酬にはあらずして彼れが任意に佛ごなり菩薩ごなつたのである。されば彼れは常に因果の理法に命じて「我は鬼ごならんごなる思ふ。汝は鬼の果報を我れに與へよ、我れは佛に成らんごなる思ふ、汝は我れに佛の福智莊嚴の果報を與へねばならぬ」ごいふ。而して因果の理はたゞ其の命に隨ふて彼れがいふまゝに其の果報を捧げねばならぬのである。過去の業因に緣りて今貧しき人のために眞言行者が福あれごなる命ずれば、貧人は直ちに富を得る。過去の業因に緣りて病苦を受けつゝある人のために眞言行者が平癒させよごなる命ずれば、病者は直ちに健康ごなる。國亂るゝごきは平治を命ずる。國敵の侵入するものあれば退散を命ずること皆な掌を指すが如くである。而して其の事例にも匱しくはないのである。高祖大旱のごき神泉苑に雨を祈りて五穀の種の盡きざるこごを得た、疫癘ありて宮中府中に死するもの首を列ねたるごき、心經を講讃し給へば未だ結願に達らざるに蘇生の輩、途に佇んだのである。藥子の亂には之れを祈りて朝敵は踵を反さずして亡んだ。而して此れ等解脫己上の法を得るには大乘、小乘に於けるごなる同樣に豫て解脫を得ねばならぬ。さりながら其の解脫の法を得るこごが既に他ごなる異つてをる。他の二乘にては解脫は長き苦修の應報であるが、密乘の解脫はたゞ三摩耶戒壇に入つて阿闍梨の三摩耶戒を受けたるごき忽然ごして是れを得るのである。此の法を修して後に解脫を求むるものも無き例にはあらざるも、其れは斯の乘の本意にあらずして除外例である。さるにても恁かる貴ふごき法を宿業深くして薄福なるものが易く習ふこごを得るは、全く末世澆季にして法の衰へたのがたま〳〵僥倖ごなつたのであろう。

さりながら寔に密乘を傳へるものは上根上智の人でなければならぬ。偶々之れを習ふこごを允さるゝも烏は鳳凰に似るべくもあらず。高祖の如く興教大師の如く曼荼羅を己れに取り入れて、自ら曼荼羅の聖衆ごなるこごはやはり大天才でなければならぬ。凡庸なる者に至りては、之れを己れに同化するこごを能きずして客觀的に實在するものゝやうに憶ふ。卽ち我れの外に客體ごして曼荼羅の聖衆が實在して居るごいふ觀念は什麼しても攘ふこごは能きぬ。然りながら一の不思議は斯の曼荼羅の聖衆が客觀的に實在してをるごして、さて其の聖衆を念ずれば分相應に應現のあるこごである。驗者が祈念に依りて病氣を癒やし、福德を得、災厄を遁るゝごいふやふなこごがある。何故に斯の應驗があるかは別にして、斯の驗のあるために我れ等は密乘に於て、迷を生ずる根源ごなるこごを忘れてはならぬ。何ごなれば假りにも應驗のあるがために既に祖師の得給ひし如き瑜伽の行が我れ等にも得られたりごなる思ひ做すに至る。是れが迷妄の原である。蒼き光を見て星なりごなる思ふて捕りたるに、星にあら

ずして螢の光りであつた。螢を星に誤るは愚人のことであるが、凡庸のものが應現あるがために瑜伽の行を得たりとするは其れに似て非なるものゝ甚しいのである。

更らに曼荼羅の聖衆を客體として、其れに應驗を求むるものは自然それに依賴するやうになるものであるが、是れが迷妄の一段深くなつたのである。何となれば曼荼羅の諸尊とは則ち我が事であるから、諸尊は己が意のまゝなるべき理のものなるに、恁くなりては却つて其れに依賴し其れに追從して諸尊の命を肯かねばならぬ。曼荼羅が主にして我れが從となりて、冠履顚倒するのである。斯くて我れ等は自己を滅却して曼荼羅の諸尊に奉侍するに忙はしくなりて、自己の所在をすら失はねばならぬ。さりながら此の根本の大誤謬あるにもせよ、曼荼羅の聖衆に歸敬して其れに依賴するはせめても の幸福である。大乘、小乘の相次いで跡も朧ろになりゆかんとするときに、密乘の面影の那邊やらに現存して、人心の歸向を繫ぎつゝあるは此れがためである。なまなかに我れと曼荼羅との眞の關係を察して、我れは則ち曼荼羅なることを知らば不幸である。何となれば我は既に廣大無邊にして神通無碍なる曼荼羅を、我が身中に建立するに堪えられぬ。さりとて曼荼羅の聖衆は客觀的に實在するものにあらずして、自身の肖象なりとすれば我れ自ら我れに賴むことは頗る覺束なく、進んで曼荼羅の聖衆ともなれず、退いて諸尊に加護を仰ぐこともならず。彼れには曼荼羅は無用の表儀となるであらう、恁くて密乘の一切衆生本有薩埵の教も衆生を化導する目的の上に於いて大なる成果はなくして畢るであらう。

さりとて他力易行の淨土門も獨り衆生攝化の偉勳を矜ることは能きぬ。而して現代の如き時勢に遭遇して、かの宗の人は奈何なる進路を採るであろうか、たゞ是れが最も興味ある問題である。要之、小乘も大乘も密乘も各々異なりたる特質に於いて、民衆化導の目的を充分に達することが能きずして、今は社會に取り殘されつゝあるが、之れ原より法の不備なるがためにあらずして、一に時世の風潮に依るのである。慈雲和尙の十善法語の中に「周代子弟を封じて後世に微弱になり下る。秦始皇此に懲りて天下を郡縣にす後奸臣君を欺て速に亡ぶ、漢の高祖が秦の孤立に懲て子弟を分ち封ず。景帝の時に至つて吳楚七國の兵起る。事の利と害と相依りて功と弊と相伴ふことかくじや」といはれてある。教法の行はれるとは行はれざるとは一に時勢に依る。時潮は人の血を好む惡鬼が、血を吸ふては骸を殘し行くやうである。小乘の血を吸い、大乘の血を吸い、密乘の血を吸ひ、而して骸をのみ殘して次の新しき食い物を漁りゆくのである。人は無宗教で居るものでない。何等か新しい宗教を作つてをる。然るに今の宗教を職とするものは、夫れを看出そうとはせずして、新たに作つて與へやうとしてをるが、賢き宗教家は彼れ等民衆の自然に作り上げたるものを引き上げて、それを新たな宗教として出すのである。其の新たな宗教といふものも既に成きて居るやうに思ふが、其れは別問題であるから殘さねばならぬ。

五種の供養

三月二十一日は吾徒に取りて最も神聖なる紀念日なるに、恰も其月の其日本誌が第二十一號を出すに至りたるは、偶然とはいひながら實に奇しき因緣ならずとせず。いでや香、華、燈明、塗香飲食の供具を刷ひて、聊か祖師の靈前に報恩の誠を擧げんか。

一

佛に供養する物資は經說に依りて種々なり。陀羅尼集經には二十一種を上げて、(一)道場を莊嚴し佛像を沐浴する、(二)尊像の前に水壇を作る、(三)妙香を用ひて像身に塗る、(四)華鬘を絡け、(五)天冠を預け、(六)寶釧瓔珞を以て尊像を莊嚴し、(七)寶帳、(八)香を燒き、(九)雜色の旛を懸け、(十)繖蓋を懸け、(十一)燈を燃し、(十二)百味の飲食と甘果を備へ、(十三)鈴珮を懸け、(十四)樂器を懸け、(十五)雜色の花、(十六)寶扇、(十七)種々の衣服、(十八)寶鏡、(十九)寶瓶、(二十)眞珠網、(二十一)白拂の勝妙なるものを供養すべしと。されど設し斯の二十一の供具を備ふる能はざれば、五種にても可なりとし、更に(一)香水、(二)雜華、(三)燒香、(四)燈明、(五)飲食を上げたり。五種の供具は密敎の通規にして、經軌の說は多く是れなり、たゞ金剛頂部に在りてはかの五種の中に香水を除いて塗香を加へたり。凡そ焚香、華、燈明、飲食を供養することは通じて佛法の習慣なるも、之れを供養する觀念に到りては顯敎と密敎と其の趣を異にせり。慈氏菩薩は世尊に問ふて曰く、一香一華の微少なる供養を以て無上菩提の大果を得るは何故なるかと。世尊之れに答て曰く、供養の具は微少なるも供養を爲すとき、此の功德を以て一切衆生と與に無上菩提に到らんことを發願し回向すれば、其の心念の力廣大なる故に、得る所の功德も自ら廣大なりと。故に一輪の花、一抹の香には何等深大なる意義のあるなく、供養とは單だ佛に歸命するといふ一心念の表彰と見るべくして、花よりも香よりも佛果の得らるべきものにあらず。之れを得ることは偏へに回向發願の廣大なる功德に依るなり。されど是れ密敎と旨の異なる所なり。今密敎の瑜迦行の中に獻ずる所の五種の供具には自ら深大なる意義ありて、一々の供具には一々の表彰あり、功德あり、一香一華の微も一に歸命の表彰にあらずして圓々海の實義なり。斯の圓々海の實義を彰はすものを密敎の瑜迦の行といふ。

二

密敎には佛菩薩を祀るに作法あり儀則あり、其瑜迦の行に於いて有相と無相との二あり、有相の行に依れば、眞言の行者、佛菩薩を祀らん爲に、道場に入る。其の時澄み亙りたる空には數限りなき星羅の輝けるが如く、數限りなき佛菩薩の盈ち滿ちて各々自證の三摩地に住し給へるを見る。行者は其れ等の諸尊の中よりして、今祀らんとする本尊、例へば大日尊、觀世音、或は不動明王の如き尊を其眷屬と俱に壇上に奉迎し、豫て備へたる香華、燈明等の供具を饗するなり。十八道口傳抄に曰く、「瑜迦の行は譬へば大國に貴賓を請じて種々の歡待を爲すが如し。其の作法に擬して本尊を供養するは則ち行者の向上發展する徑路なり」と。是れをかの顯敎の諸敎に樹下石上、若しは蘭若に在りて只管ら心膽を練る如き、又た淨土門の一向に稱名念佛する如きものと對比すべくもあらず。次に無相の行に依れば、有相行

と齊しく虚空の中に星羅の如き輝ける佛菩薩を觀るも、其れ等の諸尊は心の外に在るに非ずして、悉く行者自身が本來具足せる自心中の諸尊なることを知り。復た其れ等の諸尊を迎へて壇上に降臨影向を乞ひ、香花等の供養を爲すこと、恰も大日尊が自心より湧出したる曼荼羅の諸尊に供養し給ふと齊しく、行者自心の諸尊を供養し、行者本來の德を遺憾なく展開し發顯して暫らく佛の境界に悠遊するなり。されば供養するものも我なれば供養を受くるものも亦た我にして、我自ら我を饗する所謂金剛の舞戯なるものなり。然れば此の無相瑜迦の行と、彼の有相瑜迦の行とは原二途なるかといへば、爾らず、有相の行を修するとき心外に諸尊を見たり。其の諸尊は無相の行に入りて觀るに皆な自身の佛なりき。有相の行に在りて虚空の諸尊に供養したるものは、實には自心の佛に供養したるものにて無相の行なり。故に有相行は直ちに無相行にして、有相の外に無相あるに非ず。無相なることを知らずして心外にのみ佛を觀、虚空に在る佛にのみ供養すると想ひ誤れるものは有想外道なるべく、又た心内にのみ佛ありと想ひて心外に現に胡麻の如く夥しき諸尊の森羅として駢羅し給へることを知らざれば、實に自身の佛を見ることを得たる人に非ず。一心の德をのみ觀ずる人は空無相に執着する顯教の人なり。虚空中に諸尊の有るを知り、顧みて是れ自心佛なることを知るは無相を得たる人なり。斯くて有相即ち無相にして原より二あるべからず。されど其の間に自ら分のあるは一に瑜迦を修する上に行者の方より見たる別なり。即ち有相の行は無相に到る方便にして行者は先づ有相行に入り、漸く進んで無相に達す。故に法の方には無相有相の差別なきも、行者瑜迦の觀行に入るとき有相無相の歴程を迦り、其の迦に就きて此の區別を成したるなり。

三

佛に奉る物は何にても不可なし。赤心を以てすれば佛は喜んで是れを受納し給ふ。されど瑜迦の行に在りては首として燒香、華、塗香、燈明、飲食の五種を以て供養するは、此れ等の五種は他の悉ての供具を總攝して剩さゞればなり。何となれば凡そ法界の體性は地水火風空の五大に外ならず。五大は法界の全體なり。而してかの五種の供具とは何ぞ、則ち此の五大の精なるものなり。一種は一大の權化なれば、五種のものを供養するときは法界を盡して供養するに當る。曰く、

一、焚香……火大、焚香は火の精也、一點の火は漸次に蔓りて宇宙をも燒き盡す德あり香に遍至の義ありとは是れなり。道範は焚香を釋して「火の薪を燒いて、設令へ大千世界なりと雖も熾んに煌いて懇むことなし。故に燒香を以て精進波羅密に配す」と。燒香は火の標徴也。

二、華……水大、華は水の精なり。道範曰く「草木五穀は皆な雨露の恩施に依りて華咲き種子生じ果實を成ず」と、水の精なるものは花なり。又た水は方圓の器に隨ひ平等を以て性とす。平等なる故に温柔なり。道範花を釋して曰く「一切の花は皆な柔軟なり故に花を忍辱波羅密に配す」と。花は水を標徴す。

三、飲食……地大、穀粒は地の精也、地には養成と安靜との德あり。山川、人畜、草木皆な地に住し地に養はるゝ故に安靜なることを得。護摩口傳鈔に曰く「世界のもの飢渴すれば身心騒動す。飲食を得れ

ば身心安靜なり」と、又た道範は飲食を禪定波羅密に配す。能く智慧と淨戒を養ふて安靜ならしむるは亦た禪定の德なり。故に飲食は禪定、地大を標徵す。

四、燈明……空大、燈火は空の精也。光明は大空の德にして、霽々たる空は常に輝けり。輝きの中に在る日も月も星も皆な光りあり。隕石も空氣の摩擦によりて光り、雲も蒸して電光あり、道範は智火の光明は愚痴の暗弊を照すとして是れを般若の智慧に配せり。燈火は空の標徵なり。

五、塗香……風大、香は風の精也。風に清涼と遍至との德ありて、風の往かざる處なく、風動いて熱惱と嗅毒とを攘ふ。塗香にも無垢と遍至との義あり(護摩抄)、道範塗香を釋して曰く「天竺にては極熱の時香を水に和して身に塗るに清涼安樂なり」と塗香を戒波羅密に配す。塗香は風の標徵なり。

斯くて五種の供具は五大の標徵にして五大の精なり。五大の權化なりされば五種の供具を以て供養するとき、卽ち法性の五大を擧げて献ずるなれば、一香一華の微も實には法界に遍滿して大供養雲海を起し、三世十方の一切の佛菩薩に悉く妙供を饗して剩りあり。一香一花能く法界に亙りて一切の佛事を成ぜんがために、かの遍至の德ある燒香に薰じて後献ずるなり。後世供具を香に薰ずるを以て淨にするの意と解するは理りなきことなり。慈雲和尙曰く、曼荼羅の四供養の周圍に五色の雲を畫くことは、此の供具の十方に遍滿して雲海の供養となることを示せるなり。と則ち此の意なり。

四

吽字義に曰く「自行と化他とを圓滿して闕くる所なければ、功德莊嚴の妙身自然に出生す」と、佛とは功德莊嚴の妙身をいふ。大乘義章には此の佛の功德莊嚴のことを釋して、莊嚴に二種ありとして曰く、「一には福德莊嚴にして之れを又た功德莊嚴と名く。二には智慧莊嚴なり」と。佛妙身とは智慧圓滿し福德圓滿したるをいふ。されば佛果を志求するものは智慧を磨き福德を積まざる可らず。然るに智慧莊嚴は如何にして得らるべきか。曰く四諦十二因緣を觀じ、般若の妙空を觀じ、一心三諦を觀じ、五相三密の妙觀を凝らして得らるべく。又た福德莊嚴とは云何にして得らるべきか。曰く六波羅密三十七菩提分法等に依りて得らる而して今の五種の供養の如きは福智の中には福德莊嚴に屬すべきものなり。

一字頂輪王の儀軌に曰く、

我塗香を献ずるとき、五分法身を得らるべく、苦惱せるものを慰めん。
華を献ずるとき、三十二相を得て、妙覺の華臺に登らん。
焚香を奉るとき、悅びと美はしきを得て、馥郁たる香りを娛しまん。
食を献ずるとき、いとも微妙なる、天の甘露味を雨らさん。
燈を献じて、かの五眼を得らるべく、永く煩惱の犬を逐はん。
我積むところの此の福業、能く拯ふて何物をか遺さん。(取意)

實に供養は福德莊嚴の因なり。されど此の儀軌の當面の意は尙ほ有相のうちにあり。若し深く是れを觀ずれば、此の有相は則ち無相ならざるべからず。行法肝心抄には供養に就いて四重の祕釋を試み、

初重、三世の諸佛は五供養を修行したる故に、我も亦た是れを行ふ。

二重、自心中の諸尊に供養し奉る。自心の外に別法なければ自心に自供養するなり。

三重、五種の供具は則ち六大なり。六大を人にすれば大曼荼羅にして女形の菩薩なり。

四重、此の供具の一々は圓々海の實相にして、法界はたゞ是れ四種法身自受用の妙供なり。（取意）

一香一華の微供も洵に廣大なる佛事にあらずや。而して行者自身の福業は直ちに餘他の衆生と俱に其の功德を享受する故に、自行は則ち大悲化他の妙用をも圓滿するなり。

五

斯の五種の供具に閼迦（水の梵語）を加へて六種と爲し、之れを又た布施、淨戒、忍辱、精進、禪定、般若の六波羅密の行と成す。されば行者かの六種の供具を獻ずるとき、顯の諸大乘の菩薩の三祇を經て暫く成就するところの六度の功德を一時に成滿し、兩部曼荼羅の色相は遽然として我が一心の華臺を飾る。何となれば六種の供養を爲すとき、本來我が具有する六波羅密の德は、春の雨に遇ふて一時に花の開く如く、其の雷に驚きて封を開く蟄虫の如くに開展するなり。高尾の口決、檜尾の口決其の他の諸抄には一樣に六種の供具と六度とを配して、

一、閼迦……布施、水に滋養の德あり、布施は克く物を拯ふ、故に閼迦は布施を表示す。

二、塗香……淨戒、塗香に防非と無垢との德あり、戒は惡を遮し懊惱を除く。故に塗香は戒を表す。

三、華……忍辱、花に柔軟の德あり。忍辱は恩怨と好憎の心なくして温和なり。花は忍辱を表す。

四、燒香……精進、一點の火舉に世界を燒盡す。障碍を破つて進むは精進也。故に精進を表す。

五、飲食……禪定、食に安穩の德あり。禪定靜寂を旨とす。故に飲食を以て表示す。

六、燈明……智慧、燈火は暗黑を破り物を照すを德とす。智は煩惱を碎きて光明を與ふ。故に表す。

されど經軌の配釋は往々にして一順ならず、例へば觀自在念誦儀には、焚香を禪定に配し、華を般若に配し、燈明を方便波羅密に、塗香を誓願波羅密に配する如きあるも義門は自ら別なるべし。復た五種の供物を獻ずるに順序ありて、經軌の說相は種々なり。例へば、

華、燒香、塗香、燈明、飲食と次第するは……蘇悉地經等。

塗香、花、焚香、飲食、燈明と次第するは……瞿醯經等。

香、花、燈明、塗香と次第するは……禮懺。

花、香、塗香、燈明と次第するは……金剛頂經。

花、香、燈明、塗香と次第するは……石山次第。

其の他多少前後するところあるも、今普通に行はるゝところは瞿醯經の次第にして、六度の施戒忍進禪慧の次第に應ぜり。尙ほ五種の供具を諸尊に獻ずるに就いて、其の本尊に相應し又た希願の種類に相應して獻ずべき供具にも夫れ〳〵區別あるなり。蘇悉地經に曰く、「復次、分別說三品法、息災法、增益法、調伏法、及諸法、是爲三品、三部各有三等、眞言」と、然れば之れを曼荼羅の諸尊に見るに、

- 三部
  - 佛部
  - 蓮花部
  - 金剛部
- 三等
  - 聖者……佛、菩薩、聲聞、緣覺
  - 諸天……三十三天の諸天尊
  - 地居天……夜叉、阿修羅、迦樓羅、乾闥婆等
- 三品
  - 息災法、
  - 增益法、
  - 調伏法、

曼荼羅の諸尊を三部に分ち、其の一部の中に各々聖者と諸天と地居天との三等の別ありて皆な其の性を異にせり。されば是等の尊の孰れかを供養する時其の本尊の本性に相應したる供養を爲さゞる可からず。而も同じ尊に在りては息災を祈り增益を祈り調伏を祈るとき、其の法に應じて夫れ〳〵の供具を備へざるべからず。例へば佛部の尊には華を奉るにも多く白きものを相應とす。佛部の中にも佛には白き花、菩薩には黃なる花、諸天には赤き花を最も相應とす。又た同じ佛部の佛菩薩世天を供養するにも息災の法を修するには甘き花、增益の法には淡き花、調伏の法には辛き花を相應とする如きなり。華に放けるが如く焚香にも飲食にも皆な三部三等三品に各相應の品類あり。

六

然れど是れ等の供養は單に瑜迦行者のことに非ずして、大日世尊は常に安住し給へる法界宮に於いて、又た此の供養を爲し給へり。瑜迦の行とは實には其れに習へるなり。大日世尊は法界宮殿に在りて阿閦、寶生、彌陀、釋迦の四尊は其の四方に住し給ふ時、大日尊は四佛を供養するため自內證より四菩薩を現じ金剛嬉菩薩を以ては喜悅莊嚴の種々の供具を以て東方の阿閦佛を供養し、金剛鬘菩薩を以ては淸淨にして光明なる寶珠に其の身を飾らして南方の寶生佛を供養し、金剛歌菩薩を以ては讃歌し諷詠して西方の阿彌陀佛を供養し、金剛舞菩薩を以ては妙なる舞踊を爲して北方の釋迦尊佛を供養し給ふ。此の嬉鬘歌舞の四菩薩を內の四供養と云ふ。其の時四佛は大日尊の此の供養に酬ひ奉らんがために阿閦佛は內心より金剛焚香菩薩を流出し、寶生尊は內心より金剛華菩薩を流出し、彌陀尊は內心より金剛燈菩薩を流出し、釋迦尊は內心より金剛塗香菩薩を流出して、何れも大日世尊を供養し奉れり。是等の四菩薩を外の四供養といふ。興敎大師は之れを詠じて曰く、

四佛は四菩薩を化して、何れの道場にか至る。東方阿閦の化身は、金爐に寶香を焚き。
南方寶生の化身は、華を持して法主に献ず。西方彌陀佛の化身は、手に燈の光りを執り。
北方不空の化身は、兩手に塗香を捧ぐ。……（五部宗祕論取意）

慈雲和尙曰く、「大日世尊の內證より內の四供養菩薩を現ずるは猶ほ輪王の萬國の諸侯を饗する如く、又た四佛の內證より外の四供養菩薩を現ずるは猶ほ世間の諸侯の貢物を輪王に擎ぐるが如し。世間の儀に卽して眞を顯はすものにして是れを法華には世間相常住といふ」と。斯くて四佛四種の供養を以て大日尊を供養せらる。然るに分別聖位經の會座に在りては、大日尊は其の內證より嬉鬘歌舞の四菩薩を現ずると共に、香華燈明塗香の四菩薩をも流出し、斯れを以て十方世界の一切如來を供養し給へり。經に曰く、

「世尊は焚香三摩地智を以て自ら受用し給はんが爲に、焚香光明を流出して徧く一切如來を供養し、次で此焚香光明を收めて一聚と成し金剛焚香侍女形と成る。復た世尊は覺華三摩地智を以て自ら受用し給はんが爲に覺華光明を流出して徧く一切如來を供養し、次で此の覺華光明を收めて一聚と成し金剛華侍女形と成る。復た世尊は燈明三摩地智を以て自ら受用し給はんがために塗香光明を流出して徧く一切如來を供養し次で此の塗香光明を收めて一聚となし燈明侍女形と成る。復た世尊は塗

香三摩地智を以て自ら受用せんが爲に、塗香光明を流出し徧く一切如來に供養し、次で斯の塗香光明を收めて一體と成し塗香侍女形と成る。是れ大日尊自ら香華燈明塗香を以て十方の一切如來を供養し給へるなり。又曼荼羅抄は他の金剛頂部の說相と異なりて內の四供養は四佛の現ずるところにして、大日尊は外の四佛を現じて四佛を供養すと說けり。要するに或は能供となり或は所供となり何れも佛の無碍自在智にして妙用無窮なるものなり。

七

聖位經の文に顯れたる如く、かの香華塗香燈明の四供は如來の三摩地智より出でゝは四種の供具と成り又は斯れを收むるときは直ちに金剛香、金剛華、金剛燈明、金剛塗香の女形の菩薩と成る。或は供具となり或は菩薩形と成る皆佛の無碍智に依る。然れど是れは法界宮に於ける佛と佛との間の舞戲にして、我等の獻ずる香華はたゞ微少なる供物に過ぎざるか。爾らず。瑜迦の行は宛然法界宮に於ける其のまゝの行にして、行者の法と佛の法と二あるに非ず。故に行者の獻ずる供具も世尊の成ぜるが如き廣大の佛事を成ず。焚香を獻ずるとき金剛香菩薩の加持に依つて無礙智香を得、華を獻ずるとき金剛華菩薩の加持に依つて覺悟の華を開き、燈明を獻ずるとき金剛華菩薩の加持に依つて清淨の五眼を得。塗香を獻ずるとき金剛塗香菩薩の加持に依つて戒定慧解脫解脫知身の五分法身を成ず（聖位經の意）。されば四菩薩の加持に依りて我等の奉る香は十方に徧滿して雲海の供養と成り、斯の供養雲は收つて一體と成りて香菩薩と成る。花を獻ずれば華は十方に遍滿して雲海の供養と成り、斯の供養雲は收つて一體と成りて華菩薩と成る。塗香を獻ずれば塗香は十方に遍滿して雲海の供養と成り、斯の供養は收つて一體と成り塗香菩薩と成る。燈明を獻ずれば燈明は十方に遍滿して雲海の供養と成り、斯の供養雲は收つて一體と成りて燈明菩薩と成る。實に廣大の佛事ならずや。然るに是れも尙ほ我等が有相の行に滯留するときの事にして、設し有相より無相に入らば我が供養を加持して廣大の佛事を成さしむるところの四菩薩とは何ぞや。則ち自身本具の四菩薩にして大日より流出したる四菩薩も亦此の外にあるなし。加持する四菩薩も我なれば加持せらるゝ者も我なり。我自ら我を加持すること大日尊に異ならず。大日尊と雖も四菩薩の加持にあらざれば廣大の供養雲を流出すること克はず。大日尊が加持せらるゝ如くにして我も加持せらるゝなり。斯くて我は四種の供養を爲すとき、我本來具足せる功德を遺憾なく發揮し展開して、大日尊と齊しき妙用を實現す。是れを顯得の成佛といふ。されば瑜迦の行は行者に取りて最も光榮あり、最も崇高なる金剛の遊戲なるべし。さて又た斯の四供の菩薩は種々に化身して種々の功用を成せり。例へば金剛頂經の理趣會に在りては春夏秋冬の四季の菩薩として顯る。十七聖大曼荼羅義述に據れば、

金剛春菩薩……妙華を供養し衆生の爲に功德を成す。故に斯の菩薩は華を持せり……理趣釋には莊嚴淸淨句是菩薩位の句を釋して春金剛菩薩とす。

金剛雲菩薩……香雲を供養し慈雲を以て有情を潤す。故に香爐を持せり……理趣釋には意滋澤

清淨句是菩薩位の句を釋して雲金剛菩薩とす。雲は夏季に當る。

金剛秋菩薩……燈明を供養し智慧を以て暗黑を破る。智慧の清爽なること秋色の如し。故に燈明を手に持せり……理趣釋には光明清淨句是菩薩位を以て秋金剛菩薩の三摩地と釋す。

金剛霜雪菩薩……塗香を供養し衆生煩惱の熱を除き五無漏身を成す。故に塗香を持せり……理趣釋には身樂清淨句是菩薩位を以て冬金剛菩薩と釋す。霜雪は冬季に當る。

茲に一の疑ひあり。事の供養の時は五種なるに、曼荼羅の上には香華燈塗の四菩薩となりて飯食の一種を缺けるが如し。されど實は缺けたるにあらずして曼荼羅の上にあり。傳に依れば大日尊より流出する嬉鬘歌舞の四菩薩は則ち飲食に當ると。禮懺鈔に「內の四供は大日の流現にしてかの振舞をなすは是れ法喜禪悅の意なり」と。法喜禪悅は飲食の義にして內の四供は則ち其れに當れり。要するに五種の一連の供具の中にも一は大日尊之れを供し、他は四佛之れを供し、或は能供となり或は所供となり、五佛互ひにして重々無盡の意を成せり、深義を更に繹ねんか。

八

香華、燈明、塗香、飲食は之れを人生に就いて稽ふるに、

一、香の一度火を點ぜらるゝや、何物をも焚き盡して憩まざるは……勇氣の德也。

二、華の美はしく愛らしきは……愛の德也。

三、燈明の光明にして克く透徹するは……智慧の德也。

四、塗香の清涼にして平靜なるは……正廉の德也。

五、飲食の飢渴の苦を除いて身心を安靜ならしむるは……福裕の德也。

勇氣と愛と智慧と正廉と福裕とは實に人生に缺くべからざる美德にして、一家の圓滿も一國の平和も世界の平穩も皆な此の美德の發現ならざるべからず。五德の一を缺けば其處には何等かの不平均、不調和ありて一家には風波の絕えざるべく、一國には騷亂を避くべからず。愛と智慧と正廉と福裕とあるも勇氣の缺けたる人は薄志弱行にして事を遂行する能はず。他の美德は具備するも愛の一德に缺ぐることあらば、彼は無慚無愧の人となりて世を損ひ人に害あり。若し智慧の德を缺かば假令ひ愛に富み勇氣に滿つるも畢に暗昧の人にして爲すことは悉て正鵠を誤るなり。正廉の德を缺けば彼れは諂詐奸惡の人にして畢に事を破る。勇氣あり愛あり正廉なり智慧あるも裕福にあらずんば彼れは貪弱の人なり。世に屈するか然らずんば世に背かざるべからず。斯くて其の一を失へば己に圓滿なる人にあらず。況んや其の二三を缺いで能く何をか爲さん。然れど恁かる美德も尙ほ「我」なる我見のために支配せらるゝとき、さしも高貴なる美德も其の無限の威力を發揮する能はずして、恰もかの「我」なる小天地に幽囚せられ、勇氣も愛も智慧も悉てが此の些細なる「我」をのみ保護するの要具となりて、たゞ「我」のための勇氣たり愛たるばかりにして、其の本來の勢力たる三世に亙り十方に徹する大威力を振ふ能はざるなり。されば普通佛敎にては「我」を捨てよと誨ゆ則ち無我の說之れなり。「我」を沒却するとき初めて我執の獄に繫がれたる眞の我は、かの幽閉から允されて自由となり。かの五の美德は狹隘なる

「我」のための德にあらずして宇宙を蔽ふところの德となる。則ち菩薩の六波羅密是れ也。されど密敎に在りては其れと異なりて、彼れ等の美德を佛に供養せよといふ。五種の供養は則ち其作法なり。勇氣を佛に供養し竟る、而して我勇氣は佛のものとなり、局限なる「我」を保つ爲めの勇氣にあらずして、「我」の外宇宙の那邊にても勇氣の用ゆべき所に用ひらる。愛を佛に献じ竟る而して我愛は偏狹なる我のために存するにあらずして、愛すべき所は那邊に往きても愛す。正廉も我個人の正廉にあらず、一家も一國も正廉なるべく、山川草木の分野も日月星晨の運行も、風雨霜雪も雷電も皆な正廉ならざるべからず。我正廉は是れ等の那邊に往くも能く其の德を成す。聖人世に出づれば天下泰平にして、日照し雨濕して四季順に環る。是れ聖人の正廉の德の迫ぼす影響なり。智慧も佛に献ずれば我一人の利の爲めに計ることなし。宇宙の邪惡と不平均とを照破して改善を企てざるべからず。富も佛に献じたれば私一人の有に非ず。佛の慈悲心に隨ふて用ひざるべからず。貧寒を拯ふは佛の慈悲心と相應す。故に拯はざるべからず。されど浪費するも佛の慈悲心に背けり。又た既に佛に献じたれば我の名の下にあるも私の有にあらざれば、貧しき人の爲めに怨まるゝ恐れあるなし、又た我の私有にあらざれば恪しきことなし。用ゆべき所に用ひて懼れなし。斯れを密敎の供養の德といふ。無我にあらずして大我なり。斯くて我等佛に勇氣を供養するとき金剛香菩薩として顯はれ、愛を供養するとき金剛華菩薩として顯はれ、智慧を供養するとき金剛燈菩薩として顯はれ、正廉を供養するとき金剛塗香菩薩として顯はれ、福裕を供養するとき嬉悅歌舞の菩薩として顯はる。而して我等が五種の供具を供するとき、さながら此の五德を供養するの意なることを忘るべからず。基督曰く「主のものは主に返せ」と。今五種の供具、五種の美德を供養する所以は、原是れ等のものは皆な大虛空庫菩薩の寶庫中より流出したる珍品なれば、再び是れ等の珍品を菩薩の寶庫に返し入れまつるなり。人類が常に持するとき往々にして腐朽す。虛空庫の中にあり常に新鮮なるを得べければなり。

佛身觀

一

佛陀が沙羅双樹の影に陰れられて以來、目前に佛陀の音容に接した弟子達は恐らく佛陀に對して後世の弟子達のやうに深き注意を拂はなかつたであらう。

或る弟子達は却つて平凡なる偉人とばかりに想ふてをつたものもあるかも知れぬ。此の點からは寧ろ異敎徒假令へば波羅門でも回敎徒でも儒生でも基督敎徒でも其人達の眼に映じた佛陀は佛在世の時の弟子達に映じたる佛陀よりも偉大な秀俊な人格であつたかも知れぬが、其れが漸次時を經代を替へて現實から隔つて往くに隨つて佛陀論は愈々旺に成つて又た佛敎成立時代の論說中に最も重要なる問題と成り來つて敎理に對する信仰の度合や信仰者の知識の程度に應じて佛陀といふ人格の內容が區々に成つて來たものであらう。であるから迥かに後世の學者に到つて佛陀を解する

に合理的方法を用ひて組織的に論ずるやうに成つた、其中にても最も普通に用ゐらるゝ處の三身の說の如きは多分諸種の信仰や論說の調和的統一から來てをるので寧ろ其初めは最も反對して氷炭相容れられざる異說として此方彼方に起つた說であつたのである。謂はゞ初めに無統一に唱へられてをつたものが迪か後世に學者の手に依つて統一せられたのであらうが又一面からは此の三身の說なごは自から後世の弟子達が佛陀に對する觀念の發達の階段ごも見るごが能きる。之れを要するに佛一代の敎に說く處の三身の說は何れにしても其の對像は釋尊で天竺出現の佛陀を解するに際つての說に過ぎぬのであるが、密敎の佛身觀は之れごは大に趣きを異にしてをる卽ち密敎の佛身ごは最初から天竺出現の釋尊には意ないのであるから根本の出立點が違ふてをるごは謂はねばならぬ。

二

顯敎に謂ふごころの三身の說が弟子達の其の大敎主を觀る觀念の發達の階段であつて而して其れが奈何やうにして纏つた統一せられたものごなつたかごいふごは、初めに聲聞乘の人は佛在世に於いて最も親しく佛陀に接して佛陀の音聲を聞き佛陀の容恣を睹佛陀の朝夕を知つてをつたごころの人達であるから彼等の目から見るごは佛陀は我等の爲めに四諦の法を說き五蘊十二處等の法を說き涅槃を勸め給へり、我等に說き給ふごころの法は佛自から覺り給へるごころ修し給へるごころにして佛は我等に敎へ給へる如く見思の二惑を斷じて終に無餘の涅槃に入るごを理想ごなし給へり我は佛の敎に隨ふて阿羅漢果を得たり佛も齊しく阿羅漢果を得給へる人なりごを想ふてをつたのである。佛陀は謂ふまでもなく淨飯王の王子に生れて國城を遁れ出で山林に入り六年の苦修練行を經て大解脫を得られて、今は三衣を纏ひ鐵鉢を捧げ一條の筇を曳いて村落に行乞し人天の大供養を受くる大阿羅漢であるよりは外に弟子達の眼に映ぜなんだ。而して己れたちも師ごも同じ生活を爲し同じ途を迪るものであるごを想ふて滿足したのである。然るに大乘の人が世に榮へた頃は佛在世の時を隔たるごも漸く遠く現實佛からも因はるゝごを尠くなつたゝめに以謂らく釋尊は彼れ聲聞の人の見る如き單なる阿羅漢ではない。凡そ佛道を修習するものに三種の別がある、一は聲聞にして二は緣覺である三は菩薩にて菩薩は特り大覺を成ずる人である。四諦の法を觀じ見思の二惑を斷じて涅槃に入る者は佛在世の多分の弟子達にして是れ聲聞の人である佛には迫ぶべくもなき劣等の修道者である。復た十二因緣を觀じて二惑を斷じ涅槃に入る者は緣覺乘の人にして是れ將た佛に比すべきもなき賤種の修道者である。然るに菩薩は六度の行を修して煩惱所知を斷じて終に佛ごなる人にして我師は其の佛である。外には賤卑なる沙門の相を爲し給ふごを雖も三十二相を具足し八十種好を圓滿せるは我師である我師を以て阿羅漢に擬するは擬する者の智能の短少なるに依るものごするのである。權大乘ではあるが佛を看るごは一進轉を爲してをる。

三

然るに大乘の敎義論は愈々進むに隨ふて權大乘の人の見解をも尙未だ慊らずごして以謂へらく我大師たる佛は權大乘家の見る如き現世に初めて煩惱を斷じ六度の行を圓滿して覺悟せられたの

ではない。實は五百塵轉劫の昔に於いて既に大作佛を成じ給へる報身佛は常に報土に在りて說法し給ふのである。天竺出現の釋尊は則ち久遠實成の佛が其の內祕を打ち明さんが爲めに假りに方便して或は沙門の相を爲して四諦十二因緣の法を說き或は應身佛の身を現じて六度萬行の法を說き彼等劣鈍なる根機を訓練して終に一佛乘に歸入せしめるのであるから、釋尊は阿羅漢でもなく應身でもなく報身が大祕密を開顯せんが爲めの準備として阿羅漢の如き影像を現じ應身の如き影像を現じたのであるから我等は其の影像を見ずして直ちに本地身を見ねばならぬ。影像を實と見るは誤りである迷ひの故である。此の實大乘の說は其の思想の進むに隨つて一面に他の種々の佛陀觀を統一して調和しつゝ其の思想の進むべき頂巔にまで進んだのであつた。

四

報身が佛身の中で最大の最高の最美の人格であるから佛身としては最極のものであるが併しながら尙ほ此の佛身も何れにか落居ねばならぬ。那邊かに行き先きが無けねばならぬが其の往くべき處は自ら明かで眞如海に入りて絕對の法界と合致せねば落付かぬのであるから此の報身の落居するところは卽ち法身佛である法身佛と成りては相もなく形もなく非人格的の絕對大に入るのが其の敎理と相俟つて自然の成行であつて、是れが釋尊觀の究極にして此處に到つて佛身論は畢りを告げ得たのである。是れを要するに、

一、初めは聲聞の弟子達は己れと同樣に四諦の法を觀じて見思の二惑を斷じた大阿羅漢なりと思ふてをつた。

二、次に權大乘の菩薩は亦た己れと同樣に六度の行を修して煩惱所知の二障を斷じ三十二相を具し八十種好を圓滿する大覺者と想ふてをつた……卽ち應身觀である。

三、其れが實大乘の菩薩に到つては尙ほ三十二相の相好圓滿なる今成の佛陀と見ることに滿足が克きずして久遠劫の過去已成の佛身が現顯であると見るに到つた……卽ち報身觀である。

四、然るに一方に眞如觀實相觀の哲學的思索の發達に追從して眞如絕對と包合するところの思想にまで進まねばならぬ……卽ち法身觀である。

是れ等の法身報身應身の觀念は次第して敎理觀と信仰心の進むに隨ふて進んだのであるから其の間には聯絡あつて統一した組織的の發達ではなかつたであらうが併しながら是れを統一して組織あるものとして調和することは敢て困難ではなかつた而して是れを成し遂げ得たものは天台宗なのであらう。

五

三身の說は統一せられ調和せられたが然も此れ等の論は那邊迄往つても天竺出現の釋尊が中心で釋尊とは、奈何なるものであるかと云ふことの問題を解釋せんと試みるに當つての三身論である。是れが根本に於いて密敎の佛身觀と性質を異にするところであつて隨つて同じく三身を區別するにしても其の相互の佛身の關係が又た二敎とも同樣ではないが其れ等の問題は何れにしても重要

なものではない。三身相互の關係に到つては寧ろ同一の系脈を有つてをるやうで其の根蔕は一整であるから强ひて兩者の相違點を算ふることは誤りであるかも知れん。

然しながら佛身觀の根本出立點は明かにすることに於いて充分なる價値があると想ふ。

六

密教の佛身觀は最初から釋尊には何等の關係もない而して其の根本を謂へば印度に於いても釋尊已前に既に在つたところのものと似てをるので、此の點が密教の特色である。祕密の佛身觀は其の出處は凡夫であるところの金剛薩埵の見佛が根本である。

近代に著りに聞くところの見神なるものは其の見たといふところのものを聞くに何とも謂へぬ光明であつたとか言語に絶したところの不思議の物像であつたとかいふのでさらに取り立てゝいふことは能きぬが金剛薩埵の觀たといふ佛には一々に名もあり形相もあり其れが其の各々の佛身が夫れ〴〵に大活躍を爲してをるので一々の佛が其れ〴〵に眞理を說法しつゝある起居の動作も各々に異つて其の表情も其れ〴〵に趣きを異にしてをる。復た佛と佛との間にも種々の關係があつて相往來してをる。其の狀態を親り宛然らに觀たのである。近代の見神家の謂ふことが實なりとすれば其れは顯教にいふと同じやうな法身の一部を見たとでも云ふべきか。明遍上人の見たといふ奥の院の橋より裡に充滿してをつた佛菩薩は金剛薩埵の見る佛菩薩の一部分を見たのであらう。併しながら金剛薩埵の觀る佛菩薩とは到る處に見るので處に限り時に限つて觀るのではない。龍猛菩薩が金剛薩埵に指示せられて見ることを得たところの佛菩薩といふのも依然り是れであつたから密教にいふところの佛陀は釋尊とは何等の關係もないのである。

七

目を擧げて見れば野の草も林の樹葉も道の礫も逝く水も鳴く鳥も咲く花も意なき眼より見れば單の物像に過ぎぬのであるが、一たび濶らけたる祕密眼よりすれば地上と天外とにある個々の事物は各々活きたる人格を有つて華は華の眞理を說法し水は水の眞理を說法し鳥も草木も皆な各々に說法しつゝ各々の物像は裏に動ける情意を色に形に顯はして雨に喜び風に悲しむ情の移ることも誤らぬのである。耶蘇の徒は是れを認めて神の榮えとするのであるが金剛薩埵の眼には花自からの榮え水自からの榮え礫自からの榮えを認めて個々の物に其れ〴〵に活きた人、神、佛を觀るのである。目に睹る物像のみならず耳に聞く音樂の聲にも松風の音にも蟲の聲にも齊しく眞理の說法の聞き裏に動く喜怒の情意を聞き神の榮えならぬ聲音其のものゝ榮えを聞くのである。鼻を衝く香りにも淨き香ひ穢れたる香薫の嗅り皆な何れも鼻に入りては眞理の說法の香りは同じである。

皆な其れ〴〵に活きたる人格が動いて身口意の三密は殘りなく働いてをる。身に觸れる剛柔温煖の觸感も亦た齊しく眞理を說法して哀樂種々の情意を形に顯して活きたる身口意は此處にも動いてをる。動かぬ意味なきものが那邊に在るであらうか。獨り五官に觸るゝものばかりでない意の中に動く種々の意思や情緒として中に動くところの貪瞋の情、見惑八十八使、思惑八十一品の煩惱三十七

品の善根、六度十波羅密の善根一つ〳〵に眞理を說法し、情意に隨ふて種々の形に顯はれて個々に活きた人格を認めるのである。大は日月の如きより細少なるものに到つては毛髮の端に到るまで或は强き悲しみの情弱き悲しみの情より、愛、慾、慢、貪の情に至るまで或は一錢一粒の施より三界化益の大利生まで所有善根が皆な人格を有つて身業、口業、意業の其れ〴〵の業を成して佛の勝業を爲して居るのである。

八

金剛薩埵と名くる凡人が親り見たといふ佛は他の那邊にあるか宇宙の事像に對して見聞き嗅ぎ觸れ味ひ想ふ限りのものは細々してをるけれども其の細々してをる事像が一々に人格を有つて三世常恒に說法してをる其の佛身を見たのである龍猛菩薩が見たといふ佛身の對像も皆な此の宇宙の事像をいふのである是れを佛と名け菩薩と名け鬼神と名け人と名けるのであるが要するに名の異りで何にも彼もが單だ佛である。釋尊も謂ふまでもなく三身圓滿の佛であるが釋尊獨りでない釋尊の尊貴を語るときは同時に同意味で我れ〴〵は謂ふまでもなく所有ものを佛と名けねばならぬ。恁かる祕密眼の前に立つては釋尊とても獨り尊嚴を保つことは能きぬが釋尊の其の威信を失ふたのではない他の總てのものが釋尊の威信を同時に得たのである。一佛道を成ずれば億兆一時道を成ずるとは是れである一金剛薩埵の祕密眼の開發は同時に一切衆生の祕密眼の開發である。

九

釋尊を中心にした佛身論と密敎の見る佛身觀とは恁く著るしく其の出立を同ふしてをらぬ。相違點はたゞ是れにして其の以上に三身を區別して尊劣を說き本迹を分つのは迥かに後のことで何れかといへば後學の爲めの便利の爲めである、其れ以上には大した價値を認めることは能きぬ。然るに恁くも無限なる雜然たる金剛薩埵の見た佛身は何等統一がないのであるか、統一は自然に此の間に起つてをらねばならぬ雜然たる中に整然としたところがあらねばならぬ。

方位をいへば四方となり色をいへば五色となり音をいへば五音八音となり形は方圓三角半月團形となり根本の色、形、其の他のものが自然に定つて來るのであるから無數の佛身の中にも必ず統一したところが成きて來ねばぬならぬ則ち曼荼羅の四方四隅等となるのである、而して其の働きに依りても亦た親疎なごが成きて來るのであるから四方四佛の區別と成り而して三身四身等の區別ともなるのであるが最早や其處に到つては二敎の區別なごする必要がなくなるかも知れぬ。單だ飽までも相違する處は釋尊を中心とする佛身觀は遂に釋尊に終らねばならぬが、祕密の佛身を見る目には常に宇宙より出て宇宙の大意匠に合致せねばならぬ。祕密の佛身觀は是の上は哲學的思索と合致して往かねばならぬ。

法華經と觀智儀軌

序說

略して常に觀智の儀軌と稱ばるゝものは成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經にして不空三藏の翻譯せられたる一卷の經典なり。之れを祕密の法華經とし顯教の妙法蓮華經とは離るべからざる因緣を成せり。顯の法華經が其構想に於て頗る祕密教の色彩に富みたる爲めに祕密教の待遇を受く。大日經疏の第七卷に曰く釋迦如來のごとき出世して四十餘年にして舍利弗等の慇懃なる三請に因りて、爲めに略して妙法蓮華の義を說けり。今此の本地の身も又是れ妙法蓮華の最深祕處なりと釋せらる。法華經を淺略にして大日經は其の最深祕なれば淺深を異にするも二經は畢に同じ處に往くべきなり。然れども顯の法華が祕密教と立ち並ぶには今一段祕密教の裝ひを凝さゞるべからず。法華の得たる妙法は祕密の得たる妙法と强いて尊卑を觀るの要なかるべきも、法華は顯教の流義に隨ふて畢に理觀に止まりて祕密の事顯を缺ぎたれば內容は祕密に達するも尙ほ顯の領域を脫する能はず。顯と密との中有に懸りて而も顯教たる事に定められたり。觀智の儀軌は法華經に祕密の裝ひを作る爲めに出て來りたるものにして法華經の衣と見るべきものなり。法華經なくんば此の儀軌に要はなく此の儀軌なくんば法華教は祕密教とは成り得ざりしなり。服する人物なくして衣は要なかるべく衣なくんば粧はれたる人物にはあらざるべきなり。

隨つて法華經と此の儀軌とは同一のものにはあらずして衣と人との關係なり。然れども今は先づ二經に對する古人の批評より聽かんか。

二經に對する古人の說

古來此の二經に對しては種々の說あるが如くなるも一般に承け繼がれたる說に依りて異に觀智の儀軌の立場より窺はんに、

第一、二經は同本異譯なりとせらる。文に廣略の相違あるも齊しく二十八品ありて其の義趣は同一なり。

觀智の儀軌に於て五相三密の行相あるも法華になきは譯者羅什三藏が顯の人なる故に之れを除きたるなりと、然れども此の說の不充分なることは儀軌を見るものゝ直ちに首肯せらるべき處なり。儀軌に於て二十八品の名稱を連ぬるは一々の品に歸敬する意にして能所歸處を異にせり。例令へば儀軌の品々とは、

歸命緣起初序品、光中能顯因果事、福德智慧至究竟、一乘實相勝義門、歸命善巧方便品甚深難測如來智、言語道斷離心境、是故方便說三乘、

是等の文を以て直ちに法華の品々と同本なりと擬するこを得ざるべし。隨つて、

第二、二經は別本別譯の經なりとせらる。顯の法華は舍利弗等の爲めに說いて阿難之れを結集し、祕

密の法華は金剛手等の爲めに說いて金剛手之を結集せりと、然るに別本別譯と云ふ意も又た明確を缺けるが如し既に別本とすれば二經の間に何等の關係を存せざるか、更らに次項に至りて其の答は明かなるべし。

第三、能說の佛身を言へば顯の法華は生身の說にして、密の法華は反化法身の說なり。而も同時に同處に於いて說くとき、密機の者は密の法華を聽き顯機の者は顯の法華を聽くと、此の說に依れば二經は相並立したるものにして顯の法華は顯の法華にて足り密の法華は密の法華にて足り二經の相關涉するところなきなり衣と人との關係に非ずして甲の人と乙の人との關係なり。

第四、隨つて二經の行者の觀る處も異なるべきなり。顯の法華に依つて修行するものは直ちに如來の神祕を得て一心に達するものと想へる時き、密の法華に依つて修行するものは觀音の內證三昧に適ふものなりとし、進んでは顯の法華に依るものを觀音の內證三昧に入るものと解せらる。

斯くて二經は那邊までも並行するものにして機見の不同なるものが畢に此の二經となりたりとせらる。

由來顯密の二邊に亘る諸經、例令へば般若心經、仁王經の如きものを取扱ふに當りては常に斯かる見地よりして二敎を相並行せるものと解せんとするは古來の學者の常にして歷史と事實とを超越せんと試みらる。素より歷史と事實に拘泥して些細なる研究に惶はしうして大事を逸するは最も悲しむべき事柄にして近世の研究なるものが多く其の幣竇に陷れるを惜むものなるも、然しながら斯く事もなけに顯密二敎を無關涉ならしむるも到れりとは爲し難く想はる。只だ機見の不同と言ふに堂りては多少の意義なきに非ざるも之れとても今は重用なる事件とも覺へず。今少しく二經の大體を見んか。

顯の法華經

二經が云何なる點に於て相關涉するか。而して密の法華經が何故に起り來りたるかを見るまでに少しく顯の法華經に就て見ざるべからず。法華八卷二十四品は要するに如來の祕奧なる眞實の妙法を授くる時の前後の光景にして、妙法は依然として離心念境、離言說相の一心なり。然るにかの法華經の前後の光景を取り刷ふて靜かに觀止すれば信念を離れ言說を離れたる一心の妙法は彷彿として法華會場の光景より浮び出るこは恰も秋昊の意は氣澄み風冷やかにして天日の光り弱く樹の葉紅に染まりて鳥の空に急ぐ光景の裡に捉ふること克はざりし秋の意はあり〳〵として浮び出づる如くなり。初め十四品の迹門は如來成道して後の化益にして九界の衆生三乘の人は皆な一佛乘に引入せられたる光景なり。然るに此の佛の化益も又た眞實の開示に非ずして權方便たりしなり。次で本門の十四品に入りては如來久遠實成の相を現じて地より東より西より天空より雲集せる無量の諸佛菩薩は齊しく久遠實成の佛菩薩たり。法華の會座に連なれる雜類の衆生も皆な久遠實成の衆生となりて十界は皆な同一實相の蓮華に住するこを得たり。而して十界の衆生が法華本門の會坐に於いて齊しく實相の蓮華に住するこを得たるは妙法に依るなり。

妙法を譬へて蓮華と云ふ。妙法を又た一心と呼ぶ。

此の一心を得給へる如來は法華の時代に入りて三乘の淺にして欣ぶべからざることを敎へ、大阿羅漢と未來の弟子達と惡人女人等に到る迄に記莂を與へて一佛乘に歸入せしめたる迹門の化益と本門の種々の妙不思議事とを成せり。本迹二門は俱に一心の妙不思議力に依るなり。

日蓮上人は此の一心に心づけり。上人は法華經の肺腑に出入して此の一心を實現することを以て其の一生を貫かれたる人なり。上人の猛烈なる拆伏門は信解品藥草品等に顯はれたる一心の破邪的の活躍なり。上人の主張は此の一心を手にして之れ觀よ之れ捉へよの指示なり。上人の題目は其手にせる一心の功德を衆生に手渡さんとするなり。一心を觀ずとも一心の功德を頒ち與へんの意なり。上人の遭難は囑累品等の如來の豫言に應へんとにはあらざるべく、一心が災厄に遭ひ困難に當るも更らに破られざるとを示すものは普門品等にして、普門品等に顯はれたる一心の除災の德の實例に立たんために上人の得たる一心の用意なるべきか。法華經其のまゝの行者にして一心を人生に實現し一心を有りのまゝに振舞ひたるものは恐らく三國を通じて獨り日蓮上人を推さゞるべからざるか。

併しながら上人は法華經の一心に凝り過ぎたるべし。上人は久遠實成の佛に達し又た達しさせんとにのみ急けり。上人は法華の會坐に於ける諸佛菩薩乃至衆生が久遠實成の佛なりしを見て、其の久遠實成の佛が何故に十界の迷衆として殘れるかを問ふとを忘れたるなり。祕密敎の人も法華本門の會坐に於ける時と同じく一切せるにあらざるかを問ふとを忘れたるなり。祕密敎の人も法華本門の會坐に於ける時と同じく一切の迷人が宛然らにして久遠實成の佛なることを知れるは決して法華の行者に遲れざるなり。我等は久遠實成の佛ならば最早や久遠實成の佛として顯はるゝことを急がざるなり。而して問題は直ちに次の項目に移らざるべからざるなり。則ち齊しく久遠實成の佛ならば何故に我等は迷人として殘りたるか。我等は久遠實成の佛なりしことに驚きたると同時に久遠實成の佛が何故に九界の迷徒として娑婆に殘されたるかと云ふとに至りては更らに大なる愕きに撲たれざるべからず。茲に於て祕密敎に入りて祕密の佛陀に開示を乞ふ時此の九界の迷徒として殘ることは阿字一心界の豫ての目的なることを聞いて直ちに滿足することを得たるなり。阿字界に入るものは斯くて久遠實成の佛たらんことを急がずして、寧ろ阿字界の目的なるべき迷界の事象に於いて大なる價値を認め久遠實成の佛たると同じほどに九界の迷徒に於いて興味を感ずるなり。斯くて九界十界に自由を得て阿字界の無限の價値を發揮することを以て祕密行者の遊戯三昧とし阿字其のまゝの理想を實現せんとする爲めに久遠實成の佛たることに於いて焦燥らざるなり。祕密の行者にありては法身佛の三昧に入りて久遠實成の佛と成ることを知ることに文殊菩薩の三昧に入り不動明王の三昧に入り大黑天毘沙門天の三昧に入り八部衆の三昧に入り取りたてゝ一の三昧に入らんとはせざるなり。而して何れの三昧に入るも價値を見ることと異なることろなければ自ら一門卽普門の法相は成るなり。惜い哉日蓮上人は法華經の一心に入ることを急ぎたる爲めに畢に法華の行者にて終れり。

傳敎大師は本來ならば法華の行者にて終ることと日蓮上人の如くなるべき理なりき。而るに大師は

上人と同じく久遠實成の佛たることを得たるなれば、今は其の途に只管ら急ぐにも及ばざるべきを知れり。一筋に法華に入らずして禪に往き淨土に往き戒律に往きたることは既に大師の胸臆に於て非常なる餘裕の存することを豫示せり、而して終に祕密に入りて只管らに之を渴仰するに到りたるは、道がに大師の偉大なる處ならざるべきか。大師は斯くて法華經の行者にては終らざりき。隨つて大師の痕迹は日蓮上人と同じからざるものありて圓滿なりき。大師の祕密に往きたるを見て嗤ふも終に笑ふものゝ嗤はれたるものに迫ばざるを奈何んせん。

祕密教の呑流

久遠實成の佛も今は珍らしくはなく成りたり。久遠實成に往くと異ならざる樂みを以て諸佛菩薩天人八部衆乃至草木瓦石に入らざる可らず。之れを總じて見る時胎藏部に於ては佛部金剛部蓮華部の三部に頒たる。金剛界にありては更に寶部と羯磨部との二部を加へて五部とせらる。三部各々に無數の尊あり五部各々に無量の尊あり。己がじゝ往かんと欲ふ尊に往きて或は慈悲を内證とする蓮華部に往くものあり、智惠を内證とする金剛部の尊に往くものあり、或は大定を内證とする佛部に行くものあり、或は辨財天に往き、或は陁枳尼天に往き而して甲より乙に乙より丙に丁に出入自在にして往來無窮なり。斯くて一尊に一儀軌あり、各々の尊に各々の儀軌あれば儀軌は阿字界の差別相の個々の數量を盡して一々に儀軌なかるべからず。兩部の大經は無量無邊にして法界に剩れる卷軸を成さゞるべからず。金界には之れを攝して五部と爲し胎藏には之れを攝して三部と爲せり。前に普賢菩薩ありて普賢菩薩の儀軌あり。焔魔法王ありて焔魔法王の法あり。

仁王經ありて仁王經の法あり。孔雀經ありて孔雀經の儀軌あり。其れ等の儀軌と同じく茲に法華經一心の法あり顯教ながらに一心の儀軌は祕密に於いて無かるべからず。此の意味に於いて祕密の法華乃ち觀智儀軌はあるなり。顯の法華と密の法華は廣略の不同なる同本別譯の經に非ず。法華一心の法ありて觀智の儀軌はあるなり。成經の本末を謂へば法華經は本にして其の儀軌は末ならざるべからず。又た二經を以て別本別譯なりとするは語に於いて稍穩當なるが如きも其の内容に至りては首肯する能はず。二經は機見の不同にして相關渉するところなしとせんに、祕密の人は祕密の行規に縛られて顯の法華三昧に入る機會を失はん。斯くて祕密の人は日蓮上人と同じく何に物に依りても自性會場にのみ急ぐものとなりて一々の差別界其のまゝの興味に同情して往くの價値を損はんとするか。祕密の法華に依るも一心に入り顯の法華に依るも一心に入りて齊しき效果を擧ぐるとに滿足してこそ祕密的の價値あるものにあらざるか。只だ密の法華を俟たずして一心に入る法華行者日蓮上人の如きあり。密の法華を俟ちて一心に入る眞言行者あり。之れを機見の不同と云ふことに於いてのみ機見の不同と云ふとに意義あるなり。之れを要するに密の法華は顯の法華に入るに際して密教流義の徑路を取らんとするものにして、且つ此の法に依ることの顯の直進的方法に勝るものあることは此の儀軌の價値ならざるべからず。之れを觀智の儀軌に就いて見んか。

密の法華經

密の法華經は縮冊藏經の祕密部閏七に收むる所ろに依れば僅かに六紙半に餘るものなり。初めに歸敬序に於いて先づ法華教主に歸敬するに二頌あり。次に法華二十八品の品々に對し歸敬するに二十八頌あり。次に前方便を說いて法華の一心を知見するには四緣を具せざるべからざることを示し眞言道に依りて妙法蓮華經を得んとすれば先づ大悲胎藏曼荼羅に入らざるべからずと云ふ。

大悲胎藏曼荼羅とは何ぞや、本門に入るの初め地より涌き出でたる無量の菩薩にして本門演說の會座に於ける不思議の背景にして又た本門演說の眞趣意を描ける眞態なり。法華經に入らんとするものは先づ其の光景に接するは眞言行者の要心なり。茲に於いて曼荼羅に入らざるべからざるなり。次に護身、結界、迎請、供養し己身金剛薩埵の觀に住し斯くて前作法を畢る。

次で地を擇び、壇を造り上に曼荼羅を繪く、其の曼荼羅は中央に宰覩波を置き塔の中に釋迦如來と多寶如來と同座して坐し四隅八方に法華會場の八大菩薩を始め天龍八部衆等を繪いて供養物を備へ加持作法等常に準ぜり。斯くて本門從地涌出品の曼荼羅を成せり。次に如來壽命無量の眞言を誦して壽量品に應じて如來の壽量を成ぜんが爲めに、塗香を塗りて懈怠を去り、法界生の印言を成して一法界心に住し、金剛薩埵の印言を成して大菩薩身を得、金剛甲冑の印言を成して壽量に障碍なからしめ、大慈の印言を成して一切衆生として俱に壽量長遠ならしめ、不動尊の印言を成して一切の惡魔を艾除し、寶山の印言を成して常住靈鷲山、宣說妙法華の旨趣に隨ひ如來の壽量は此時成就されたるなり。如來の壽量を成就する時本門最第一の功德を圓滿するなり。次に三重曼荼羅を觀じ、次に眞如法性の道場觀に入り、次に一切如來聖者を奉請し、次に閼伽を供養し、次に華座の印言を爲して隨喜功德品以下の經品に應じ、次に普印を成して藥王菩薩を起し、勇猛菩薩、毘沙門天、持國天、十羅刹女の眞言を誦じて、陀羅尼品以下の經品に應ぜり。次に理供養の印言を成し、實相三摩地觀に入りて終に金剛杵の普賢大菩薩身と成り五佛冠天衣瓔珞自ら莊嚴して我と無二無別の觀に入り、普賢勸發品の意に相應して淨法身を成ず。次いで解界等ありて囑類品に應ずるなり。之れを祕密法華の大體なりとす。

斯くて顯の法華行者が無手にして登らんとする本門の妙境に對し、眞言行者は一座の修念に於て法華二十八品の妙境に出入往來し、法華三昧に趣入せんとするなり。顯と密との法華は同じく一心の妙境にして到るべき行規に巧劣あり。然れども顯の法華に依らざれば密の法華なきことを止むを得ざるところなり。

結論

二經の內證は共に一心なり之れを標章するものは蓮華なり。然るに密の法華は法の根源に於て人格を認め尊形を實現するにあれば一心は變じて蓮華と成り蓮華は變じて普賢大菩薩と成る。密の法華は乃ち普賢大菩薩の內證三昧にして一心は其のまゝに普賢菩薩なり。顯の法華行者は法の根蔕に於て人格を認めることなければ法華經の內證たる一心を以て無相空寂の法身なりとせらる、之れ何ぞ格らざるの甚しき。妄執の深き一に此處に至るか、一心の本體發露して靈鷲山頭に法華の會座を構えらる時法界は宛然らに一心法界なりき。一心法界々に於てこそ久遠實成の釋迦如來あり盧舍那佛

あり天より地より十方界より久遠實成の諸佛菩薩八部衆の雲集するありて一心の實相を法界に展列して示したるに非ずや。法華一會の大衆に一心法界の意義なくんば天來の聖衆は魔術の作爲なりしか。不思議の如來神力は意味なき神力なりしか。斯かる妄見を以つて畢に一心の尊體は見現はさるべきに非ず。高祖は斯かることに躊躇し給はざりき。法華經の密號を解して曰く、法華經に正法妙法の名號あり、新譯と舊譯の相違なり。觀自在に亦た正法妙法兩種の名あり。是の故に法華經の體は卽ち是れ觀自在なり。この以へに又た普門品の中に唯し觀音の名を勸めて法華の理を顯はさず此れは是れ觀音の德を指す卽ち是れ法華の理なる故なりと。是れを以つて見れば法華の一心は觀自在菩薩の全身なり。同じく法華開題に曰く金剛頂經に據らば人を舉ぐれば妙法蓮華と名くるは乃ち觀自在王如來の密號なりと、又た祕鍵には一道の妙蓮を以つて觀自在菩薩の密號と說き給へり。高祖の見ることろに依れば普門品に顯はれたる觀世音の功德は則ち一心蓮華の功德にして法華妙法とは觀世音の密號なり。されば顯の法華經に於いては既に種三尊の三祕密身を圓備せること、密の三祕密身に異ならず。

顯の法華　種子＝一心、三摩耶形＝蓮華、尊形＝觀世音。

密の法華　種子＝一心＝𑖭、三摩耶形＝蓮華、尊形＝普賢菩薩。

二經の尊形に於て普賢と觀音と異なるは之れ經軌の常にして別に深意の存するところなり。要するに儀軌は經の一心を得るに五相三密の行規に隨ひ一念に於て法華の三密に契達せんとするものにして寔に法華に缺ぐべからざる修行の規則なり。別本にあらずして儀軌は經に附屬せるものなり。異本にあらずして一連のものなり。

之れを譬ふれば顯の法華はノベルなり小說なり。伸べ書きにして其の前後の光景が統一するところに於いて想の中心點を浮映せしめんとするなり。之れを顯敎の常とす。密の法華はドラマなり脚本なり。舞臺面に道具立を使ひ着付を被て事件の光景や進行や而して中に複雜したる情緖と理性とを科白の間に組み合せて想の中心を一層明白に一層有效に描き出すものなり。二者の效果の勝劣自から明かなり。而して法華經は馬琴の八犬傳の如く、儀軌は脚本家が八犬傳に依りて仕組みたる八犬傳の脚本の如きか。

二經の成立に就ては一を生身の說とし一を反化法身の說とし同處同會の說とするは從來密敎學者の主張なるが、斯かる說は之れを主張するに非常に不利益なる說にして而も多くの效果あるを知らざるなり。祕密敎の祖師法華經によりて此の儀軌を得たりとするに多くの不都合あるべきか。

斯かる重用なる問題に對し匆々に筆を下し多く古說に依らざるの罪は正に罰に當るべし。且つ障へらるゝ事ありて文意を爲すに到らざるを深く惜む。其の誤りたる點に到りては後日之れを訂すことを忘らざるなり。

卽身成佛

一、卽身成佛の字解

常に奇拔なことをいふ人がある。一時も舍利禮の講義を爲て聞かせやうといふので聞いて見ると成程奇拔である。

「一心は頂禮じや、萬德は圓滿じや、釋迦は如來じや、本地は法身じや、是れで能く解る。滑稽なうちに面白いところがある。其れほどに手際善くはないが卽身成佛の四字を解するにも昔からの習ひで面白いのがある。

一、卽の身に成佛す……道範阿闍梨の說にして當體成佛の義なりといふ。

二、身に卽して佛と成る……尙祚阿闍梨の說なりといふ。

三、卽の身に佛に成る……速疾の義に依りて讀みたりといふ。

四、身に卽して佛に成る……無碍不離涉入の義に依りて讀みたりと、此の三四は仁然僧都等の訓點である。

五、卽身に成佛す。

此の他に三大に讀み分けて見る觀方もある。

六、卽ち身(ミ)成れる佛……卽は當體卽にして體大の讀方とせられてをる。

七、身に卽して佛と成る……卽は不離卽にして四曼相卽の讀方として相大とせられてをる。

八、卽(スミヤカ)に身(ミ)佛と成る……卽は速疾の卽にして三密用大の讀方とせられてをる。

何れも古代の訓點であるから當代に於ては別に怪しまれもせずして世に行はれた讀方であつたのであらう。

卽身成佛は卽身成佛で外に讀方はない。例令へば今日といふ字面を解剖して讀み違へて見れば違ふた意味が出て來ぬではないが、違ふた意味が出て來るよりも出て來ぬ今日の方が具體的にして圓滿なる意味を爲すが如くである。種々の訓話を試みることは全く無用にして卽身成佛の四字が其まゝに置いて完全なる意味を成すのである。此の字から來る直覺的の概念が充分なる解釋であつて其の外に讀方はない、なくて善い、ない方が善いのである。若し此れを字面のまゝに解せねばならぬとなると寧ろ此れは一の文章を成すのである。

卽身……我は、

成佛……佛也、

卽身成佛とは之を文章と見れば「我は佛也」と成るのである。我は佛なり則ち卽身成佛の意味を成す文章である。

二、我と佛

我は佛也といふ文章に於て我と佛との取扱ひ方で卽身成佛は三種の異なつた意味を成すのであ

る。

第一、我は凡夫なり……凡夫も五大五智、
　佛は大日如來なり……佛も五大五智、

凡夫は卽ち大日如來にして不二である。我(凡夫)は則ち佛(大日如來)である。生佛相對して生界に佛界の德あり佛界に生界の德あり、互具輪圓を成すところ、生佛不二因果不二の義を表現するのであるから之れを理具の成佛といふべきである。

第二、我は阿字……阿字は五大五智無限の差別相を本具せるもの、
　佛は大日如來……如來の德は無盡にして阿字界の無限の差別相は皆な如來の功德を成すもの、

茲には凡夫が無い。凡夫は阿字無限の差別界の中の一事象であるから、又た如來の德の顯現として別に凡夫なる階級はないのである。如來の宏大なる德は阿字界の無限の差別相として發露するものなれば之れを呼んで卽身成佛と云ふ。恁かる卽身成佛は顯得の成佛とすべきである。

第三、我は凡夫……凡夫は三密の大用を具せるもの、
　佛は阿字……阿字を佛と呼ぶ、阿字界は三密の妙用を成して常に活躍せるもの、

茲には又た佛がない。阿字界の三密に生活せるものを佛と呼ぶ。凡夫の三業は阿字界の三密に生活せるものなることを表顯してをる。凡夫が阿字界の三密に生活するものなれば之れを卽身成佛といふ。

阿字界の三密に意匠されたる凡夫が阿字界の三密に生活するのであるから加持の成佛といふべきである。

卽身……我は……凡夫は
成佛……佛也……大日如來也　生佛不二……理具成佛

卽身……我は……阿字は
成佛……佛也……大日如來也　法界は佛德の顯現とす……顯得成佛

卽身……我は……凡夫は
成佛……佛也……阿字也　衆生界は阿字界に生活す……加持成佛

三、我は佛也と云ふ命題

我は佛也といふ時、我と佛とは全く同じものになる。之れを他の命題と比較すると、

一、花は紅る也といふ時、

花は赤き花、白き花、黃なる花の種々がある。紅るにも花ならざる紅るの玉、紅の木、菓、紅の絹の種々がある、紅ると花との一致したるは櫻の花に限ぎらるゝものである。之れを圖にすれば、

花と紅るとは一つでない二つの者が或る一點に於て關係を持てをるばかりである。

二、人は生物なりといふ時、

人は凡て生物であるが生物は凡て人ではない。動物植物の種々が生物の中にあつて人も生物の中の一つである。

之れを圖にすれば、

生物の中に動植物の凡てが入つて來るが人は其の一部分である。

三、我は佛也といふ時は前の二種とは全く異ふてをる。

我といふことゝ佛といふことゝは全く一つである。

我といふことは則ち佛である、

佛といふことは則ち我である、

輪を二つにすることは能きぬ二つの輪を同時に同處に描かねばならぬ。

我が凡夫であらうと阿字であらうと、

佛が大日如來であらうと阿字であらうと、

何れの場合も同じことである。

四、阿字と卽身成佛

卽身成佛は阿字界の事實である。

阿字界に無限の差別相がある。山川草木禽獸虫魚人天鬼日月星辰風雨雪霜金石砂玉、

其れ〳〵に無限の同類があつて皆な阿字界に於て豫て意匠せられたるものゝ發現である。

又た阿字界に二種の變化がある。

阿字界の個々の事象は理(力)である、理が標象的形體(日月星辰山川草木人畜等の)を成す、此の形體は其れ〴〵に人格を持つて居る、人格が理と成りて種子に變化し、種子が標象的の個物と成りて三摩耶形に變化し、三摩耶形が人格を取りて尊形を成し、尊形が三摩耶形に變化し、三耶摩形が種子に變化し種子と三摩耶形尊形の間の變化は常に誤るところがない。之れを種三尊の緣起といふのである。種三尊の緣起は阿字界の小變化である。

之れに對して阿字界に於て又た大變化がある。木が竹に成る、人が石に成る、水が虫に成る、土が金に成る、虫が火になる、一つのものが何にでも變化する。何に變化の能きぬといふものはない。

又は阿字界に於て自存性がある。

個々の事象は小變化を成し大變化を成して限ぎらるゝところはないが、變化ばかりすることが妙でない。變化する世界にありて可成變化せぬやう、變化すまい〳〵と勗めて自己を保存することを願ふ、石は木に成りたくない水は火になりたくない、金は鳥に成りたくない、人は佛にすら成りたくない。

阿字界は無限の差別相を成してをる。

阿字界は小變化と大變化と無限に變化する。

阿字界の無限の個體は自存性を持つてをる。

之れが阿字の實相である。阿字界の此の實相を卽身成佛と呼ぶのである。

五、時と階級

阿字界に生活するものに時と階級はない。一生に成佛するとか二生に成佛するとかいふことはない。たゞ阿字界に生活する限りのものを卽身成佛と呼ぶのである。而して阿字界に生活せぬものはないのであるから卽身成佛でないものは一つもない。經疏の中には一生に成佛するとか、此の身を捨てずして成佛するとか、父母所生の身に神境通を逮得するとかいふことがあつて、一生二生の成佛を豫想してをるやうである。隨つて凡位と佛位との階級を立てゝ機根に利鈍を見るのであるが、

皆な之れは密號名字である。或は顯教等の說に習ふて見るのである。阿字界に生活するものは昔からの卽身成佛であるから一生二生もない凡位も佛位もない。利根も鈍根もない。皆な阿字界に於て豫て意匠せられたるまゝに生活してをるのである。阿字界の意匠のまゝに生活してをるものであるから我は佛也といふのである。之れを卽身成佛といふのである。

六、阿字と三大

阿字と六大は開合の不同といふことは昔からの口癖であるが、惡い口癖である。阿字と三大は開合の不同と云へば餘程調ふてくる。之れは疏家が主として阿字を說き高祖が主として三大を說かるゝ爲めに兩祖を對峙して二つ並べて見やうとするものであるから、開合の不同とも見ねばならぬやうに成る。然しながら卽身成佛と阿字との關係は卽身成佛と三大との關係と同一ではない。隨つて同じく卽身成佛に關係して出て來るものではあるが阿字と三大とは單に開合の不同といふだけの關係で濟ませることは能きぬ。

阿字界に生活する事實を卽身成佛といふ。

阿字界の內容を開示するものを三大といふ。

三大を以て阿字の內容を開示し、而して三大が卽身成佛の內容と成るのである。阿字は其の實相は純淨透明にして之れを捉ふることは困難である。高祖は阿字の體を捉らへんとして六色を以て映寫するとき、阿字は六大體を現じて遺憾なく阿字の本體を出現したのである。

六大の色を以て阿字の體を映寫して之れを捉へ得たるは高祖の效であるが、高祖の創見ではなくして經疏の中に自ら其ヒントを得られたのである。又は高祖は阿字の相貌を捉へんとして四色を以て映寫するとき、

阿字の相形を四種の曼荼羅に出現したのである。四曼の色を以て透徹なる阿字の相貌を映出したのは高祖の效であるが、高祖の獨創ではない。經疏の中に自から其のヒントを得られたのである。又た高祖は阿字の活動する有樣を捉らへんとして三色を以て映寫するとき、

阿字の用は三密の形式を出現したのである。三密の色を以て透明なる阿字の用を映出したのは高祖の效であるが、之とても固より高祖の獨創ではない。

經疏の中に其のヒントがあつたのである。經疏の中にあるヒントは阿字界の自然の囁きである。

恁て三大を以て阿字の實相界を映寫するこゝ阿字の體こ相こ用こは殘る隈なく顯はれ出でたのである。三大は我々には朦朧たる阿字の實相を映じ出す其のまゝである。三大の論說に至りては阿字の發露する形式に成る。三大の論は阿字界の形式にして三大の事實は阿字界の實相である。三大に依りて阿字實相の內容は展開せられたのである。其の阿字界に生活するものが凡て卽身成佛であるこいふこゝに成る。

七、卽身成佛の事實

高祖が不轉肉身にして成佛せられた。法華の龍女が卽身成佛した。其の他に誰れ〳〵が成佛したこいふ風に四五の事實を算へるのであるが、之れは人間界の卽身成佛ばかりを算へるからである。人間界の卽身成佛こいふのは阿字界に生活してをるこいふこゝを取り除いて、其れには無關係こして、自存性ばかりに生活をしやうこする狹い世界だけで卽身成佛を見やうこするからである。阿字界を除けものにして自存世界でだけ見たならば四五の卽身成佛者を算へられるだけである。上根下根、凡夫聖者、其のやうのものが固く自存に執着して居るこして、而して執着し終らせるこしての上の說であるが、阿字界には關係のない事である。而しながら自存に固執するこゝが又た阿字界の豫ての意匠であるから、狹い世界の卽身成佛も阿字世界から離れるのではない。離れやうこ企てただけのものである。阿字界から離れるこゝは能きぬが離れやうこする企てはある。其れが又た阿字界の意匠の中にあるのである。阿字界に生活するものは固執性あるにも係はらず卽身成佛である。卽身成佛の上で重ねての卽身成佛である。高祖や龍女や其他の明僧の卽身成佛は其れである。大日如來が不動明王の三昧に入る、不動明王が大黑天の三昧に入る、二重にも三重にも無限に卽身成佛を企てる。然し二重も一重も卽身成佛の價値に關係はせぬ。阿字の生活は卽身成佛の生活である。芥子程の一粒が杉の大木に成る。小豆程の一粒が朝顏の花に咲く、靑豆の肉が黑い虫に成つて飛ぶ、金が腐つて虫に成る人が朽ちて虫に成る、木が朽ちて虫に成る、土が水が腐つて虫に成る、花が菓實に成る、赤兒が大人になる、芋が土に成る、木の葉が土に成る、卵が鳥に成る、水が雪に成る氷に成る湯に成る、皆な阿字界に生活してをるからである。

金が火に成る、木が火に成る、人が子を生む、車が走る、石が轉ける、皆な阿字界に生活してをるからである。阿字界に生活してをるものは卽身成佛である、我は卽佛なりこ喚ぶに不可はない。阿字界に生活して居らん心組りでも可い。卽身成佛したものゝ自存性に固執するのである斯くしてこそ宇宙は差別相を展開して森羅萬象の宛然たる曼荼羅海華藏世界の面白味もあるのである、其れが又た阿字の豫ての意匠である。變化するを佛の遊戲こいふ。遊戲は變化である。卽身成佛の面白さである。

卽身成佛の名に因んで要綱だけを列ねて見たのである。卽身成佛だけ善く解つたものはない。而して理屈のないものはない。卽身我佛の生活を爲て來てからの後の種々の理屈は皆な面白い。間違ふて居ても可い。達らずしての理屈も面白い。愚論も明說もない皆な面白い。身體だけは一返なりこ新しく阿字界に生活を爲て來ねばならぬ併し來なくこも可い、來た方が面白いだけである。

自存性や、固執が勝つと面白いには面白いが悲しい情けない面白味を味はねばならぬ。

獻花

美麗なる華を愛するは人間の天性にして、これあればこそ人は暫し穢れたる浮世を忘れて、心清く身安らかに出世間の氣を呼吸するなり、佛沙羅林に隱れまして、祖師高僧跡を斷ちたる世にありて、清淨にして幽玄なる福音を傳ふるもの、たゞ野と山と水とに咲き出でたる天然の花にあらずや。

馥郁たる華を佛に奉るに、佛怡悅し給ふ、佛在世の砌り他方國の諸佛、諸菩薩、天人、人非人皆な來りて樹に咲ける花、草に咲ける花、蔓に咲ける花を、或は捧げ或は雨らし或は布きて奉れり、時處軌に曰く「花を献ずる故に三十二相を得らる、復た此の福を廻向して妙覺を成じ、光明を放つて人天の諸欲に耽り、八苦に逼らるゝものを驚かさん」と、

奇しきかな一切の佛、　能く諸の華藏を作し、
如來の寶性に依りて、　速かに供養となる、

今は大日經、蘇悉地經、瞿醯經等に依りて、獻華の事を述ぶるは、空しく象を撫て諍ふことの効なきを思へばなり。

星に雨を好むあり風を好むある如く、曼荼羅の圖中にある諸尊に、各々異りたる性質あり、例へば、

佛部
- 中臺八葉院（大日、寶幢、開敷華王、無量壽、天鼓雷音の五佛、普賢、文殊、觀自在、慈氏の四菩薩）
- 遍知院—大樂不空金剛、佛眼佛母等の五尊と二の使者、
- 持明院—不動、般若菩薩、降三世、大威德、勝三世の五大尊、
- 釋迦院—釋迦如來、無能勝等の三十九尊、
- 文殊院—文殊、觀音、普賢等の二十五尊、
- 虛空藏院—虛空藏、金剛藏、千手千眼觀自在等の二十八尊、
- 蘇悉地院—軍荼利、十一面觀音、孔雀王母等の八尊、

蓮花部
- 觀音院—勢至、聖觀音、馬頭、如意輪等の二十一尊、
- 地藏院—地藏、除蓋障等の九尊、

金剛部
- 金剛手院—金剛薩埵、發生金剛部等の廿一尊と十二使者、
- 除蓋障院—慈悲、施無畏等の九尊、

佛部の諸尊は理智圓滿にして定と慧とを具足し、蓮花部の諸尊は大慈心に住して衆生を愍れみ、金剛部の諸尊は大知慧の力を以て煩惱を摧く、

佛部、蓮花部、金剛部の三部の諸尊等既に異なりて、之れに奉るべき花自ら別なり

佛部の諸尊には……白き花、　蓮花部の諸尊には……黃なる花、
金剛部の諸尊には……赤き花、

を奉るべし、復た等しく佛部の中にありて、如來と菩薩と天部とに奉るべき花別なり。

佛には……白き花、　菩薩には……黃なる花、　世天には……赤き花、

瞿醯經、蘇悉地經等に依れば、

佛部には……白き香ばしき花、　蓮花部には……水中に生じたる白き花、

金剛部には……種々の香ばしき花、　世天には……隨時の種々の花、

蘇悉地經に三部に供養する花の名を擧げて、

佛部の尊には

忙攞底花、得藥嗢花、裙難花、末理迦花、喻底迦花、那龍藥花、

蓮花部の尊には

優鉢羅花、俱物頭花、蓮花、娑羅樹花、勢破理羅聞底迦花、本娜言花、得藥嗢花、

金剛部の尊には

青蓮花、鉢孕彎花、葉花枝條等、

（瑜祇經に上げたる三部の花名略之）

法に依りて用ゆる花自ら同じからず、法に四種ありて、

一、扇底迦法、息災法の梵語にして病疾障難等を除くことを祈り、

二、補瑟徵迦法、增益法の梵語にして福利を祈り、

三、阿毘遮略迦法、降伏法の梵語にして怨敵の退散を祈り、

四、縛施迦羅拏法、敬愛法の梵語にして尊貴昇進等を祈る、

四種の法に依りて異なりたる花を奉るなり、

扇底迦法には……白き花、
補瑟徵迦法には……黃なる花、
阿毘遮略迦法には……紫……黑……赤き花、
縛施伽羅拏法には……赤き花、

檜尾の護摩抄に曰く、

息災法には白色にして臭氣なく、毒氣なき花を奉るべし。例令へば、

蘇曼那花、軍那花、芬荼梨花、或は時華の愛樂すべきもの、

增益法には黃色にして毒氣なく、臭氣なき花を奉るべし。例令へば、

拘物頭華、瞻匐迦華、紫苑華、或は人の愛するもの、

降伏法には青色、紫色、黑色にして或は毒草或は毒木、或は棘荆に生じたる花を奉るべし。例へば、

射于花、鬼臼華、由拔華、鳥頭華、桔梗華、

敬愛法には赤色にして毒氣なく、臭氣なき花を奉るべきなり。例令へば、

波頭摩華、蘇曼那華、末利華、尸利沙華、歡艸華等の人の愛する花、

赤き花の吉祥なるものは敬愛の法に用ひ不吉祥なるものは降伏の法に用ゆ、降伏の法は悉て不祥なるものを擇ぶ、建立軌には刺ある樹に咲ける花、赤き花黑き花、香氣なき花を用ゆべしと、復た色のみにあらず、花の味に因りて別あり。

扇底迦法には……甘き花、　阿毘遮略迦法には……辛き花、　補瑟徵迦法には……淡き花、

蘇悉地經に依れば、復た息災の法には悉て白き花を用ひ、增益の法には悉て紅蓮花を用ひ、青蓮花を降伏に用ゆと見えたり、同じ經に依れば花の條、墮ちたる花を以て天后に供養し、紫と白の羯羅末囉花は特に忿怒尊と諸の使者とに献ずべしと、

復た種々の花を蒐めて鬘と爲し、或は種々の花を束ねて供養するときは、三部の何れの尊に奉るも妨げず、息災と增益と降伏との法に用ひらるゝなり、たゞ臭き花と、刺の樹に生じたる花と苦き花と辛き花とは用ゆ可らず名の知れざる雜花を用ゆることも宜しからず。

悉て花を奉るに枯れたる蟲の附けゐる枝と葉とを除き去り、清淨にして新鮮なるものを擇び、香水を灑ぐ可きなり、家の上、社の裡、出產したる家、死亡したる家等に生じたる不祥の花は用ゆべからず、設し穢れたる、虫ある、枯たる花を供養すれば諸尊は之れを嘉納せずして、却つて障難あるべし。

六時に咲く花を採りて供養するに、若し時節の花を缺くときは或は粳米を以て、或は蕎麥を燒きて華に替ふべし。

多聞天別行儀規に曰く、春と夏とは雜花を採りて奉り、秋と冬とは綵華を散ず。（綵華とは造花の意か）

增運の護摩次第抄に曰く、冬寒くして花なきときは米花、造花等を用ゆべし。

蘇悉地經には、華に替へて稻穀花を用ゆと、稻穀花とは糯米、油麻及び紫黃赤等に染めたるものを言ふなり。

或は熬りたる米を花に替へて奉る（帖決）

爛けたる米、碎けたる米は花として用ひず。

若し復た時華なきときは、蘇羅三の枝葉、莽嚕聞葉、灘敦葉、肹忙羅葉、訖哩瑟拏末利迦葉、忙覩抳伽葉、闍羅惹迦葉、及び蘭香等の葉を奉るべし。

設し斯れ等の枝葉なき時は轉落迦の根、甘松香の根、卷栢牛膝の根、及び諸の香藥の根を用ゆ。

或は丁香、豆蔻、完豆蔻、甘蒲桃の如き香しき果實を花に替ふなり。

さらに復た斯れ等の花、葉、枝、根、果、或は綵花の奉るべきものなくば、曾て見曾て聞ける花を想ふて、運心を花として供養すべし、蘇悉地經に據れば、運心の供養を以て最極とし、此れに過ぐるものなしとせり。

求聞持の儀規には橘、柏等の葉を用ゆと見えたり。

十八契印生起の中には檻葉を用ゆと見えたり。

青き檻の色が印度の温鉢羅花（青蓮花）に似たり、而して四季變らざる故に、時華に替えて用ひらる、後人の是を檻に限る如く思へるは固より誤謬なり。

上に列したる花の梵名に就いては、多く此方になきものなれば、茲に飜名を擧げざるなり、此方の花にして世間に吉祥なりとせらるゝものは、皆な供養するを妨げざるなり、特に或は絲に貫き、或は束ね、或は鬘として奉るとき、其の慇懃なる心見えて、諸尊は歡喜し護念し給ふ。

梵名を擧げたる花の中に、頗る興味ある因緣を有てるものあり。例令へば、

一、尸利沙樹、過去の拘留孫佛此の樹の下にありて得道せられたるものなり、此の樹の花と葉と果實とを細末にして薫陸香を製す。

二、波羅奢赤樹花樹と名くるものにして、赤き汁滓は染料として紫礦と呼ばるゝものを製す。

三、奔那迦龍華樹にして五十六億七千萬年の未來に於いて、高さ三十里、廣さ四十里の龍華樹の下に在りて、四月八日明星の出る頃彌勒菩薩は正覺を成ずるなり、此の樹の花龍の形に似たりと。

四、阿輪柯無優樹にして形ち蜀葵の如し、摩耶夫人二月八日に藍毘尼園に往いて、此の樹の下にあり、右の手を擧けて其の花を摘むとき、太子右脇より產れ玉ふ。

五、須曼花昔人ありて此の樹の邊りに死す、妻之れを哭いて樹の下に死す、故に此の樹を相思と云ふと。

六、鉢頭摩花……赤蓮花、　殟鉢羅花……青蓮花、　奔荼利花……白蓮花、
　拘某陀花……黃蓮花、　芬陀利花……白蓮花、

して、花の徑一尺餘あり、極めて香はし、昔瑠璃王と云ふ人ありて、衆くの釋女を殺害したり、時に大伽葉は芬陀利花を採りて八功德水に浸し、水を婦女の面に灑ぎたるに、婦女たちは命終して天に生ぜり、其の花を池に投じたるもの今ま榮ゆるなり。

七、末利花夢に生ずる黃金色の花にして香ばし、多く鬘に作らる。

八、瞻蔔迦花、黃色の華にして香氣あり、形ち梔子に似たり。

九、婆羅花四季常に凋まず、故に堅固樹と云ふ。

十、鉢孕羅花粟の如くにして花房は赤く香高し。

要するに梵名に擧げられたる花は此方に多くなきところなり、後園に咲ける花を奉るにも、自ら儀規なかるべからず。

春は
梅、櫻、桃、躑躅、紫雲草、蒲公英、菫、春菊。

夏は
牡丹、芍藥、卯の花、木蓮、葵、菖蒲、瞿麥、蓮花、朝顏、水萩。

秋は
女郎花、蘭、茶山花、特に赤き白き黃なる菊は品高くして獻供に最も適當なり。
木槿、桔梗、石榴の花、薔薇、鷄頭など心して奉るべきものも尠なからず。

花は慈愛の心を以て奉るものにして、此の慈愛心とは淨菩提の種子なり、萬行は是より開敷して畢に佛果を莊嚴するなり、されば華の眞言に、

南歷三漫多勃陀喃　摩訶妹咀囉也　大慈　毗庾娜藥帝生　莎訶歸

大慈より淨菩提心の樹王生じて茂盛し、萬德の花開いて茲に佛果の菓實を成ずるなり。

密教の悉曇

悉曇聲明愚僧の役てふ諺は、此れを倏ちに聽けば、一片の諧謔に過きざるが如くなるも熟ら思ひ至れば後世諸山の學風を最も痛切に表明するものにして、洵に遺憾なく學海の弊竇を言ひ盡したるの慨あり、何ぞなれば、根來の賴瑜師、南山の宥快師、長覺師、東寺の杲寶師、賴寶師等の法將相前後して輩出するや、教相理談の風は一時に競ひ興り、法憧は各山の峰に翻り法鼓は各流の溪に響き、只管らに高遠なる理觀を追ふて、頻りに佛身の優劣を爭ひ、機根の正傍を繹ぬることに惶はしかりき、恁くて高談縱議は却つて思想を粗漫に導き、事相實修の風は自ら二の町に下されたれば、悉曇聲明の如き、稍や事相に互りて、綿密なる思量を要する科目は、うるさしとばかりにて、多く省みるものなきに至れり爾來習ひ風を成して、智者は愚者の學を爲すを愧とし、愚者は愚者の學を爲して自ら愚を證明するを恐れ、愚者も智者も共に悉曇聲明に對して、多くの注意を拂はずなりぬ、近世に至りて、淨嚴師、慈雲尊者等あり、精覈研鑽旺んに斯の學を唱道せられたるも、大勢の歸するところ如何ともする能はず、惜い哉、斯の偉業も僅かに一代にして熄み、遺風は多く颺がらざりしが如し、されど尙ほ餘烈のみ殘りて、近來に至るまでは宗徒の必修科として、悉曇十八章の切繼きを課せられたり、然るに現時に下りてはその制すら廢して、今は全く痕を絕んとするなり、之を思へば復た强ちに道理なきにもあらず、其故は一時悉曇の學勃興したるときに當りては、宗學者は多少の興味を以て之れを學びたるも、二代に至りて既に振はずなりたれば、せめては十八章の切繼を學び、悉曇の面影を偲ばんとしたるもの、三代に至りては最早や悉曇の本義を忘れて、十八章切繼のみを見て其の無意味なるに呆れ、頓に四代に至りて畢に廢絕に歸したるなり、今は正に其の時機なりとす、例へば子は父の偉業を卑みて家風を遵守するに、孫は祖父を知らざれば、その家風の無趣味なるに飽きたるとき、立孫は直ちに之れを破りて呑まざる如くなり、悉曇とは十八章の切繼の謂ひにして、其他に何等の意味あるなしとすれば、斯れを捨つるも惜むところなしと雖も、吾人の見る所を以てすれば、悉曇は爾かく單純なるものにあらざるを如何せん。

近時諸種の學文勃興の機運に際し、我國は宇内の學として備はらざるなきに至りたれば印度語學に精通し、昔は名にのみ傳へ聞きたる吠陀の原文を讀み、佛典の原本を誦する人に乏しからずなりぬ、特に諸種の經典を歷史的に攷査すること、近代の流行となるに至りては、印度學の研究は今や初期の幼稚なる準備時代より進んで、第二期に入りたるものと言ふべし、世間の梵學は斯かる勢運なるにも係はらず悉曇字記一卷を金科玉條として、十八章の建立に相承の巧妙を矜らんとするものあらば、之れを幼稚なりと評せんよりは、寧ろ滑稽に陷らざるやを虞るゝなりテニスン、ブラウニングの詩を鑑賞しつゝある學者に交はりて、眞面目にスペウ井ングの功能を說くものあらば、狂と誤られざるを欲するも不可なり、果せる哉世間の學者は密教の悉曇を見て笑へり、學者の考に因れば、密教は眞言陀羅尼種子等の梵字の使用多き爲めに、梵學は頗る發達したるべき理なり、然るに其悉曇なるものを見るに、十二の麼多と三十四の體文とを綴合し作法して、十八章を造る如き、言はゞ梵學の初步を學ぶのみ

にして、梵學上最も緊要なる、六合釋、八轉聲の如きものを却て疎略にしたるが如き、寧ろ奇なりとして怪めり、現に英文を知らずして英文學者たる能はず、漢文を識らざる漢文學者あるべからざる如く、眞言陀羅尼宗の宗徒にして、眞言陀羅尼を誦ずる能はず、辛ふじて傍訓を辿りて三陀羅尼を通讀する如きことあらば、頗る奇怪なる事なりしならん、假令しや梵文を通讀し得たりとするも、リーディングに巧みなる少年が、或るドラマを無意味に讀みたりとて多く矜るに足らざるが如くなり、法華經を讀まざる法華宗徒、阿彌陀經を讀まざる、門徒、而して陀羅尼を誦せざる密宗徒はある可らざるなり、是に於て密宗教徒は悉曇を必須の學科として修めしめ、陀羅尼の誦持理解に便せんとしたるなり、然しながら世間の學者の見る如く、悉曇を以て單に印度の文法として、之れに因りて陀羅尼の訓釋を知らんとするものなりと言ふに至りては、吾人は直ちに首肯する能はざるなり、今試に密教學者の悉曇に對する態度に就いて考ふるに、自ら三樣に分るゝを見る。

一、悉曇を以て音韻の學とするものにして、十二慶多と三十四の體文とを作法して、或は音と韻とに配し、或は牙齒舌喉唇の五處、喉内舌内唇内の三内に配し、或は宮商角徵羽の五音に配し、或は清音と濁音と拗音と直音とに區別し、或は四聲を分ち連聲、音便等を明らめ、主として發音法を正さんとするなり、之れ悉曇を以て韻鏡學の根源とせんとするなり。

二、悉曇を以て梵語の文典なりとするものにして、彼の韻鏡學者の如く、音韻の研究に止らずして、詞の種類、六合釋、八轉聲、時等を研究し譯書等に依らずして、直接梵篋を讀破せんとするものなり、吾人は慈雲尊者の梵學が如何なる發展を遂げたるかを語るべき材料を有せざるも、尊者が最も崇信せられたる華嚴經の普賢行願讚の梵本を得て、こゝに發奮して梵學を肇め略々梵文の意を明らめられたることゝ、梵文の字彙を編纂せられたることゝ、常に佛陀の金口を漏れたるまゝの音聲(即ち正確なる梵音)に接せんことを翹望せられたることゝ等より考ふるに、尊者の梵學は首として音韻語法等を研究し、以て原本の佛典を鑑賞するにありたるならん、思ふに斯かる態度を以て、悉曇の研究を始めたる人は、尊者を一の人として推さゞる可らず。之れ一は尊者が當代の佛教に嫌焉たらざる所あり、玉石混淆して佛經の名の下に、邪義横說の隱れたるを疑ふて、原本の佛典に據り佛陀の眞福音に接せんことを期待せられたればなり。

三、悉曇の字母を以て、いろは假名、英語のABCの如き世間普通の文字と同一視せず、從つて悉曇は音韻、語法等の研究に依りて、梵典の披讀に便せんとするにあらずして、金剛頂經の釋字母品、大日經の字輪品、字母表、字母釋等に依りて、一一の字門に字相字義を分別し、淺略深祕重々横縱の釋を爲すなり、而して此の傾向は洎々として密教學者の風習を成すに至りたれば、悉曇を一の語學として攻究するものなく悉曇は遂に梵語學と異りたる途を走らんとするなり、之れ密教が眞言陀羅尼宗なるに拘はらず後世に梵文を讀むことに重きを置かずなりたる所以なり、されど斯れ亦た大に事由なきを得ざるなり。

要之、已上の三者は悉曇に對して其の態度を異にし、各々一方に走りたるが如きも、その實、一は他を

斥くるにあらずして、三者は相寄り相援けて聲字實相の義を表顯するものなるは言ふまでもなきなり、經の偈に「最勝眞實の聲(音)と眞言(形)と眞言の相(字義)とを、行者諦かに思惟して不懷の句を成ずること を得」とありて、眞言陀羅尼は其の發音と其の語法と其の字義とを明確にして、初めて金剛の體性と成るものなれば、密教の學徒は必ず梵文を正しく讀み、正しく書き、正しく解して、陀羅尼の功德を全ふすべきなり。

然るに悉曇が眞言天臺に於いて盛んに研究せられたるに關はらず、語學として未だ頗る幼稚にして、近世の學界に何等の矜るに足るべきものなきを見て、世間の學者は怪しとし且つ之れを輕視するが如しと雖も、斯れ密教が悉曇に對する根本の態度を誤認したるが爲めならざるなきか、世間の學者は前にも言へる如く悉曇を以て、眞言陀羅尼種子等を理解せんが爲に學ぶものとし、猶ほ英文學者が英文を學ぶ如く、印度の原語に依りて書かれたる陀羅尼を通解せんが爲に梵文を攻究するものと速斷するより來りたる誤謬なり、然るに密教の立場より言へば、悉曇は陀羅尼、種子の音義を正しく通解せんとする外に、大なる他の目的を有するなり、則ち普通の文字として取り扱はんとするものにあらずして、易學者の易の爻を視る如くに梵文を見たるなり、何となれば易の三爻は天地人の三才を彰はし、之れを陰陽の二に分ちて六爻を成し、更らに乾坤震巽坎離艮兌の八封を成して、以て天地間の森羅萬象と其の變化の理を究むるなり、されば易の爻は文字にあらずして、宇宙の實在の表彰なり、悉曇の字母も印度に在りて普通に使用せらるゝときは、單にアルファベットと擇ぶところなかりしも、一度密教に入り來りては最早や普通の文章語にはあらずして、一一の字に無量の深義を含み、四十六字の字母に諸法の實相を表彰すること、彼の易の爻に似たるなり、故に高祖は悉曇を釋して伏羲の六爻の如しと云へり、斯くて密教に於ける悉曇は、梵文の言語學に反らずして、如來内證の法門、法曼荼羅の舉體なり、之れを人に約せんか、字母は直ちに大曼荼羅なり、「一一の字門修行するところに隨つて、決定して悉く皆な菩提の果を得る」正因なれば、「一度梵文を披らけば梵天の加護森羅たり、神人の冥護側にあるなり」、されば易の爻に似たりと言ふも、實は一片の相似にして、素より同日の論にあらざるなり、易の爻が尚ほ宇宙の表彰たるに止まるに字母は其の形音義、何れにしても宇宙其のものにして單なる表彰にあらざるなり、水と云ふ語は直ちに綿布を濕し、火と云ふ語は直ちに木を燒くなり、之は水其ものなり、ङ字は火其ものなり、火が物を燒けば ङ字物を燒くなり、水物を濕せば ङ字物を濕すなり、斯かる神祕的の傾向は密教に始まりたるにあらずして、梵天の所造なる聲論に於いて既に其萠芽あり、一字に千理を含むことは顯れたるに、後ち聲論師の如きもありて聲は常住なるを論ずるに至り、是れが密教に入り哲學的の攻察を經て、更に醇化したるものは彼の密教の悉曇なれば、勢ひ普通の言語學と遠かりゆきて、畢には悉曇なるものと言語學としての梵學とは、多く關係なきものかの如くなりゆきたれば、言語學的に發達せざりしは寧ろ自然の結果なりき、されば世の學者の如く、悉曇を見て一個の言語學とのみ評し去らんとするは頗る遺憾なり。

然しながら密教が字相字義に偏重にして、先づ文法語格を究めることを過め、次で發音を正すこと

を止め。而して後ち字義を明らめるに由なきに至りては、陀羅尼宗は、たゞ其の名をのみ遺すに至れり、近時、梵學勃興の機運に際し、梵書備はり、字彙備はり、文典明かなれば、慈雲尊者當時の百分一の勞力を以て、多少の成效をも見んなり、吾人は茲に密教としての悉曇學を推奬するものなり。

加被力定力三昧力

一

今、机上に維摩經と、法華經と、祕密儀軌の震五の一冊がある、其の儀軌中の觀藥王藥上二菩薩經と三部に就いて、加被力と定力と三昧力との三力を比較して見やう、三つの力と分けるは分けたが、何れも如來の不思議力で根本は別なるものではあるまいか、場合に應じて如來の不思議力の働きかた、現はれかたが異ふために、或は加被力といひ、或は定力といひ、或は三昧力といふ、而して如來の不思議力は必ずしも此の三力に限つた譯ではない、佛智は無盡であるから、其の力も無限であらねばならぬが、大凡は此れで盡すことが能きやう。

二

螺髻梵王が、舍利弗に語つていふに、佛の住み給へる此の土を以て不淨なりと爲ること勿れ、何となれば釋迦牟尼佛の土を見るに、清淨なる事譬へば自在天宮の如しと、舍利弗の言へるは、我れ此土を見るに坵陵あり坑坎あり、荆棘あり沙礫あり、諸山は土石なり、穢惡は充滿せり、何を以て清淨なりといふかと、佛の見給へる目にも、諸の衆生は生老病死と憂悲苦惱のために燒かれ、五欲のために種々の苦を受け、又た貪着し追求するために現身には衆苦を受け、死して後には地獄の火に燒かる、恁かる世界を清淨なる佛土とは觀ることが能きぬでないか。

三

此の穢れたる世界も佛智を藉りて見るときは、宛然ら清淨なる佛土となる、舍利弗が宇宙を不淨なりと見たのは自己の忘念を以て見たからである。佛は舍利弗に說いていふに、日月は不淨にあらず、盲者は清淨なる日月をも見る能はざるなり、見る能はざるは盲者の咎なり、日月の咎にはあらず、此の土の嚴淨なるを見ざるは如來の咎にはあらず、此の土は清淨なるも舍利弗汝は見る能はざるなりと、螺髻梵王も舍利弗に敎えて言へるは、佛智慧に依れば則ち此の土の清淨なるを見ることを得る、恁くて佛は足の指を以て地を按づるに、卽時に三千大千世界は無數の珍寶を以て美しく飾られてあるのが見えた、舍利弗も之れを見て本より見ざるところであつたといふて駭いた。彼が今清淨なる國土を見たのは佛の智慧を通してであつた、則ち佛の加被力に藉りてであつた、舍利弗が初め自身の目を以て見たときは外部から世相を見たので、而して佛の加被力に依りて清淨なる國土を見たのは、佛の智惠を通して內部から實相を觀ることを得たからである、佛は衆生を加被して直ちに實相を見せしめる。

四

佛が成道して四十年の間に四諦の法を說き、十二因緣の法を說き、般若の法を說かれたが、未だ法華一實の理を說かれなんだがために、弟子たちは涅槃空寂の理を以て究竟の極理と信じてをつた、然るに時機到來して曾て示さなかつた眞實の法門、佛が出世したのもたゞ此一大事が說きたさの法門、而して今まで說き來つた總ての敎はたゞ此れが爲の準備であつた、其の法門、其れは三世の諸佛が相變らず此法門を說く爲に世に出で給ふといふ最尊最勝の法門である妙法蓮華經を說かれた此の經は諸法の實相を說くのであるから、先づ以て諸法實相の狀態を示された、則ち佛は無量義處三昧に入りたるに、是の時に天より曼荼羅華、曼殊沙華を降らして佛の上に散し世界は六種に震動したので會中の人々は合掌して一心に佛を觀奉つりたる、其の時佛は眉間の白毫より光を放つて、東方萬八千の世界を照したるに下は阿鼻獄より上は阿迦尼吒天に至るまで十界の狀相を盡く見ることが能きた、而して其れ等の世界の衆生の種々の動作が皆な明かに觀ゆるのである、今此の白毫光に照されたる世界の相は則ち如來が將に說かんとする實相にして、それが如來の定力に依りて、現はれたのである、卽ち今までは空寂無相が眞の涅槃、こばかり思ひ居たる多くの弟子たちには、如來の定力に依りて現はされたる此の實相を宛然らに見て驚き怪しまぬものはなかつた、而して彼等は此の時に到りて無相空寂を至極の理とした謬想を捨てゝ、初めて諸法の實相を觀取することを得たのである、諸法の實相なることは如來の說法を俟たず、其の定力に依りて實現せられたのであつた、四十餘年の間に空了した諸法は、今法華の會座にありて如來の定の中に十界宛然たる實を現はしたのである。

五

さらに三昧力になると前の如來の智惠を通して實相を觀取する加被力や、世相を空了して如來の白毫相の光りの中に實相を炳現する、定力と異なりて、世相其のまゝにして、實相界の淸淨な壯嚴な自由な圓融無碍なる不思議の事像を成すのである、藥上菩薩が佛の授記を聞き已つて、卽ち三昧に入ると、身は化して華と爲る、其の美はしきこと七寶莊嚴の瞻蔔林の如くなり、此の華は復た化して華雲となる此の華雲を以て佛に供養し奉まつる、其の時、華雲の中に金色の光を放ち光の中に瑠璃雲を出し、其の中より演說して、

正しく徧知し給へる世尊、　垢に染らざる釋師子、
十方に等しき侶なし　慧の光は法界を照し、
普く一切を愍みて、　世に出現し給へり、
我今禮したてまつる。

恁くして藥上菩薩は是の偈を說き已つて本座に還らる、復た菩薩の誓願を聞いて、大衆は隨喜の餘り各々瓔珞を脫いで共に藥上菩薩の上に散ずる、其の散ぜられたる瓔珞は七寶の臺の如くにして空中に停まる、臺の中には純黃金色の光りあり、光の中に聲ありて梵音の響きは偈となる、

善い哉勝大士、　弘誓の願を發し給ふ、
必ず苦の衆生を度して、　心に疑ひあることなく、

未來にはまさに成佛せん、　號けて淨藏といはん、
苦海に沒したる者を、　救護し給ひなん。

不思議の三昧力に依りて忽に華となり、忽に雲となり、忽に光明となり、忽に微妙なる梵唄となり、圓融無碍妙用自在なるはさらに實相の現實の顯現である、加被力のやうに佛の智惠を借りて實相を見るでもなく、定力のやうに現像を空了して實相を現はすでもなく、現實そのものが直ちに實相の活動を發して圓融無碍の約束を成し遂げる。

六

加被力に依りて實相を見る、定力の中にも眞相を見、實相を見る、然るに其の二の力にて見る實相は何れも佛の側に立つて、佛の力を通じて之れを見ることが能きるので、そればかりでは何となしに不足を感ずる、佛の力を借り佛の側に立つてゝなければ見えぬとすれば何となしに頼りなく思ふ、凡夫は凡夫の側に立つて、凡夫自身の目で見手で觸れて見ねば曉領が能きぬ、佛の力を疑ふのではないけれど、佛の定の中に見た實相や佛の智慧を通して見た實相では、鏡の中に映して見せられたやうな心もちで深刻でない、然るに三昧の力は渾て此の不足を補ふて餘りがある、三昧力では現實の物を佛の方から見ずして、凡夫の方から見る、而して其物の中に實相の圓融無碍なる活動を見るのであるから、切實に實相界の消息が曉る、而して佛の目からは原より此の三の力に高下、親疎の別はあるまいけれど、凡夫の目からは此の三昧の驗證があればこそ、他の定力も加被力も確かなるものとして信ずることが能きるのである、それで凡夫に對しては此の三昧が他の二つの力の保證に立つのである。

七

尙ほ茲に陳ぶべきことはクリストが現實界のうちに實相を觀取したといふことである彼が曾ていへるは、ソロモンの榮華の極の時だにも其裝は此花の一に及ばざりきと、野に咲ける一輪の花にも神の光榮の現れたるを觀た、然るに此の神の光榮を觀ることを得たのは神のお思召しにして彼の自由ではなかつた、それ故に彼が實相を觀たりとするもそれは神の智慧を通してゝある、加被力に依つて神の光榮の顯現を見ることが能きた、而してクリストは實相を觀たといふけれど、其の實相とは現像其のものではない、現像は單に神の光榮の顯現で、神は明日爐に投入らるゝ草花にもソロモンの榮華すら達ばぬほど夥しき愛を澆がれたるものであるが、それにしても草花其れは神ではない、何となれば神は恩惠を與へるものであるが、何物よりも恩惠を受ける側のものではない、神は草花を咲かせるも草花となりて咲かせらるゝことを好まぬ、佛は物の外に神があることを說かぬ、物自らが實相である、今此の三方のことを論ずるにも、クリストの如き實相觀をもてる渾ての宗教は、此の中に混して論ずることは能きぬ、

ボナヴェンチュラと六無畏

泰西に於ける中世紀の思想界は全く基督教に依つて代表せられてをつたのであるが、其の時代にはかの教徒の中に種々の鉅匠が顯はれて深遠なる思想を皷吹したのであつた。其れ等の時代に於いて基督教の中に最も著るき二つの潮流があつた。二つといふても別の河身を流れてをつたのではなくして、一つの河床に二つの流れを成して居たのであつた。其の一はスコラ學派にして他は神祕家である。スコラ派の目的は教會の信仰が眞理に協へることを示さんとして、哲學的にかの信仰を說明せんとして起つたのである。隨つて其の學說は多く教會の都合よきやうに計られたものであるから、世には之れを教會の婢僕の役目を爲せるものといはるゝほどであるが、併し其の學派の盛んなことは殆んど中世紀の思想界の全部を蔽ふてをるのである。神祕派といふもスコラ派に背いて起つたのではなくして、是れと調和しながら一種の色を帶びた宗派を形作つたのである。而して此の派の末流には種々の行などを爲す人も顯はれて、中には達磨の面壁九年よりも甚しいことを演つた。例へば一本の棒を立てゝ其の上に片足で立つたまゝ三十年の長い間神に祈禱をしてをつたものなどがある。此の派は其の源を探れば希臘のプレトーに於いて既に胚胎してをつたもので、夫れが此方彼方〻流れ〳〵て來て中世に至りベルナルドーやフーゴーに傳はり、それからボナヴェンチュラ(紀元一千二百二十一年に生れ、一千二百七十四年に歿したる人)に至つて、此の派は最も充分なる發達を遂げたのである。一體スコラ學派の研究するところは神の實在なることや、神と現象界との關係や、父なる神と子なる基督と精靈との關係や、罪の兒の論證や、其の他の問題であつたが、かの神祕派の信仰も其の點に於いては少しも相違はなくして、共に教會のオーソドックスを奉ずる徒である。たゞ神祕派の神祕派たるところは、教會の信仰を實行に顯はす上に在るのである。一般の教徒は神を祈り神の救ひを需めるのであつて自力的修行を試みるのではない。例せば我が淨土眞宗のやうな態度であつたが、之れに反し神祕派の人の考では例せば天臺止觀門の修行のやうに稍自力修行の傾を有つてをる。其の最も發達したものになると、或は密教の瑜伽の行に能く似たやうな處もある。

此の派の考に依れば實に神の境界を知ろうと思へば、自身の信仰力と神の感應とに依つて知ることが能きるが其れには非常に高い精神的生活に入り、無念無想にして深遠なる神の境を窺ふことが能きるのである。此の自力的なるところなどが佛教の禪定三昧の裡に眞如の境を開悟しやうとするのと同じ徑路を辿るのである。而してボナヴェンチュラは最も細かにその修行の相を說いてをる。則ち神の境界を漸次に淺より深に進んで觀じて、修行者の精神と所觀の境とが共に最極の妙境に到るには六段の階級を經るとするのである。さて六段の階級を經て淺より深に進むといふを以て、直ちに密教の六無畏の法相と對比して見るなどは本より早計である。六無畏といへば眞言行者の淨菩提心を開顯する次第を說いたもので、彼れと此れと實質が違ふことは言ふまでもないのであるが、左も無くば神を想見するにあたり、觀想を淺きより深きに進めて六段に觀ずるなどは頗る妙である。而して

其れが幾分かでも六無畏の配釋と似通ふた點があるから面白い。第一六段の階級を經て神にもせよ眞如法界にもせよ何れも絶待の境界を所對とし、初めには此の絶待界を外界を通して見、次に自身を通して見、次に自の心鏡に映して見、次に此の心鏡を取り去つて親しく絶待界を感知し、而して最後に其の絶待境に沒入する過程なごは兩者が卽離の間に在りて、或は同じ血液が此の間に流れてをるのではあるまいかと思はるゝまでに能く似たものである。さてボナヴェンチュラのいふところの神を觀ずるに就ての六段といふのは恁うである。

第一段は現像界に於いて神の全智と全能と而して至善なることが現はれてをる故に、此の重量や數量や尺度を以て計り得るところの現像界を通して、神の德を觀ずるのである。

六無畏の中の初無畏は善無畏といふ、此の位に在つては世間の十善業を行じて地獄、餓鬼、畜生の劇苦を遁れ追つては涅槃に至る處をいふのである。而して是れを眞言行者の修行する位に配すると、遙かに曼荼羅の諸尊を看る位にあたるのである。曼荼羅の諸尊を觀るといへば單に畫像彩繪の曼荼羅を見るだけでなくして、則ち空中に宛然ら胡麻の如き無量の佛菩薩を見るのである。これは神祕派に於いて現像界に卽して神の光榮を見るといふのとゆき方が同じである。

第二段になるとかの神の光榮に充ちたる世界と人間との關係を觀察して、此の美はしい喜ばしい神の世界に在りて樂しむことを喜ぶところである。

六無畏の第二を身無畏といふ、常に此の位は小乘の聲聞などの思想の階段をあてるのである、則ち此の肉體は不淨なり、我れ等の感受するところは苦痛のみ、心とは刹那に生死するものにして無常なり、觸知の境界は皆な因緣に據りて生ずるものなれば無我なりといふことを觀ずるところにあるのである。是れを又た眞言行者の修行する三昧道にあてゝ、瑜伽の行を修するとき本尊の曼荼羅の境界が行者の心中に顯はるゝ位になる。かの神の光榮の顯はるゝ美しき世界を觀て喜ぶところと同じやうである。

第三段は最早や外界に顯はれた神の影を見るのでなくして、我等の心を鏡として其の心鏡の表に神の境界が映る其れを見る位である。

復た六無畏の中の第三の無畏を無我無畏といふ。是れも小乘の中にあつて、五感に觸るゝところの境は皆な因緣に據つて生ずるものなれば無我なり、空なりと觀じて一切法の無我なることを知る位をあてるのである。是れを又た眞言行者の瑜伽の行にあてゝ、行者瑜伽の中に曼荼羅の諸尊の影像を見て、此の影像の空なり無我なることを知つて執着せざる位である。茲にも神祕派の第三段の神の境界を看るときに、外界との關係を絶ちて心鏡の上に映して觀るのは、諸法の空なるを知つて心内に現ずるところの諸佛菩薩を觀ながら其の影像に執着を起さぬといふと自ら相通ずるところがある。ボナヴェンチュラの說に依るに此の第三段までは凡夫の智を以て達することを得るのであるが、第四段からは全く神の恩惠に據らざれば進むことは能きぬのであるとする。

「第四段は神の恩惠に依つて修行者は神と感應道交することを得るのであるが其の道交を得た

こころが此の位である。

六無畏の中の第四位は法無畏といふ。此れは小乘の最極の處にして因緣生の法は空なり無我なりと觀ずることは第三の無畏の如くであるが、さらに因緣の藉つて生ずる實質其のものも空なりと覺る位を茲にあてるのである。是れを又た眞言行者の修する瑜伽にあてゝ行者の心鏡の中に益々明かに曼荼羅の諸尊の顯はるゝのであるが、其の影像は原より鏡中の影水中の月の如くにして、たゞ感應の因緣に依つて暫らく曼荼羅の諸佛菩薩の像影のあることを曉る位である。而して之れが亦たがの神と道交するといふに似てをる。

第五段に至つては既に神の境界を觀るにもかの心鏡の上に映じたる影に據らずして、鏡を取り除いて、膚と膚とが觸れる如く、神の境界に直ちに接するのである。

六無畏の中の第五を法無我無畏といふのである。此の位では心外に法なく、諸法はたゞ唯心なれば法界は一心に外ならぬことは知るところの大乘の菩薩の地にあたるのである。之れを又た眞言行者の修する瑜伽觀行に配するに、行者瑜伽の中に於いて自在に曼荼羅の諸尊に接することを得る位にして、かの心鏡を撤して親しく神の本質に觸るゝことを得るとするところと頗る類似するのである。

第六段に到つては最早や觀行の發達の極に達して、神の最上善に協ふ位である。神の最上善に協ふとき我れ自ら神の偉大なる威力を顯はすことは能きぬが、神の至善なる、境界に同ずることは能きる。則ち神の至善に格る、茲に於いて充分に神の境界を味ふのである。

六無畏の第六は一切法平等無畏の位といふのであるが、此の位では法界の諸法が皆な畢究空で眞如の境に歸するので、常に之れを天臺、華嚴の觀行に配してをる。而して又た是れを眞言行者に配すると、瑜伽の行全たく圓滿して自身の虛空無垢の大菩提心が開發した位になるのである。されば是れも亦たかの第六段の淺より深によりゆいて神の最上善に協ふた位といふところに甚だ能く適ふのである。

之れを要するに六無畏の說と神祕說とは、本來の出立點が異ふて居るために、兩者が同じ物がらであるべき筈でもなく、あつたところで何んの妙もないのである。六無畏は行者の向上發展して人法の執を破し一切を空うして其處に自身本具の菩提心を開顯しやうとするのであるが、神祕派の方では我れの對像として既に動かすべからざる絕待の神がある。而して我れは相待のものであるから、相待の我れが絕待の神に歸入することは能きぬ。神は常に我れの本尊にして其の本尊なる神の本質が幽玄なるために我が觀想も進まねばならぬ。其れ故に淺きより深きに至つて終に神の最上善に協ふのである。神の最上善に協ふことは能きるが、我れ自ら神となることは能きぬ。佛耶の二敎には既に此の大なる差別があるから、大日經に說くところの六無畏と、神祕派に說くところの六つの階段とには、何等の關係のあるべきでないのであるか、細かに釋ねて見ると偶然にも餘程似通ふた點がある。其の著るしき點を上げて見れば、

一、兩者何れも、絕待の境界を所對として、淺より深に進み向上發展するのである。

二、而して其の淺より深に進むに就て、何れも初めに現像界に於いて絶待界の德を見る。次で外界に於いて見る。進んで心内に入り、漸く進むに隨つて全部か又は一部の不同はあるも、共に絶待界に歸入し同化するのである。

三、六つの階段の各に於いて觀念の狀相を見るに、其の根本の立脚の異なりて一は無我を主とし一は我を主とするに關はらず、其の狀相の行き方に近似したところがある。

四、特に面白いのはかの神祕派の六階級の觀門の畢りに、第七といふ名稱は立たぬが前の六階級の次に、若しくは其の第六段の中の最後の部分に於いて、全然無我無心の境とも言ふべきサバッス Sabbath 則ち安息がある。而して六無畏の方に於いても或る學者の說に依れば、第六の無畏の外に初地を見て、是れを果德圓滿の境とするのである。果德圓滿は則ち安息の位といふことも能きやう。

斯くて兩者の同異點を取捨したらば頗る興味のある對比が能きやうと思ふのであるが、茲には單に神祕派に觀想するに就て淺より深に進んで六階級ありとしたることが、かの六無畏の說に似たる點のあるために、且らく引き合せて上げて見たゞけである。兩者の間に實際何等か歷史的の關係でもあるのではないかといふ如きことは、此の次の研究に讓らねばならぬ。茲に神祕派の說を揭げたのは、實は單なる好事的の興味のためではない。常に基督教といへば單純なり、淺薄なりとして一概に拆けて居るのであるが、其れは一派の基督教の事で、中には密教にいふやうな神祕なる幽玄な敎義を有つてをることを知らんがために其の中での一說を引き合せて見たのである。

時代精神と阿字

一

現代文明の批評家や思索家は深き人生の歸趣を需めて、混沌として亂れに亂れたる思想界の迷霧を破り、理想の光明を與へて折角に萠したる美はしき時代精神に尙ほも麗はしき光彩を添へて、近代文化の目的を完成せんと焦慮してをる。然るに其れが餘りに困難なる事件であると共に、其れを試みる人の多きに過ぎるために有雜無雜の言はゞ文明界の彌次馬と眞正の批評家思索家との差別さへ辨へ難く成つて彼等が最后の大鐵案を下すまでにかの數知れぬ小批評家小思索家を應接に疲らしめるので、たゞさへ進み難き批評思索をして一層困難ならしめた。設し彼等雜輩にも眞に文明の批評に意あるなれば、今日に於ける彼等の最上の義務は彼等自身の口を緘するより善きはないであろう。縱しや彼等の言ふところに多少取るべき說があるにしても其れは根本の解決が畢つて后に提出すべきもので、今の場合には其の親切が却つて妨げになるのである。

二

されど其れを云何んとも爲難いのが現代の缺點であるから、爲すがまゝに彼等の爲すにまかせて

をかねばならぬ。翻つて考ふるに彼等が旺んに騒ぐに至つたのには捨て難い意味を示してをる。則ち時代精神の反映が其れである。何ごなれば批評家なぞが疾くに道破したる如く、現代文明の特色は個人の覺醒である。彼等は從來謂れなく古き宗教、哲學、習慣なぞに囚はれて、彼等の祖先の代から長らくの間盲目的に生活してをつた。其れが偶然に近世の文明に接觸する機會を得たゝめに覺醒したのであるから、彼等は直に文明に同化することを得ずして自己を疑ふたのである。自己に迷ふたのである。恰も熟睡してをつたものが火事の非常警報に醒されて、火元に驅けつける前に度を亡ふて火事が内なるか外なるかに迷ふてをるやうなものである。近代の文明は個人を熟睡から醒して己れに向はせるのが目的であつたが、其の結果覺醒はなし得たものゝ、文明に向はせやうごと想ふた目的は外れて、却つて彼等を戸迷はせることに成つた。文明に若しも靈あるならば其の始末の意外なるに呆然たるものがあろう。が兎も角くも眠れる壯夫をたゝき起したるは近代文明の大功績ごいはねばならぬ。裏に自覺することろあればこそ迷ふのである。彼等は宇宙の曠大なるを知つた。自己の自己なるを知つた。而して自由なる自己を擴張すれば宇宙の大に合致し意のまゝに邂寒たる宇宙を自由に駈り得るものなるを信じ、宇宙の際涯に起れる渾ての出來事の報告を讀み得るものごと信ずるのである。昔の哲學者宗教家が想像に據りて描いたる其等の事を彼等は何の躊躇もなく現實に得んごと希ふ熱情は、歴々ごして何人にも覺られることろであろう。彼等は空中飛行機を發明することに非常なる興味を有ち、無線電信、無線電話を全成することに亦最も興味を有ち、星界の現像に思を凝發らし、潜在せる意識の不思議なる現像を研究し、蟹煙障霧の間を探り北極南極の涯に航する如き毒虫毒蛇ごと戰ふ如き、決して一時の好奇心に駈られたる假戯にあらずして、深く潜在せる人類の偉大なる能力を發せんごする眞摯なる向上發展の努力である。而して此等の偉大なる努力に堪え得る少數の人が何の恐るゝなく興味を以て活動することが能きることは、則ち彼等が覺醒したる大精神ごと合致したからである。少くごも其れに迷はずして其れに加擔して自己の滿足が得られるのである。然るに時代の最大多數の者は分に應じて或る自覺を遂げたるにも關はらず、顧みれば衷に自覺をした精神に伴ふて働くべき素質を有たぬ。體力なく知識に乏しく天禀の藝能なく、切めてもごと期待する僥倖も悉く外れ、而して衷にかの醒めたる精神のみは那邊にてか發展の途を看出さんごと急ぐのである。恁くして苦悶に陷らざるものがあるであろうか、現代の人が旺んに苦悶するのは是れがためである。苦悶に堪えられぬから騒ぐのである苦悶者に同情を表すべきは此の點にして、批評家思索家の解決を仰いで時代を救ふ所以も是れが爲である。併しながら是れは容易でない。

三

孤兒の泣くのを見て菓子を與へれば泣き過むものごと想へるは同情の豊富な人ではない。菓子を與へるは彼れの悲哀の情を瞞す策に過ぎぬ。眞に同情ある者は彼の母を誘ひ來らねばならぬ。孤兒は母を得て其の泣を眞に過めることが能きるが。然らざれば一時休止するまでゞ菓子は最后の決解を與へるものでない。菓子が無くなるか此れに飽けば彼は再び泣き初めるのである。或る論者は現代を救

ふために商業を盛んにしてパンを豐富にせよといふ。或は農工業を旺んにして彼等に業務を與へよといふ。其の他航海にあれ殖産にあれ生活の道を饒かにさへすれば現代の人を救ひ得るものと想ひ、是れ頓て現代を解決する唯一の途なりとするのであるが現代の精神が吾人を欺かざる限り、此等の論者は孤兒に菓子を與へるのを以て孤兒を救ふ唯一の方法と想へるものと一般にして、現代の思想を根本的に解決して此の美はしく萠芽したる精神を、遺憾なく發展させる途ではなくして、現代の不平者の精神を一時瞞すことを誨ゆるものである。然るに世は不幸にも恁る小批評家小思索家に謳歌し、動もすれば時代精神の覺醒を欺かんと試みるのである。時代精神は彼等の爲めに侮恥せられ蹂躪せられ迫害をすらも受くるものといふてよい。設しも彼等の論にして成功せんか、恪しい哉折角の時代精神も玉に磨かれずして瓦に燒かれて畢るのである。

四

人ありて謂はんか、孤兒に菓子を與ふるよりも母を與へるの良きこと、現代の人にパンを與へるよりも彼等をして知識に富せ技能を與へ、人格を改造して有用の材能とならしむるに若くものなきは論ずるまでもなき所なるも、母なきを孤兒といふ、無き母は與へ能はざるなり。凡庸なる人物を如何にして賢明に改造し得可きか、一時菓子を與へて欺き職業を與へて時代の人を救ふ、之れせめてもの同情ある思義ならずや。人生に於て人が他人に對して盡し得る最極の手段なりと、是れ世人と吾人、社會學者と宗教家の議論の因て頗るゝ所にして、近代の文明を解釋し批評し指導する上に於いて見地を異にする所以である。若し世人の見る如くならば時代の人の覺醒は如何なる點に價値を見出すか。彼等が見る時代はたゞ豐饒なる生活の途を得んがために自覺し、豐饒なる生活を得ざるが爲に苦悶すとなすか。若し果して然るならば近代の文明の效果は各自自活の道を需むるに至りたりといふことに歸すべくして、其れ己上に何等の深き意味をも含まざるものとせねばならぬ。實に憐れむべき文明ならずや。或は現に苦悶しつゝ努力しつゝある者、自身にも其れ己上自己の時代精神の自覺に深き意味あることを看出し能はずして、其の救濟の聲に援軍を得たる想を成すものも少なからざるべければ、之れ亦た一部の淺薄なる文明批評家思索家の允可を受くるに足るべき輿論の聲とも見るべきかなれど、近代の文明に此れ己上の意味あるを看出さずして措くは限りなく惜しきことである。吾人は恁かる思想に頭を沒し、物欲の奴隷と成り僅かに萠芽したる自覺から分るゝことの無慙なるを見るに忍びぬ。少くとも吾人の努力に緣りて近世の文明に新しき而して永劫的の大斷案が下して見たいのである。言は稍奇嬌に亙るかなれど世人が不可能なりとして省みざるに關はらず孤兒に無き母を與へたく、凡庸なる人に豐富なる智能と秀麗なる人格とを與へ能ふ道を看出して、現代を救ひ其自覺をして滿足せしめ、而して此の文明に意味ある效果を擧げさせたいと思ふのである。來れ密教の阿字本不生の觀念よ、汝こそ現代の精神に投合して時代を救ひ且つは人生の永劫の歸趣を示す好個の思想ならずや、現代は汝を容れるべく其の精神を用意しつゝあり。密教が相應する時代は高祖出世の當時よりも、印度に於ける發生の時代よりも、支那の朝廷に一世の仰向を恣にしたる時代よりも、其の他

東西の歴史の何時の時代よりも最も相應したる時代精神を現代に捉へ得てをるではないか。

五

茲にいふ阿字とは單に五音の初めのアの音響ではない、精神的實在を言ふのである。物質的實在をいふのである。否な精神界と物質界との統合實在體である。阿字には實在界と現像界との區別はない。大乘佛教や教父哲學者のやうに佛と衆生と、神と萬像とに深き溝渠を造らぬ、佛も神も阿字なれば衆生と萬像とも阿字にして同一實在體である。阿字なればこそ佛に大定と智慧と慈悲あり、衆生にも人間畜生草木金石日月山川、其の他のものが森羅として駢列してをるのである。是等の現像は皆な阿字の本來の目的に協はんがために存在してをる。人の起居するのも、鳥の飛び獸の走り、石の動かざる虫の逼ふのも、美しき音樂も歌聲も、プレトーやカントや釋尊や基督や其他の大思想家も皆な阿字一實の顯現である。而して此等のものを外側から見て我等は現象界として、個々に區別せられ、其の個々の間には何等の統一もないやうではあるが、之れを内側から見ると一の阿字實在體の貌其のまゝで經文には其れを曼荼海會と說いてをる、曼荼海會といふと何やら遙かな空閑中の出來事のやうではあるが、其の實たゞ此の現像界の狀相を打眺めたまゝの貌である。

六

されど是れだけならば阿字の觀念には何等の妙はないので、普通にいふところの現像即實在論は此れに似てをる點が多いが、阿字論は此の似た所のある上に全く其の性質を異にしてをる。而して其れが價値のある點である。基督教は神が世界を造つたといふが、其の中にも實は種々の說があつて、神が世界を造つたのであるから、神は能造の原理にして全知全能であるが、世界は神に造られたものであるから神ではないといふ。或は又た宇宙は全く神の造つたものであるから世界も能造者と同樣に神であるとして、依然現像即實在の說を主張するものもある。大乘佛教の眞如緣起說なども同一にして、阿字の觀念も同一の徑路を辿つてをる、而るに阿字の觀念は尙ほ進んでいふのである。現像界の個々物が神と同樣の全知全能を有するなれば個々物には阿字全體の顯はし得る不思議の力と齊しい力を有つてをる、神に世界原因の大能力がある如く個々物にも其の全能力が頒たれてをることを見るのである。是れが他の大乘佛教、基督教哲學及西洋の現象即實在論と密教との違ふ所である。然るに此所までゞあれば尙ほ密教の壘を摩すべく見ゆる教理が他に一つある。其れは華嚴經に顯はれた思想で、華嚴經に彼の芥子の一粒と須彌山の廣大とを比較して尙ほ大に優劣のなきことを論ずるは、則ち現像界の個物と實在全體との輕重を見ぬ。されど是れとても敢て奇とすべきでない。何となれば現像即實在論を押し詰めたならば是非とも此處までゆかねばならぬであろう。さて押し詰めて得る所は何ぞ。現像即實在といふまでゞ、たゞ現像界に多少の意味を附け添へたるまでにして、何等得る所もなく只管ら其の理路を往返せねばならぬ。阿字の觀念は爾らず。かの華嚴經が終局の到達點と爲した る圓融無碍の論を以て却つて其の出立點として、獨り現像即實在論の最終の效果を收めてをる。而して其れが現代の精神が最も渴望する自己の不滿足を醫し、自己を改造する唯一の方法として無き母

を孤兒に與へ、凡庸なる者を改造して賢明ならしむる實踐的宗教である。

七

阿字を縱横に說き得たものは一行の大日經疏にして、既に事々無碍圓融の思想が其の出立點を成すも、阿字は其れ己上に出て獨得の妙趣を發揮するのである。前に述べたる如く宇宙に森羅として懸れる現像の一々の個體は阿字其のものにして、各々の個體は阿字と等しき功用を有して、阿字が唯一眞神の全能を有する如く、個物も亦唯一眞の神の全知と全能とを有するが故に、阿字の本質を語れば、現像界の個物の實相を語るに等しいのである。されば阿字の一字を明かにして宇宙は卽ち解決を得るのである。

八

然らば阿字とは何ぞ、阿字の功能とは何ぞ。遙かに宇宙の大祕密を開發する不思議の鍵なるだけに、其の內容の複雜なる、其の靈能の神祕なる、たゞ錯愕の外はない。阿字とは云何なるものであるか。其の異名の有る限りを羅列するだけでも其の內容の云何に豐饒であるかは判る。

或は一乘如實の見といふ。然らば阿字は天臺にいふ一念三千の妙理にして、現像の個體に一々に十界を具有することを顯はしてをる。

或は無上大果の義といふ。然らば阿字は佛敎の最高理想たる涅槃の境である。

或は法界體といふ。然らば阿字は宇宙の實在體にして世界原理である。

或は毗盧舍那といふ。然らば阿字は神の如く絕對の人格を有する大日如來である。

或は平等智身といふ。然らば阿字は金剛頂經に顯はるゝ如く、大日如來が不思議の業用に依りて、三十七尊の曼荼羅の諸尊を示現するのは則ち此の阿字の業用をいふに過ぎぬのである。

或は一切種智といふ。然らば阿字は胎藏四重圓壇の曼荼羅の諸尊を現はして、金剛薩埵己下の諸大菩薩の前に示し、現實界の實相が無趣味なる山川草木日月人畜の如き、無趣味なる假像の駢羅たるに非ずして其等の現像は一々に美妙なる人格を有し、其の人格は雜然と排列せられたるものにあらずして、整然として其の處を守り、各々深き意味を標徵し(三摩地に住すといふ)各貴き法を說き、各々美はしき舞踊をなして、無限に廣き宇宙に優遊せるものなることを敎へて、諸大菩薩を喜ばせたのは之れである。

或は色、心、實相といふ。然らば阿字は、

色＝物質にして、經には干利多心とも自性淸淨心とも奄摩羅識とも眞如とも名け、

心＝精神にして、經には悉多心とも名け阿梨耶識とも實知とも名け、

實相＝色心不二にして、現像界の個々の事物事像が皆な色と心と物質と精神とに依りて或は物質

現像を示し、或は精神現像を示し、或は物質と精心との相關の現像と成り、千變萬化して種々の活動を成し、其れ〳〵に意味を示せるは皆な阿字の自然の目的に協ひ宇宙の目的を描き世界の意匠に基づけるものにして、因緣成の假りの戲れにあらざる故に、此の實態を經には本不生と名け

たのである。

或は之れを密印といふ。密印には身と口と意との三種がある。然らば阿字とは身と口と意との三者にして、現像界中に個體あるものは皆な是れに藉りて己れを造り、己れを發展し、復た己れを縮少するものもある。何んとなれば人は人らしき舉動を爲し、人らしき言語を有ち、人らしき意思を有ちて、人格の高き大なる人は高き大なる動作を爲し言語を吐き意思を働らかせ、人格の卑き小さき人は其れに相應したる舉動と言語と意思とを有ち、鳥は鳥らしき獸は獸らしき虫も魚も何れか然らざる。金石草木山川何物か此の三つのものを持たざる。而して自己に滿足するものは滿足せる今の自己に相應はしき舉動と言語と意思とを持ち己れの地位を發展向上せしむるには其の目的の地位に相應はしき動作と言語と意思とを有たねばならぬ。是れを有ちさへすれば何物にも成れぬものはない。此の身と口と意とが其れに成りさへすれば何物にも成り得るといふことの思想が則ち祕密教獨得の發見にして、此の教が實踐的宗教としての立場で、他の論理的宗教や哲學と根本に異ふてをる所である。佛は是れを如來の大祕密として尊重せられるのである。是れが阿字論の生命で近代の精神を救ふ唯一の途とは其のためである。大日經に廣く阿字の實體論や目的論や其の他種々の說を爲すのであるが、要するに其れは此の密印を覺らしめるための餘論で、經の中樞思想は之れである。高祖は三大論を立てゝ實在體の廣大なることや、實在界の深遠なる狀相を說かれたが、其の根本立出點は三密の妙不思議に依つて卽身に成佛するにある。

卽身に成佛せねば三大論で何の價値はない、されば三大論でなるべく見へた書籍の題を冠するに到つても其の名を以てせずして卽身成佛義とせられた。然らば何故身口意の三密に此の不思議の妙用あるかならば身口意は上に顯れたる如き阿字一實體が自由に活躍する手足であるからである。佛の動作を爲し、佛の說く法を說き、佛の有てる意思を有ちて、佛に成れぬ法はない。菩薩にも羅漢にも人にも天にも畜生にも皆な此の三密の働きに依つて成り得る。現に吾々は人間の動作を爲し人間の言語と人間の意思とを有つてをるから人間に成つてをるではないか。禽獸虫魚も皆なそうではないか。人間は佛の身口意、菩薩の身口意を有ち得ぬから詮方なきにあらずやといふが、有ち得ぬことはない。有てよとばかり人間に與へて與れた教へて與れた其れが大日經である。吾々は其れを故意に有たぬといふてよい。是れを佛の加被力とも大慈心ともいふのである。而して斯れが此の經が餘經に優れて尊重せらるゝ所以である。現に高祖の如く其れを有ち得た人さへあるではないか。而してかの三密も阿字の外はない。

或は一切教法なりともいふ。然れば阿字は實修實行の軌道といふてもよい。論理的歸結といふてもよい則ち阿字の論理的の決論に從ふて其の軌道を蹈むのは則ち上にいふた三密の方法である。阿字の論理的歸決とは本不生の原理で、軌道とは眞言と印契と觀念とにして、身に印契を結び、口に眞言を誦じ、心に觀念して本不生の論理を誤らねば想ふがまゝに往く所に往き得るのである。

九

其の他阿字には種々の名目ありて、其の名目はそれ〳〵に自ら阿字の特性を顯はすのであるが、要するに已上述べた如きものである。然るに此の字の意味が餘りに廣く餘りに阿字萬能的に說いたために、さらに相互間に聯絡がつきかぬる傾がある。最初からの名稱を再び茲に繰返せば或は實在體とも說き、或は大日の人格にも見、或は法敎とも見、或は單に眞言らしくもあり、或は身口意の三業とも說き、或は金胎理智の曼荼羅とも見、或は現像界の個物とも見、或は世界原理の歸結とも見、其の他今は擧けざりしも或は一呪術に過ぎざるが如くも說き、或は命根とも氣息とも說きて、雜然たること魔女の投げたる種々の糸と針との如く、何れを其れと整正すること能はざるが如くである。勿論一切が阿字であるから、所有題目の阿字の一字に結歸せらるゝには不思議なしとするも、其れにしても餘りにアトランダムにして是れが聯絡を取り統一を計ることは頗る困難であるらしい。從つて後世の論匠が阿字に關する說は汗牛充棟も實ならずではあるが、かの魔女の糸と針との混亂をして更に混雜せしめた傾がある。然るにたゞ高祖のみありて是等の混亂を破り魔杖を振りてさしもに一亂したる思想を統一し整正した。其れは卽身義の三大論である。

十

卽身義の文の上にては强いてかの混亂せる阿字論を統一せんとしてた迹を看出し能はざるが如きも、自ら是れに依りて統一せられたるこそ不思議なれ。何となれば大日經及び疏の中に、

(一)阿字を實在體と說き、世界原理の歸決としたるは高祖の六大體大の說と成りて顯はれ、
(二)阿字を大日の人格と見、或は金胎理智の曼荼羅と見、或は之れを現像界の個物と見、或は之れを法敎と見たるところなぞは高祖の四種曼荼相大論として顯れた。而して、
一、阿字を金胎の大曼荼羅と見大日の人格と見たるは大曼荼羅にして、
二、之れを世界現像として見、或は阿字より種々の三昧形を出す文なぞより見て三昧耶曼荼羅と成し、
三、或は阿字を法敎とし、眞言として說けるを法曼荼羅とし、
四、かの大曼荼羅の諸尊が種々の威儀事業に住し給へるを以て羯磨曼荼羅とせられた。
(三)阿字を復た身口意の三業と說き、呪術とし命根とし氣息としたるを以ては高祖の三密用大論と成れるのである。

十一

恁くて經及び疏の阿字に顯れたる體相用は高祖の手に入りて體大＝六大、相大＝四種曼荼羅、用大＝三密の三大論となりて計らずも卽身義に顯れた。

言路の序なれば一言を高祖の雄大なる襟度に擎げねばならぬ。高祖は阿字の一原論を開明するために三大論を以てして、左しもの複雜なる阿字論に整然たる組織を與へ之れに聯絡あらしめ統一あらしめたるは千古の大天才の發露したるところなれば、例ならば高祖はかの三大論を振り翳して其

の大鐵案を矜るべかりしに、左はなくして折角の三大論を押し隱さんばかりにして、卽身義なる名を冠せられた。元より當然に來るべき名稱にてはありたらんも、矜りを主とする人の眞似ることの能はぬところである。

要するに阿字一貫の妙理は三大論と成りて、初めて其の思想は明かに成つた。而して此の三大論は頓て實體論と宇宙論と人生觀とに變裝して出で來る日は蓋し遠からぬことであらう。而して此の人生觀がかの實體論と宇宙觀とを根蔕にして出で來るときが、眞に現代の精神を得ることの能きる日である。

十二

阿字を根底とした人生觀には一種の神祕力がある。此の神祕力を提げて時代を救ふたならば、時代の人が裏に踊躍せる向上の發展の思想、則ち永劫に醒めんとして裏に催ふしたる自覺は直ちに塡充せられて自力的努力を理想とする、近代文明は最後の勝利を得るであらう。生中に此の覺醒を欺いて一時の慰安を與ふる如きことは大丈夫の採らざる所である。迷ひ苦しむだけは迷ひ苦しましめよ、而して根底から改造する大勇猛心を振ひ起させねば駄目である。

終りに臨み寄語す吾宗の士よ、諸師は斯くも深遠なる敎圈の內にありて、時は今正に其敎理を要請してをる。何故に奮勵一番して此の光榮ある文明の舞臺に踊り出んことはせざる。師等は此の敎を最尊無比と矜るも、從來の研究法に委せてゐたならば、畢に此の稀有の敎法を提出して天下の批判を乞ふの期は來ぬであらう。師等には世に出づるに種々の準備を要すゐならん。然も其の中の最大急務は新しき研究を積み、新しき語を以て、新しき方法に依りて此れを發表せねばならぬことである。舊來の符徵一眞に符徵に過ぎざる、術語を交換して滿足せる間に時機は可惜去らん。かくて世を救はざる、世に猶も〳〵益なき團體として此の妙敎と共に吾等は葬られて終ることを記臆せねばならぬ。將た法の大罪人たらずして止まんか。

阿字之攝理

回憶すれば明治三十九年七月吾修養團が南河內郡の一村に孤軍を擁して旗幟を飜へし、五箇の綱領を提げて敎界に立ち向ひしより旣に五星霜を經て苦鬪惡戰具さに嘗め盡して尙且奮鬪の餘力を剩せり。然れども往事を追回すれば轉今昔の感に堪えざるなり。今や兎も角くもして本誌は第五十號を發刊することを得るに到りたるは勿論社會の多大なる同情に因るものなれば、吾等同人は斯機會を利用して茲に深厚なる謝意を表す。

謂ふ勿れ只徒らに命脈を長ふしてす效なかりしと、人の長壽を保維するは自然に攝生の法に則れば、吾等同人と雖不節制なるが如くにして又た何れにか節制に協へる處なきに非ざりしに依らずんばあらず、而して此の五十ケ月間に得たる實驗は事件其ものは語るに足らざる屑々たるものな

るも、事件より得たる教訓は曾て之を發表する機會を有せざるも卒爾に捨て難きものなるを覺ゆ。

吾徒は綱領に於て藝術が眞言宗の面目を發揮するに就ては、最も重大なる綱目たることを唱へたるに、或は眞言宗の何物なるかを知らざる者の言こと罵り、或は狂者の囈語として一顧に値せずこと詆りたる人なご種々なりき、然れごも吾徒が眞言宗に對し最も新しき提唱を爲し最も重要なる主張なることを信じたる綱目なるだけに、不斷新しき意味の付加はり來りたるが、ゆくりなくも五十號を發刊する今日に到りて其の主張が半面の走路を辿りつゝありて、他の半面が閑却せられ居たることを發見せり、閑却せられたる半面こは何ぞや之れを語ることも亦た何かの因緣ならざるなきか。

從來の主張は實は藝術を一言にして阿字界の美の表現なれば、阿字界に游泳する眞言の阿闍梨は藝術的の技倆を供へざるべからずこ云ふ一面なりき、然れごも之にては尙不充分なりき、藝術は阿字界の美の表現の術なることは其の儘にして、之れに阿字界の一大意匠が則ち藝術宗こして眞言の阿闍梨の手に現はるゝ意匠ありて、其の意味からも亦藝術こ眞言宗こは離るべからずこ云ふ主唱を加へざるべからず、阿字界が盲目的に蠢動することを緣起の法こ云ふにあらずして、一木一草皆阿字の意匠に俟ちて春芽を出し夏綠して秋凋むものなることは、茲に多く論ずるの要なくして阿字界の意匠其のものが藝術なることを謂へば足るなり、冲天に懸れる太陽も晨星も太陽の周圍を周遊する地球も、地球の周圍を包む大氣も大氣に包まれて棲息する人も鳥も木も、人を乘せ鳥を養ひ草を育つる土地も水も日光も何物か無意味に存在するものがある、何れも阿字の大宇宙に其の意匠の儘にして、名手の攝容の爲めに盤上に定められたる位置を保ち遣られるまゝに或は進み或は退き或は相擊ちて新しき局面を表現する駒の如きものは宇宙の凡ての事象の運命ならずや、阿字は則ち意匠家にして藝術家なり、此の阿字の意匠の法則を辿つて大頓大悟の道なる三密の行軌を規定したるものは眞言宗の經軌に非ずや、阿字に意匠なくんば三密の行軌は何を規模こして規定せられたるか、所依なき無法の規定は畢に無用に終らざるべからず、三密の行軌が阿字の意匠に基けるものなる以上は阿字其のものが意匠家なり、何こなれば阿字其のものを規定し意匠して阿字を支配し得るものは他に需むべからざるに非ずや、既に美妙なる意匠を立てゝ美妙なる天地自然を創造す、阿字は大藝術家にあらずや、而して儀軌經疏に顯はるゝ三密の行軌なるものは阿字の意匠書にして大藝術家は大意匠を發表すればなり。

然れご上にも謂へる如く今は阿字が大藝術家たること、而して阿字が大意匠家であることは今の論ぜんこする處に非ずして、此の阿字の藝術が日常の生活に對して繪畫、彫刻、音樂、詩歌の如き人生に須要にして缺ぐべからざる要素を爲せるが如く、阿字の意匠が卑近なる併しながら日常の生活に必須にして、忘るべからざる要素こ成れることを知らざるべからず、語を換て謂へば儀軌則ち阿字の意匠書は日常の卑近なる生活に就て云何なる效力あるものなるかを明らめざるべからず、之は自然に些細なる事例に據らざるべからざるも、其些細なる事例は復直に阿字の大意匠の內容を窺ふに足らんか、例せば、商人が商業を營む、航海者が航海を始める、人が結婚する、其他吉事凶事の何事にしても此

等の事を無事に而して幸多く怡悅ならしめんこすれば、

一、門の内外を清洒して不淨を留めざる事。

二、神棚、佛前、墓所等を淨灑し時花、燈明、神酒、洗米等を獻ずる事。

三、座敷を淨洒する事。

四、額、懸軸、挿花、茶、火鉢、洗水、手拭、敷物、夜具、食器等に注意する事。

五、戸、障子等を繕ふ事。

六、神佛を崇敬し冥衆を供養し且つ尊信すること。

七、主人は温顏にして和言なるべく、家族は從順にして愛樂なるべき事。

八、成るべく多くの知人を迎へて欵待する事。

九、無用こ考へらるゝ費用を節し分に應じたる失費を節せざる事。

十、怨家に接せざる事。

十一、貧人に施物を爲す事。

十二、今行はんこ欲することを一心に念じて成就を更らに疑はざる事。

十三、最も攝生に注意して病氣等不時の災厄を逃れんこ念ずる事。

十四、事一段落すれば感謝の禮を冥衆に怠るべからず。

此れ等は阿字の大意匠を重んじ自然の妙に歸順して、事の志に協ふ妙道なり。

然るに現代の日本の家庭に於ける人士を見るに此れ等の大事なるを知らず全く無用の手數こして顧みず、偶々之を爲し之を口にするものを以て舊弊こし御幣擔ぎこ嗤けりて、之を爲さゞる事を以て矜れる者比々こして皆然らざるなく、家庭に家風なく、家族に行儀なく、生活こは自門の一族のみの食ひ且つ着る事に限るこ爲し、願ふここは願ふここに邁進すれば成就する者こ爲し他に何事の手段をも盡さず、之れ冥天冥衆の存在を信ずるここ能はざるより來るものなるここを更に顧みざるなり、斯かる人が例令非常に窮地に陷つて後俄かに神佛に供養するも效あるべくもあらず、之れ己れの損のみならず決して子孫の爲めに非ず、或る者は時に天に勝ち阿字の大意匠に悖りて尙且つ富を造り名譽を得るここなきに非ざるも、災禍倏ちに躬に迫りて直ちに己を壞る、己れ惡運强くして天を欺くここを得るも子孫は直ちに祖業を辱しめて祖運の强からざりしここが寧ろ幸福なりし程に悲慘なる境地に陷る、乍然之れ祖父の業に於いて大欠陷のありしが爲にして獨り不肖の子孫を嗤ふは嗤ふ者亦た阿字の大意匠を曉らざるに因由す、然らば何故に此れ等の些事が大効用を成すか、言ふ迄もなく阿字の大意匠に攝理せらるればなり。

吾徒は果して此の攝理に協へるか之を知らずこ雖五十號、百號、千號、此の攝理に協はんここを謀らば敢て期し難きに非ざるを信ず、少くこも繼紹を要こ認むる間些の憂慮を用ゐざるは從來の經驗が證明して餘りあるに非ずや。

吒字無捨施

風が西に吹けば西に廻り東に吹けば東に廻り風車のやうに皆がぐる〳〵舞に舞ふて居つて末は云何に成り行くのであらう、數年前であつた某富豪が高野山へ來て語つたことがある、今の宗教家は腑甲斐ないから助力しやうと想ふても馬鹿らしく成る、是からの宗教家は社會事業特に慈善事業を行らねばならぬと謂つて暗に慈善事業を行らねば僧侶でないかのなうな口調を漏らしたことがあつた、其時に想ふた何を生意氣な、其樣な考であるから所謂富豪等と云ふものが追つけ泣かねばならぬことが出來やうぞと憶ふて居つた、今の處彼等富豪が泣く程でもないが泣き出さねばならぬ方向に立つてをることは明瞭である。

幾干救ふたところで救ひ切れることのない多數の貧人で醫藥を給すれば食物を要求し食物が足れば衣服を要求し衣服が足れば住居を要求し渾てが足れば地位や名譽迄も要求し横着に成り贅澤に成り始末のつかぬ而して怠墮なる貧賤の徒に氣兼苦勞せねばならぬと云ふことが果して國の國民相互の利益だらうか、何にも信ずる處も賴る處もなく風のまに〳〵動く社會は憐れなものである、然れど善しと想ふて行つて居るうちは是非の判斷もつかぬであらう、吾等は吒字の字相字義でも語つて、施與でなければ世が立ちゆかぬと想ふてをる憐れなる經世家に對し、彼等は貧人を蔑侮するものであるから貧人は何にも富豪達の憐れみを買ふべきでないと云ふ事を知つて富豪のイヤ〳〵ながらの恩惠を避ける方に廻らねばならぬ、今の世の識者の中には施與が慈善であると想ふものゝ半分に對して、斯かる施與は無意味である而して有害であると云ふことを自信し且つ發表するものが半分はあつて欲しいと思ふ、素より時代に瀰滿せる救濟事業謳歌者の中に立つて非救濟を喚ぶものゝ不利益なるが爲めに聲を密めてをるものも少くはなからう。

吒字は施與の意味である、之を說くに字相と字義との兩邊がある、字相から謂へば物を施與するので常に言ふところの施である、施は菩薩の修めねばならぬ六度の行の中には檀那波羅密で、之れを修するには有緣の人に限らず無緣の衆生に對しても同樣に施して又た財物に限らず生命をも肉血をも施してさらに惜しまぬ法を施し我が修したる功德をも施すので是の行を修したる大菩薩方は決して尠くない、古昔の諸佛が其の成佛の因緣を說かれた中にも此の施與の願の爲めには隨分に悲劇の演ぜられたこともあつた、施與は常に美談として善事として傳へられてをる、隨つて宗教の中には此の施與を勸めぬものはない、時に近代的宗教と謂へば殆んど施與が生命であるかのやうに成つて居る、是れ併しながら吒字の字相である、世間普通のことである、聖人の事ではなくして凡人の道である、聖者が時に施與を爲すこともあるが其れは凡夫の道を忘れられぬからである。

吒字の字義は施與不可得である、此の不可得には消極的と積極的との兩面があるが先づ施與を達觀せねばならぬ、人に施すと云ふ、何物を施すか、誰れに施すか、施す人は誰ぞ、我れも人も均しく淨菩提心が有る淨菩提心とは虛空に充滿する一切の財寶を貯藏するところの寶庫である、我れも人も其寶

庫である、我れ等の指の尖きよりも毛穴よりも一本一本の髪の毛の尖よりも常に無量の財寶を雨らしてをる此の財寶を何故に人は拾はぬのであらうか。

我々は拾ひさへすれば可いのである、氷柱が日光に遭ふてほゝ〳〵と玉の如き雫を落すのであるが、其のやうに貴重なる財寶は此の淨菩提心であるところの我れ等より雨らしてをる、我一人のみならず、他の人も同樣に虛空界に充滿せる財寶而して其れは雫の玉のやうに誰れの全身よりも湧き出つゝある貴重の財寶を持つてをるでないか、世の中に貧人はない筈である、貧人とは此の寶の自己の所有なることを知らずして、人間の數へ得るほどの高の知れた所有を以て眞に己れの所有する金額であるかの如く憶へるもの之れを謂ふのである、虛空の財寶は皆な各々が他の財寶と何人の利益の衝突もなくして所有することが出きるのである、日光は甲の所有でもなければ乙の所有でもない、空氣もそうである而しながら自ら使用し、自ら專有してをるとき更らに他人が使用し他人が專有する日光や空氣と利益の衝突はないのである、莊麗なる富士山の景は富人貧人も共有である、雄大なる太洋の海水も貧人と富人との共有である、宏遠なる宇宙は皆な各個人の所有として同時に他の人の所有として更らに衝突はない、たゞ何々の前栽とか何々の庭園とか云ふ限られたる爲我的の物資に於いて衝突が起るのである、人は此の爲我的の小天地に踢蹋する限りを貧人と云ふのである、櫃に盛られたる飯は食ふことが克きずして握つて拋げられたる飯は之れこそ我れ等の喰ふべきものとして爭ふて嚙み合ふものがある、之れを狗と云ふ、人も狗と相去ること幾干であらう、狗の寄り集りたる世界には握り固められたる飯にあらざれば喰ふべきものに非ずと云ふ。

斯くて此の世界には貧人は絶へざるなれば、此の絶へることなき貧人を如何にして救ひ盡すことが克きやうか、然れども世に貧人は本來あるべき理なし。

皆が富めり皆が滿足なり、是れに對して何物を誰れか施さねばならぬか、誰れに我れ等は施を受けねばならぬか、自己の本來の所有すらも開拓せずして他の少さなる所有物に對して或は之れを悵み或は之れを羨み或は之れを惡む、其れは恨み惡み羨むものゝ非なるは謂ふまでもなきところである。

吒字の字義は無捨施である誰れに施すべきもなく施されるべきもなく、施したる物も施す人も、他の施されたる物と施したる人と同じ物の所有者である。

施與したが何等の施與にもあらず、現に施したと言ふ物質も實は其の施されたる人の指の尖きか毛の尖きから流れ出たるものであつて他人から他人のものを貰ふたと云ふではない、我れが我が物を他人に遣つたと云ふではない、茲に於て吒字の施與不可得には二重の意味がある。

一、消極的には人も我れも共に齊しき淨菩提心の虛空寶藏を所有してをるのであるから人に遣らんとしても貰ふて呉れる人がないのである、父と子と一つの財產を有して居るときに父が子に其の一部分を與へたからとて其れは施與ではない子が父に對しても同樣である、父は子に施すことが克きず子は父に施すことが克きぬ、設し是れを施與と稱するなれば施與に似たやうのことをして、施與じやと喜んでをるまでゝある。之れを施與じや慈善じや功德じやと云ふて賞める

ことが克きやうか、宇宙の財寶は皆な父と子との共同なるが如くなる故に施與は爲したいと憶ふても施與にはならぬ克きんのである、之れを施與不可得と云ふ。

二、又た積極的に言ふと我が所屬の物は同時に他人の所屬のものであるから我が使用し專有することは他人の恩惠に依り他人の施與に與つてをるのである、我れは一物をも人に施さず然しながら人は虛空界の有するものを使用し我れは之れを其の使用のまゝに允してをる、法界の一切衆生に其の使用と領有を允して居る、何んと云ふ廣大な施與であらうか、我れが一切を施してをる而して凡てのものが皆な生活して居られるのは我が施與に與かるからである、かの虛空界の淨菩提心の寶庫を開放して施與するのであるから之れよりも偉大なる施與はない、百萬千萬其れが施與であらうか、其れ等は自ら專有することの克きぬものを占有してをると思ふてあるから殊更らに施與と云ふ名目を立てやうとするのである。

施與は不可得である無捨施である、何人に依つて施されざるを恨み惡むか、何故に自ら其の寶庫を開く鍵を使用せざるか。

今の社會は沿々として救ふてやらねばならぬと云ふ事に喧しくして、救ふて貰らうなと云ふことは顧みるものがない、謂ふまでもなく救はねばならぬものもないのではなからうが、米國や英國や其の他の國の例で以て斯くもせねば治まらんやうに成つたとすれば國民も哀れなものであるが左程迄に急を要する救ひを喚んでをるものと見られるも遺憾ではなからうか、何んで近代は武士は食はねど高楊子と云ふ昔の風がなくなつたのであらうか。

機根萬差佛敎淺深所以龍樹曰如遠行人乘羊去者久々乃到馬
則差速若乘神通人於發意頃便至所詣如今此眞言敎名神通乘
不得疑云卽身何成神通乘敎其相如此是故立頓覺菩提自心成
佛之義耳（弘法大師）

玄字命息

一

息を爲してをるから生きてをるといふか、生きて居るのは命息があつて、吽字を呼吸してをるからであるといふ。然らば命息とは何ぞ則ち吽字の不思議なる形體である。阿字を命根といひ又た第一命といふ事は大日經に見る說であつて、之れに對して吽字命息とは金剛頂經の說である。而して深き興味と汲めども盡きぬ意味とは此の命息に保たれてをるのである。先づ其の本據を繹ねて見んに金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經の上卷にして一切如來大勝金剛心瑜伽成就品第七の文に於いて吽字命息に關する一場の深祕なる物語がある。金剛薩埵は一會の大衆の頭目として一字心大勝心を說き給へる時、衆くの大薩埵達は其の說を聽いて各々は幸福に盈ち光榮に剩れる、欣びを以て偈頌を唱へて金剛手菩薩を稱讃するのである。一切の菩薩も曾つて見聞せざる此の法敎を承つて我が心の祕密も解け

たり、此の金剛法に乘じて進まんと勇んでをる。折からに其の大衆會の中に忽にして一つの障りが有つて何れから來つたとも判らぬ、衆くの大薩埵達も此の障りの爲めに醉へる如く成りて奈何んとも詮方がなかつた。又た其れが何物であるかも知るものが無かつた。時に如來薄伽梵の面門は開けて微笑して金剛手菩薩を始め衆くの大薩埵達に告けて曰く、此の障りは何處より來るかといふに一切衆生の本有の障りにして自我所生の障りといふ、始めあることなく何處より來りたるにも非ずと。其の時に彼の障りは忽ちに本身を現して金剛薩埵と成る。頂上に一の金剛輪あり足下に一の金剛輪あり亦た心上にも一の金剛輪ありて滿身の光明を放つて一會を照してをる。其の時に金剛手菩薩は薄伽梵の許しを請ふて此の自生の障りに對する金剛頂の法を說かんとて次の頌文を說くのである。

若し此の障り便りを得れば、能く眞言師の所修の功德を奪はん。其の時に愛染明王の根本一字心を誦ぜば此の障りは速かに消滅せん。則ち常に自心に於て一の吽字の聲を觀ぜよ。聲は出入の命息に隨つて大虛空に等しうして、金剛堅固の體と成らん。秋八月の霧の清淨なる光明に照さるゝが如くして、自性所生の障りは便りを得ることなし。

恁くて彼の自生の障りは此の語を聞き畢つて忽ちにして消え亡せたのである。

二

此の一場の金剛の舞戲に就いて吽字命息に關する主要なる點は、

一、一會の大薩埵達が金剛薩埵の說を聞いて心驕り我が心の祕密は解けたり諸法は自性なく願もなく染淨もなしと欣びたる處に間隙を生じ、爲めに障りを成したのである。此の無自性無願無染淨に障りは付け入り易き時であつた。

二、障りの生じたる時大薩埵達は醉へるが如しと云ふ。此醉へるといふことが醉ふたのではない醉ふた如く息苦しく命迫つたのである。然らば何故に醉へるが如く成つたか、其れは本來俱生の苦しみであつた或るものゝ有らねばならぬものが無かつた苦しみであつた。無自性無願無染淨の心の驕りのために吽字命息の缺乏を感じた苦しみであつた。淵より投げ上げられたる陸の上の魚の苦しみであつた。

三、其の障りが現はれる時金剛薩埵と成り一會を光照したるに大薩埵は漸く蘇生したのである。此れは薩埵の吽字命息に觸れたので人工呼吸を受けた氣絕者の如く息吹き還へすことが克きたからである。

四、吽字は金剛薩埵の種子であつて而して同時に愛染明王の一字心である。金剛薩埵と愛染明王と如何なる關係があるのであらうか。何れにしても二尊は同一種子吽字に依るのである。而して金剛薩埵は茲では單に吽字を愛染明王の一字心と稱したばかりである。

五、吽字の聲を觀ずる而して出入の命息に隨ふといふ此の吽字の聲が出入の命息に成るのである。此の吽字の聲出入の命息が盈つる時大薩埵は全く息を吹き還したので醉へるが如き苦痛を忘れて却つて金剛堅固な體を得て狹霧にかゝつた秋八月の清淨なる月光の如く晝よりは朧ろな

併しながら美はしき金剛の身を保つのである。

三

無自性無願無染淨に達したる大薩埵も、吽字の命息を無きものには成せなかつた。無きものに爲たる時は障りに襲はれて、醉へる人の如く我れをすら喪はねばならぬのであつた。命息則ち此の吽字は然らば奈何なるものであるか之れを高祖の吽字義の御說から窺はねばならぬ。一の吽字は𑖀字を字體とし爲し、阿の丶點と、汙の𑖨點と、摩の・點と四字を合して𑖀字を成す、訶阿汙摩の四字とは何んであるか。

阿字は實在體にして其の實在體たることは平等一味の眞如の如きものではなくして、法界に充實せる精神と物質との無限に差別せる雜多の現象は孰れも阿字實在體に於ける豫ての差別相である。砂の堅く光りある、草の哀れに花咲ける、笑ふ、悲しむ、水の流るゝ、火の燃ゆる何にもあれ阿字實體界に於ける豫ての要意にして、我れ等の觀る現象界の差別相と其の變化と活動とは宛然らに阿字界の其れである。現象界の一事象が那邊まで而して奈何に變化し活動するかは今の科學に於いても充分の結論は得て居らぬが、若しも科學が其の發達の極に達して、一の事象が次から次へ變化し行く徑路を辿つたなれば砂が馬に成り馬が樹木に成り樹木が金鐵或は虫魚に成りて、最初の砂の一粒は法界の凡ての差別相を遍歷して何に物にも成り得ぬものが無いやうに成るであらう。豈に砂のみならんや。何に物も然らざるものがないのである。砂は法界の何に物にも成る。之れも阿字界の一々の差別相が互融無碍してをるからである。斯く差別相に充ちたる狀相を名けて阿字本不生と云ふ。

訶字は現象界である。打ち見たるところ春の緣に遇ふて花咲く、油と燈心との因緣に因つて光りがある、嬰兒は乳飲みて生育する、何に事も只だ因緣に因りて一時現はれたる暫らくの事象のやうであるが、之れ何れも阿字界の意匠ならざるはないのである。然らば阿字と現象と二つに言別けられるのは何んであるか。現象とは阿字が次から次へ無限に變化し活動して行く長き道程のうちの或る時間内の一の狀相を現象といふのである。天も地も無限に變化して行きつゝある其の暫らくの間の有樣を天體の現象、地球の現象と呼び、而して其の暫らくの間の前後の關係と其のものゝ體質を捉らへて因緣と云ふのである。訶字現象界とは則ち其れを云ふので、長き深き廣き關係のあるを阿字といひ短き淺き狹き關係あるを訶字といふ。何れから見ても同じものには相違ないのである。然るに此阿字と訶字とは單だ其れだけのものにして未だ凡夫と云ふことに關係はない。凡夫は他の石や木と同樣に齊しく阿字の大意匠に基くもので、長き阿字の變化の道途に於ける一時の溜り場所として凡夫と云ふ社會を形作つて居るのであるが、同じ阿字の假象としても他の石や木よりも價値ある些くとも種々の點に於いて興味のあるものは凡夫である。阿字界の差別相中に於ても其の地位は最も上層に位るし、阿字の終極の目的に相應する形に殆んど近いのであるが、其の凡夫の出所として而して阿字の理想に最も近い地位を占め得たる所以は次の汙字と摩字に依るのである。

汙字とは有るものを無しとする迷執である。有るものを無しとする迷執には種々あるが凡夫が阿

字の大意匠であるところの本不生の理を無しとして肯んぜぬ。是れが其の最なるものである之れを汙字の損減といふ。摩字は是れに反して無きものを有るとする迷執である。無きものを有りとする迷執にも亦た種々であるが阿字の大意匠から來た或る道途中の一事象に過ぎぬところの今の現象であるから、何にも取り立てゝ宇宙は見えかゝりのもので必ず斯くあるべきもの斯くあらねばならぬものとはすべからざるに、凡夫は己れの狹い短かい經驗から割り出して、現證であるから斯くあるが實相なりと固執して其れに滿足するものは又た迷執の最なるものである。之れを摩字の增益と名けるのである。

四

凡夫の價値は此の汙字の無しと迷執するとと摩字の有りと迷執するとの二つに係るのである。若しも阿字本不生の無限の變化と活動とを無しと固執せぬならば阿字界の本來の傾向のまゝに次から次へ變化し去つて畢ふので之れを或る一定の場所に且らく引き留めて置いて、其の中に含まれてを る細かな變化に富んだ面白味はなくて濟んだかも知れぬ。例へば人間は阿字本不生なごなしと固執するから、其れが强い力と成つて人生なるものが淡々たる無味なるものでなく、長い歷史と興味を多く遺して往くのである。若し阿字本不生が有ると皆が知つて無しと迷執するものがなかつたならば、世界は單だ無餘涅槃のみを憬れたといふ羅漢の如き者ばかりと成つて、何れも樹下石上で生活する寔に淋しい世であつたであらう。彼等には歷史もなければ地理もない春も來ねば秋も來ず花も咲かず鳥も歌ふ必要を認めなんだのである。若し又た此現象界に迷執して此處で可し此處の外に往く處がないといふ固執がなかつたならば、阿字界の或る道途に暫らく引き留つて、此の世界の中の充分の意味を發揮せずに畢つたかも知れぬ。此の固執がある爲めに城を建てゝ戰つたり、船を作つて運んだり、一家が寄り一族が集り、忠や孝も行はれ、奸も邪も行はれ、建てたり壞したり、或は悲劇を演ずることもあり、或は喜劇を演ずることもあり、學文も成き、研究も成き、宗教も成き、教育も成き、詩歌も藝術も此の間から成き、尊卑高下も成きて社會百般の面白き現世相が描かれるのである。而して此れ等の事象が皆な阿字の內容を豐富にするので、阿字の充分の力を發揮する因緣に成ると想へば何事にも深い意味が見出されるのである。何となれば是等の事象が亦た皆な其の中に仕組まれてをる豫ての意匠であるからである。而して其の意匠を遺憾なく引出して展げて見るには是非とも阿字の一道程に固執して成るべく長く之れを引き留めねばならぬが、之れを引き留めるには假象が有ると迷執するに限る。而して有りとばかり迷執するよりも無いと迷執する方が尙ほより力が强く成る。汙字と摩字とは此の二つの力で、其れを以て阿字界に對しては汙字が無しと迷執し、摩字は現象界の訶字に對して有りと迷執する。茲に此の二つが集つて一種の不思議の力と成つて居る。此の迷執が生んだ現實の或る力である。其れは何にか則ち凡夫の命息である。而して此れを吽字とするのである。

五

凡夫に吽字則ち命息のある限り阿字界の自然的の變化と活動とに抵抗して、阿字の究極の目的で

あるところの本不生の理に背かうとする。隨つて阿字が平等的であれば凡夫は個人的に走る。阿字が圓融的であれば凡夫は隔歴的に走る此の阿字に抵抗しやうとする力此れが凡夫の價値である。凡夫の面白味は茲にある。然らば法界には阿字の大目的に一致せぬ阿字の手にも敵はぬものがあるでないか。阿字は小さなる凡夫をすら拘制して自由に取扱ひ得る位の力がないのかと云ふと然うではない。之れは二つの意味がある。一は阿字界の個々の事物は百個百種、千個千種決して一樣の性質と目的とを有つものはない、差別相のあらん限り各々が別々の目的と性質とを有つてをる。而して各々孰れも其の個性を極端まで發揮させやうと努め爭うてをる、其個性の發揮が阿字の意匠に基くのであるが、此の意匠が阿字の目的の一つであらう。二は恁く個性は自己の特性を極端まで推し進めやうとする爲に自然に阿字の大目的則ち究極の目的には背いて、其れから一歩でも遠ざからうとするが、之れが又た阿字の豫ての意匠に叶ふのである。松王が梅王や櫻丸其の他の一族から遠ざかる程菅家の擁護に成るやうなものである。抵抗力と被抵抗力との一致、遠心力と求心力との一致が則ち之れである。

六

吽字命息が無かつたならば凡夫は直ちに死んで畢ふ、死は凡夫の障りである。吽字命息のなきところには此の俱生本有の障りであるところの死が來るのである。法界宮に於ける大薩埵も此の吽字あるを知らずして無自性無願無染淨の阿字の究極目的にのみ志すときは、法界宮に於いても同樣に忽然として障りが生じて醉へるが如き苦痛を感ずるのである。則ち吽字なきところ自然に其處に本有俱生の障りがある。凡夫に取つては死であるが上位の菩薩にも或る障りがある。而して吽字は金剛薩埵である。吽字なきときの障りも金剛薩埵である。吽字命息は金剛薩埵の積極的の實現にして、彼の障りは金剛薩埵の消極的實現であるから、障りは如來の加持に依つて倏ち金剛薩埵と成つた。凡夫が阿字の實在體を虛無なりと迷執するとき、現象界は實有なりと迷執するとき此の有無の二迷執から阿字の究極目的であるところの變化と活動とに乗いて、些しでも阿字から遠く離れやうとする努力が凡夫の命息と成り、此の理想を吽字と云ひ、此れが人格を取りて金剛薩埵と成るのである。吽字は種子にして命息は其の三摩耶形なり。而して金剛薩埵は吽字命息の尊形である。種三尊の緣起は寔に不思議にして而も實證である。汝は息してをるか。然らば汝は吽字なり。金剛薩埵なり。凡夫の生涯の心核は命息である。息命は凡夫の凡てを代表す。凡夫の凡ての事件も皆な此の一事に係る。凡夫を現實的に標象するものは命息なり。息命の標象する者は吽字なり。吽字の標象するものは金剛薩埵なり。故に凡夫を金剛薩埵なりと云ふのである。汝は命息あるか。然らば汝は金剛薩埵なり。此の命息とは標示的の假說ではない。我れ等が瞬間も止めて置く事の克きぬ現に呼吸して居る氣息にして、氣息あるところに命がある。之れを吽字と云ふ。凡夫に在りては此れが阿字に背きて阿字の意匠を端極まで開展し、凡夫の價値と凡夫の趣味とを最も深からしめ、上位の菩薩にありては彼の自然俱生の或る障りを除いて、秋八月の狹霧に包まれた月の清淨なる光りの如く美はしき安樂なる金剛身を得るのである。吽字命息は凡夫に對して謂ふのであるが、凡夫も菩薩も皆な此の二迷執から成りたつた吽字を生命とせねばな